甲戌瑣錄

七

昭和九年十月上浣起筆

特別
14
1919
462

176727

甲戌瑣錄

昭和九年十月上院起筆

○梵鐘の彫を聽も感興を起すのは佛教感化と東洋趣味とあるが我々の梵鐘を撞くと物の哀れを感ずる秋蟬のすだくを聽くと物の哀れを感ずるが如く西洋人は鐘彫を聽くと陽氣さうな西洋の寺院の鐘の音刺激異つてゐるが耶蘇教と因果毎日を送かす感化を與へるから寧ろ素晴の感化を與へるから、此點は東洋と甚だ異つてゐる。恐らく西洋人は日本文明ちがの鐘彫を聞いて詩を解することが出來ないであらう。例へば後で說く秋の東洋趣味が

38- 9248

蹄鐘を表こび又(本)寺の鐘影を愛すんでも、西洋人のこと理解が出来ないであらう。

自分は曾て鐘影に就ての所感を絶筆に書いたことがある

が今亦閑と乗じ、鐘影を詩に入れたものを坐間の詩集から摘録して見ること、致辛六七詩を挙げることが出来る。鐘影は詩人のらく仕ふ材料であるから、多くの詩人達を魅したことは、どんな洋人でも知るのである。詩人お名深い材料で、東洋人が鐘影で感興を起すかいなかは、一端を語ふものである。自分の題出しのは、必ずしも好詩のみではないが、沈鐘の風趣のあることは、殊に知鐘に用ゐられてゐる例を挙げると、「鐘沈残月塢、鳥去夕陽村」などがお

もしろい。又「烟鐘隔月懸塔、風笛遠人過橋」と云ふ六朝の詩句があるが、烟鐘の二字が妙味を起す致がある。又「野氣天鐘歴、鐘影山欲深」と云ふ詩は鐘の響で山が動くかの感がある。「小竹の影画れて風後林間無一葉、近岑蘭寺暮天鐘」とあるは、一葉を尚ぶる林間の寂寞境を暮鐘も添へて一段の淋しみを加へてゐる。又「僧寺花に春不見、暮烟生處忽聞鐘」とあるは寺の暮烟を隔てゝ聞くのみ、鐘影を少きも寺あるを知つたことは、「農鐘」「杜牧の詩句にある「欲覚聞晨鐘、令人発深省」「朝の鐘影」は「晩鐘の趣」に似て人をして発憧憬せしむることがある。鐘影は程度憧の情を起さ

ちるこの無い。元稹の詩に「蛙鳴蛩動二十年
前曉寺中」とあるのも共一例だ。鐘聲ふる時雨を無み
るの詩又へ「鐘聲新月時、人如晴雲」とある、鐘聲の
清閑の時間をトし得るこゝもある。「古木無人逕、深山何
處鐘」深山出る旅人も忽ち鐘聲を聞きて
ものゝ愉快のまゝである。鐘聲が夏時流を引く詩に鐘
聲流引月、江氣多沈山」などがある。
以上の如き半ば詩ゝ概しも鐘聲の趣の
こゝ少くゝも遠く聴ゆるこゝが、連続の聲を
くゝも疎鐘の響を聴くこゝ趣がある。詩人は
鐘の聲を酬ゝ酬ゝ、西文明人の如く「時有白雲」
疎鐘」「夜雨」とあるから鐘聲を聞くこゝもある。

い殊に除夜の鐘の新響の宵の焼き打ちから百感の此時を
集まり、人々の感情の錯綜する、なんが為めに除夜の鐘を
撞く為めに夜半まで寝ざる人が若しかまかつた中まで
鐘をつきつづける坊者の人がありて、鐘撞びどこの様
と誤まず判まる人もあつた。自分の経験からも除夜の鐘を
京都に於ては本山の所在地、巨鐘も名鐘も多くあつて、
除夜に各寺院で撞き出す鐘ことゆゑあらず
鐘の数味あるとまんべんなく京都と東京との
が自分の除夜に京都と東京と
鐘の寺の看板のやうなる大利益の巨鐘がある。名鐘がある。佛法の隆盛時代に寺多く建んだから、

鐘を鋳造した。鐘の名工が出た。鐘の造
鋳造の面倒なる形が多くなる。音響者が多く
けんぶつ。響くのは黄金が交せてあるまで
金属の化合も工風がある。相違
所謂名鐘と云
ふのは音響が第一。鐘の大梁
ばかりでなく。寺の焼失する
年経くれば以上の銘の長久
の名の長く伝はるのは文
の名を鐘に刻するから
あるであらう。秀吉程の豪傑も其後大仏殿の鐘銘
が禍となつて家康に滅ぼされた。鐘は鋳る業
のあるまで容易に運搬が出来ない

の有名である。乙の寺のあるものは（特に）やうなことがある。戒
隆寺とうつて鐘が他の寺に帰したものあらうがそうでなく
昔しの寺々の争奪が甚しかつた為め戦利品として
僧都が奪ひとつたやうなものあるであらう。亦動かす
と寺の境内から鐘を掘り出すこともある。こんなものは
の初年神仏混合を禁じられ、ごたく騒れ、鐘を土中に埋
しとのあるからもあるのだ。
鐘は寿命を長く保つてゐるから、田禄の失ひ寺が焼け仏
像まれに亡びても鐘は多く火禍を免かれてゐる。作り前後排仏
論が盛んであつた頃、梵鐘を傷し大砲に鋳直さんとの例
があるが、多くの鐘は免かれてゐる。支那あたりでの所在の大石
碑が建築の用材とされてゐるが鐘はそんな事変つて

鐘は変でない無事である。試寺や光明皇后の願ひ鐘
は奈良にあるし、宝塔や最澄の願ひ入れた鐘の
方は比叡の二山に存してゐる。昔しの賢哲の願ひ鐘の
数年間を今の人が聴き得るのは、鐘の寿命が長久である
為めだ、史蹟を回顧し得る最上のものは鐘だ。先つ推すべき
である。保護を要する所以である。
鐘は時を報ずるものであるが、寺とともに鐘がありても
撞きさるが、「樹深微透日、刹古不聞鐘」とも詩にある
る、時を今も聞かしめてゐる鐘である。「三更已過四更
破、行者寒山鐘屋」と云ふ詩がある。全体鐘は時
を報ずるのが其本務であるが、廃仏の汚濁を一掃せん
とするの仏法の本旨が、父祖相継承して一種の感情

を以つて聴くことある。[illegible]邦人の國民性（五・浸潤し[illegible]）ある。北
黙西洋人と異なる所がある。大鐘の寺[illegible]無いが、各戸
の佛壇にも小鐘があつて、佛を祈するに無相之[illegible]を撃
ち鳴らすのが例となつてゐる。深く人心に染んで國民性
を成す所以である。

○雅工事十六年の長日月を費し多くの生靈を犠牲に供
して、我邦未曾有のトンネルは漸やく奏功して本日（十
月一日）愛知県瀬戸市に於て開通式を挙行した。無年熱[illegible]
に二年の雅きを聴き、いつ迄することか、或は[illegible]全に[illegible]
ハラいかと懸念せしめたるが今は成功して、科学者の[illegible]
の力の大なることを今更痛感せざるを得ない。[illegible]
きは今朝の東京朝日を掲ぐる所である。近こと通知を

科學日本の誇

地下の地震觀測所

丹那隧道に

エア・ロックの跡を保存

【電送写真】工十六年、愛知県瀬戸市に開通した丹那トンネルの開通式の前日を迎へた大丹那トンネルに科學日本を誇る二つの記念塔が輝くことになつた……

◇…その一つは雅工事の最重要部エア・ロックのあとを一切の機械設備をそのまま坑道は全部コンクリート巻にして保存することだ

それは西口坑門から七千フィートの地點を南に分れて百メートルばかりの個所から始まつてゐる、湧水激しく崩壊相つぎやむなく坑道を五間ほどに區切つて一尺厚味の鐵のダムを設け一平方吋四十ポンド（外界の氣壓をゼロとして）といふ強烈な壓搾空氣を送つてダムの中に坑夫を入れ就業三十分位でバタ〳〵仆れる潜函病者（潜水病と同じ）を多數出しながら掘進した約七百尺の坑道である

そこが自然と人間の死闘の史蹟として、同時に將來の隧道掘鑿技術の好資料として後世に遺るわけである

◇…も一つは我國最初のもぐらもち式の地下觀測所だ、トンネルの頂上に露る丹那地は箱根連ノ綿から伊豆半島に走るいはゆる丹那大斷層を中心に無數の大小斷層が集結してゐるところでいはゆる地震の名所だとあつて、東京帝大地震研究所で設けた地下の地震觀測所なのである、西口から二マイルと東口から一マイル五分の所にある横坑を利用した永久的施設で、既に地震計も持ちこまれ、丹那斷層の活動は絶大もらさず自動記録に現れ愈々學界に好資料を提供することになつた

【寫真は丹那トンネルの跨りもぐらもち式地震觀測所とエア・ロックの跡（右上）】

前頁の
続き

鐘は宗教上の樂器であり殊に巨大の樂器であるから、巨鐘とすると金に厚味があり音響の吟味がやかましい。音響が鈍重なる濁り強びある、下手な低い鐘の鳴らるのは。鳴つても音響が悪く揺ぶり又音響が拙手の心つかぬ。斯る鐘の凡鐘が樂器とまるる迄らるべく大鐘を鋳ることがある。土を据つて鋳型を作つてみたりをこしたことがある。珍らしい巨大のものであつたが、鋳造の結果失敗でもうれとゆへことがある。鐘を尊ぶのは其音響殿々として四隣に振震ひ其響きが遠く及び且つ永く傳かるるのである。のみならず、風流く斬く澄んで而も強く強かるけんかな

らの。こんを今度の巨鐘に求めるのは名匠の手腕を待つべきは南北であるが有名の寺院の鐘の多くは名工の作を係りまん〳〵特徴があつて鐘をゆゑことを趣味としてみるのである。東京山こんの三縁山こんの東叡山こんの浅草寺とこんの徳川家の菩提寺こんの程を特徴のあることを聞くこと

○書画骨董と非売を初回より六の河内屋今を聞くこと

ときこうの比、金崎の神田の紅葉館金崎に鎖ひ市中海へらるめて出発、日本を漫遊、仏国に出発仏者に就て講演した。仏国の千七百四年（寛永元年）サルマナツツアんが著つた基督教誌が架空の寺びあるのん、まんを無セ、王之芳士の院の院長ハンス

スローンがはじめまして出版したことや、皮肉を込めて名高かりし詩人スウィフトの偽書になることを看破されて、院長が恥ずかしくなる名答田舎者ケンペルの日本紀の原稿を爆ぜて其心しを出版したことなどを挙げ、スローンの手まくらの本関係の書が二程まで出版されたる後と其清法の著者がタイトル、ページ、出編目に日本皇帝の鎖国基礎と書いたのが識とされた台湾が終る日本鎖とされたのも明らかに因縁と語る。他の偽書の一に日朝鮮八幡裏書集を挙げ、朝鮮の後加藤清正の神特沙也可なるが二千の兵を率いて朝鮮に降り、その人が原題セラレタ金忠義の名を称ゆ、其の今度書比者大郎ラ重

橋原刻

祖鮮人と結ぶ交度関係日本部落をなしたるは沙也一の英雄なり、文集も生的ものをみるが日本すいぶんを関する文献に徴者なるべし。沙也可を降参二十九年のはるとは文集のものも降参六年の差歴を改まるれかく、北斗の誤説もあり、降参六年いは也可が二十二年の時投降したとすると絵巻先れ年まるのが、いろく小細工をしたしくなるがどうも、多分朝鮮役に捕虜なるべき日本兵が祖を立派なるべき為に低つたまで、墓裏書集の如くに朝鮮を称する偽書が今の日本の偽書の如し入れの得ることなるべし。

うくて墓所と日紀ひなるとは語つたのが大安ひなる

只に出お出人なのである。この家くは三久の小僧さんが、主人の部屋へ行つて、かういふ名

△キルりしない話がある。——去る人の足跡とは、ものだネ。

△人大仏かみ佐藤六右衛門氏が新しく造られたら、年代がハッ

△る人いつつて、六右の俳句の方が「成いた足野」が「麥」と

△野麥つ人は、佐藤六右といふ漢詩人が俳句出してゐた。そ

△野いあ人氏さ。

△たの俳句の興味が、この蔵巻は京都なとは——

△たの蔵巻は、「蔵巻堂」といふ古本

△たの三人に小僧をしてゐた人が俳に足野人の足さ。

△画田に、——画田小川町だつた人ネ。

△たの京堂は、「吉々堂」がその堂號であ

△たら京堂は、商品は、村幸からなど借りて来た

△ら京堂なとはこんな住店であつたか

△るも絵本がの商品として第一の質値値扱

△るはつ浮世絵が主としても絵が主となる。

△ふ家派もの村幸はそれ氏すると、所所あ

△ふ家派もの氏は、主としても絵が主となる。

△ふ家派もの氏は、主としても絵が主となる。

△ふ家派もの氏は、主としても絵が主となる。

『金の塊』『四方屏風』『父の恩』『芝居百人一首』を買はねばならぬ基本的珍書だとよくいつてゐた。――がこれらが珍書として擧げられてゐる所を考へてみても、當時の珍書――今日でもだが、珍書屋のいふ珍本が繪が基本であつた事が知れる。

△その頃はよく干店があつた。この露店の有樣が、今と違ふ。その頃の干店は莫蓙の上に本が並べてあるのだから、お客はしやがんで本を見てゐる。今日の干店の本屋は臺の上に並べてゐる。

△淺草の廣小路には干店が出てゐた

△上野三枚橋の忍ぶ川のところにも狂齋の繪など並べてゐた店があつた

△下谷の廣小路にもあつた。

△文行堂が――堀さんの屋敷地にゐたのを、今のその向ひ側へ、親父さんが引越したのだが、確か幸田露伴さんの家ではその軒並で、何か商賣をしてゐたといふ事を聞いた。

△文行堂も、赤門前の木内も、皆、元に淺倉屋にゐた人だから、これらの古本屋は、淺倉屋系統といへるだらう。

△淺倉屋は、古い、創立は元祿だといふ。元は硬いものばかりで、あの附近の坊主相手だから、硬いのも當然だつたらう。

△淺倉屋の先代で、今の主人の祖父に當るのが、文積で、この人の時代が淺倉屋の盛時だらう。

△淺倉屋の今の主人は、與兵衛から養子に來た人で、この人が軟いものを取扱ひかけたのだ。與兵衛は鮓屋の與兵衛である。

△今の主人久兵衛が軟いものを扱ふと、よく爺父に叱られたといつてゐた。

△文行堂の先代は、よく京へ買出しに行つた。東京と京都では、大分の値の開きがあつたから、京への買出しは相當儲かつたのだらう。

△それでも今日から見れば微々たるもので、多寡が、茶櫃に一杯程度のそして珍荷物が後から着く程度で、そして珍しいものは主人自らカバンに詰めて持つて歸る。このカバンを持つた主人が京から着くのを文行堂の店で、ガン張つて買ふのであつた。もう今日ではソンナ光景はまづどこにもないからう。今日のやうに即賣展覽會が月に幾度もあるやうでは。

△大阪でも鹿田の目錄が出る朝、目錄を手にしない先きに安土町の鹿田の二階で、目錄が印刷所から來るのを待受けてゐたやう京光景は、大阪にでも、今日見られない。この邊の消息は東西一徹だ。

△古本の目錄といへば、どこが早いだらう？

△それは鹿田が一番早かつた。新本では、大倉孫兵衛などあるが、古本では鹿田だ。

△名古屋の三輪文次郎即ち、玉潤堂なども早かつたと思ふ。

△目錄が親切で、よく本の樣子の分るのは、やつぱり鹿田のがいゝ。元祖だけはある。

△地方の古本屋では加賀の池善などいゝものがあつた。池善は、普通の本屋と古本の方とに分れてゐた。巖松堂の古典部のやうにな。

△池善の古本のいゝものは藤井乙男博士が六高にゐられた頃、大分掘出されたやうだ。

△村上勘兵衛、『人倫訓蒙圖彙』などでお馴染の平樂寺は、恐らく昔から今に引續いた本屋だらう。この平樂寺の跡の誰かゞ今、東京へ出て家傳の藥を賣つてゐるといふ話を聞いた。

△撥齋は、池の端の書肆高橋青裳堂の子であつたといふ事を近頃知つた。

△一つ橋通の有斐閣は、昔の大學生のためには古本屋といふより古本の質屋の形があつた。今日では法律書の版元だが。

△まア古本屋といふものは、書物に鑑識があるとダメなもので、何も知らぬ、書物を大根や無同樣に、商品としてのみ扱はぬと商賣にはならぬやうだ、なまじ鑑識は、一に愛着の因を造り、商眼が曇るといつた形だ。

△バイブルも本は知らない方だ。元は露店を出してゐたのだ。

△バイブルとは、下谷池の端琳瑆閣の先代で齋藤兼藏といつた人で、大道でバイブルを賣つてゐたからの綽名である。

△本郷の永森は、このバイブルの育てた小僧だつた。

△今の村口の主人半次郎はトンカチを綽名の吉田金兵衛の店にゐたのだトンカチとは、古本屋の傍銅版屋を兼ねてゐたからの名である。

△松永町の停留場、上の方へ向つて右側が吉金、即ちトンカチの店で、表は繪本屋で、奥が銅版屋だつた。

△この東京の珍本屋に比ぶると、大阪の方もやつぱり、時代が相應するやうです。

△京當、島平の頃――を大阪に求めると、御靈のあの文樂座の石の鳥居な、出て西へ行つた角、即ち淡路町の淀屋橋筋の古本屋が、長谷川で、こゝには今から思ふと、今いふ珍本がザラにあつた。

△今日大阪の杉本や、東京の辰巳屋が一本を得ると大騒ぎな品が、長谷川にはゴロ〳〵轉がつてゐたのだから、珍本のなくなつた事がまざ〳〵と覺える。

△「好色一代男」や「五人女」が、五圓といふ飛はなれた値だが、一目玉鉾などは三四十錢より五十錢までで世う。それも多少古本が認められてからでです。

△この邊の古本の値段は、水谷不倒さんの著書に、實に克明に出てゐるあの珍書の値段など、顧みられない書物でよく干店に屢にまびれて轉んでゐるが、後世になると、非常な必要な典據となるでせうな。

△本には、その内容上、さうした運命の定つた書物がハリキリ存在してゐますな。

△掘し物は離れた交通不便な處にあるもので、飛驒の高山に逸品が出たといふので、大阪の本屋が又しても高山へ出かけた時分に高山の去る人の悪い田舍者にだまされた話があります。

△山高のウブなものだと思つてると皆京、大阪からの仕入品だつたなど山の奥にも凄いのもある時節です。

来ることが出来ます。まづ行んでもらうことは、お前は毎日
おめうをして店に出てゐます。客が来て葉を求め
たら、ハサミを持つて、葉の毛を啓蒙して紙の上に置き
出しなさい。客が紙の上に置いたのをお前うさうして紙の上に
こ納めたら、さんを呼んで紙の上に置いたのを
葉箱に身を投げます。決意心をもつて紙の上に置いたから、この位
なることは、ハナンデもなる。教文のうち付けの通りにやると、此
娘清水の美人だから、さんが店に出てゐる此の人を
惹く、まして葉を買ひに来て振物が出来るのだから、年
若い男達は葉を買ふべく使ひやつて来るので、店の
繁盛を計り回復し此の目的を達せんとす云
ふべきか

○考察 劇場におやまを勤める俳優はどこまでも女らしく
振舞つた。性々女のおやまらしく年若のまだ良人と
なる舞台であらうはずやうなこともあるのおやまの年
がいくつ上だと知れたをみること、良人を拾つてゐる日本の
氣がさすこともあるのに、自分の年齢を絶対隠
しにしてあるものだとこと。前半がお軽と羽左衛門が勘
平と道行をやつた時、出幕前にお軽い香水を噴
霧器で全身に香をまかせた、何故こんなに
と、おんのやうな大きな肥つたお軽が駕籠
人につて後から来て抱くようにしてうしろから羽
左の大きな香水を噴霧器へ用ゐたとこ
ろがあるが女形のやうしてうまく行くと無んがるこ

こんハ七月時雨が山刊の義衛殿の書いたものである
事実だ。
○東京市も未だ国人でいろ〳〵の課税をもくろむが仕
て計画がある。やうな。ものでもあるが、金〳〵下の税を
課することゝなるだろう。六十以上と十五未満を除外しかも
ハ見習ひ始めらうと居住であらうと一種特別おいて
し男子税だけ多くの中を居る者の税を
多く課せるべき。近年女中の手当も多くなつて
ちうく多くなつてゐるのに貴上の課税を受けて
ハ困る。此の大根の家を抱ふ此時あるいの家の世帯
が多くなると少くなる。二十人居るといふから八百
位の税を課せられることゝなる。銀時家ならば二千

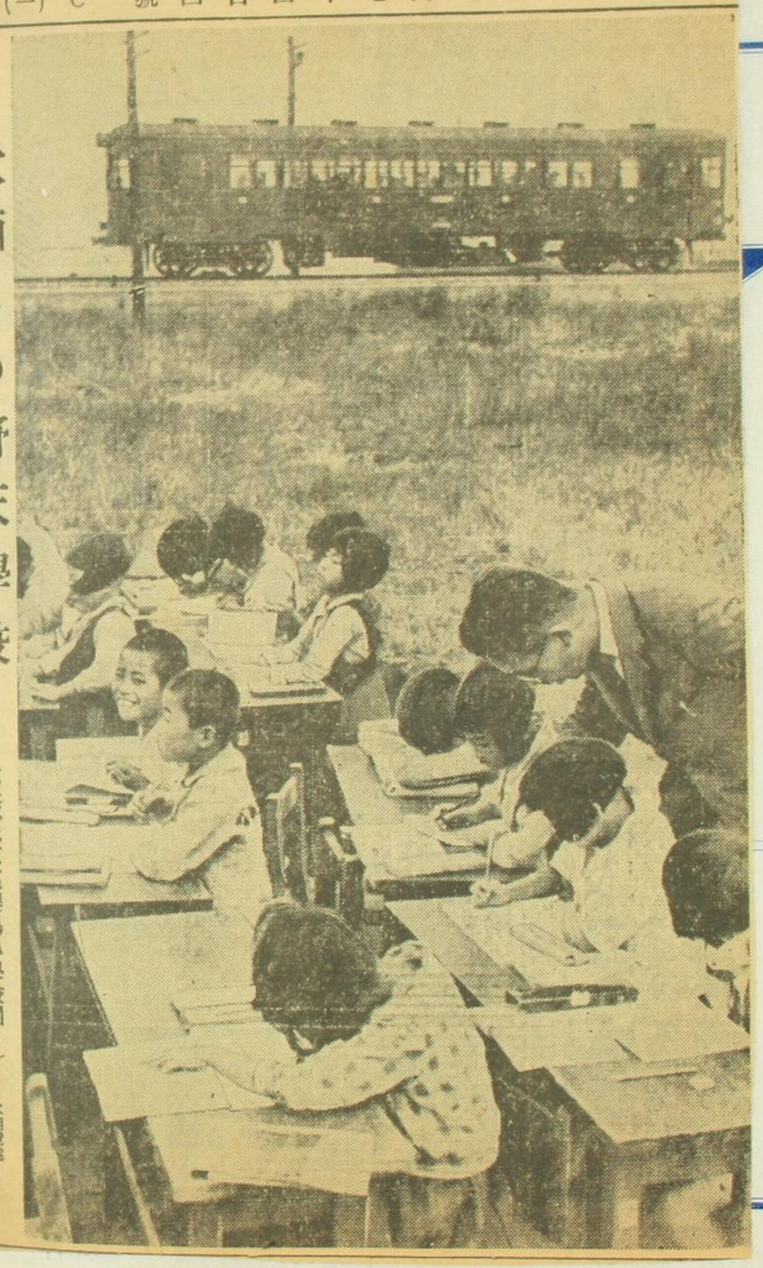
標原製

円の課税を受け後ならば、五十人位の
女中ならば三百円位の課税を受ける。貴族や大家と所謂る女中
の寄せどころの多い居住であるから。無論あることゝ身
家の俸給料を其へても居る者は課税を受け
税がなくなると、女中の整理をもしんから
各居を起つることが多くなる。
○近年どこの家庭でも細君は父母を呼ぶのパパ、マ、
と呼び、父母も新しく云いしめてある。必竟呼び易す
いうるでもあるが、新しく外国語を仰ぎ向ふ
一方は、細君を蔑する端を啓くことゝなるやう
もりうるものである。パパ、マ、ちゃんなる

西洋ばかりかとて、師典を父母を呼んで彼を、麿さと云
みてみる例がある。仏本行集経の大迦葉因縁品中に
大迦葉の出家の事 鉢羅耶竜子八左の如く云ふ

彼を、麿と、我心と妻を取り、婦を棄ふると無まま
我妻と歓楽して梵行を修まんと欲ま
此かるも彼と麿と呼び合ひ合ひ合ひあるが明まる。
心の風俗が暴威を振つて関西浪都市の小学校或は
を将棋倒しにするのは真と迦葉の極とある其の大風が夜中
を起つたら、兒童も倒屋の下敷となる様なると先生方
こうして、天災も変るもいつもいづこも雖所となるなる
様が脆くも崩壊しなる就ては、今後の建築家は保強

法が御究さん様へ言ふまでもなく、今の学校
も学ぶに校食を家天を清掃とある校の方
まわるる所の切り板のれくいなる。著者の教科書と
欠乏を失ひ、六歳の兒童が困つてゐるとが衣食の
教授と忙しくまぐるしくとこまで手が及ばぬと云ふ事
実あるがもい風の暴を知らるまで海嘯と迅うい力
害を国土もあるが、浸水の為め衣類が用をなさず
追々悪疫が発生つまり、兒童も着の身着のまま
あると云ふから真と破産する様くなる。校食ちゃい
迫る後無まるなるが、別庭後無の四の無
いまの京都の風景の毒とみる、各寺院の風
致林の疫疫。ぜ其の概略の行方紙の報まるまく



吹晒しの野天學校

（大阪此花區櫻島小學校開く）――大朝寫真

櫻原製

北海道の前途の未だ尾に收まる豆いとが真に惜むべきである。

○昨夜の降雨は社の降雨ともあらず濱樹の天氣であつたが午後二時俳優社の「口社を傳へたこんな所迄今と時人が路傍の人が思へば悔若し軒田玉、三井家小勝の義俳家と女流俳聖とトンボの如き將棋めうと会いたいとこんなつとしれどうしても自分を加へようと思ふと感じた。

標題の時流新歌の新傾向の「文藝」娯楽名人名選等等で其時の世相と今の世相とは一一異ることを詳るのであるから特と考人を選んで出席させるのである。小勝や田玉などは出席するものと思はれる

八ちるが移りを七番へと移り合つたい初めて、あるる。元年の
最年長者の小勝と白玉の生まれと七十七歳と高齢
まじり〳〵頃程なる里〳〵六十台うつくしく、田舎おい
ごいけが白髪、心も義人とは変まんの和歌はかえ
自分ふる土産長く七十歳、蜂龍の女房七十
そんなの女時が五十六ひ高年の方若いこのお
将女とは自分の長かりうつ浜変のもあつたが八分つたの
八人方振りもある。鉄龍の女将まじこわをつたお
婆さんである。孫がおもつて口さる程々のことを述べ立て
加小勝は流石と面倒の所舌ひ誠恐る出人をも
歌を能がしちるが有つてまま〳〵主たる大力ます
るどく、心浜の旅と持て焼さんる自分も解あり

然であつた。田舎の氣まじめな話で小勝との性
格が異ふるどうう盛り北のまとひる浜笑てある
自分の氣分は壮年時都河や養女とお人ひある
やうな氣がした。名刺と分をはち鳴海屋上海
を頂んで速記ちの縦浜が印つて面白かつた。北の屋
浜紙の紙キングれ掛けるる長れから、まで明
する。　十月　男記

○伊藤の杉板ひ湾る人物きひとり本石宝丸の文ひるる日
本史巻の大賀島ふる角屋七郎兵衛の娘ちり女湾る
べきこまもあるうるうる、久〳〵と女るる跡が輪勝さんもお
ひる。角屋は杉本姓ひ、戦国時代れ早く海運のまとと
言ふ、ちはく家康の為め功を建れひ、初めて家

藩領内の朱印特権を得、後ち明治二年版籍奉還の際、役免除の朱印を受け、幾度か章の誤を糾して安南と称し、丈夫家第一に属する長崎に堀ノ内を開いて相連絡し、秀持と云ひ、丈の意に出づるを聞いて、杉本七郎兵衛、茶屋と云ふ、父の立を承け、次男杉本七郎兵衛、茶屋を開いて、二十二年、大志を内地と為すを期せず、内地と呼称して、安南国交証、家を構へて入貢貿易の為人と貿易を営みつゝあり、明治維新禁令の為外国居住邦人の帰朝を絶対に禁ずるの令、永十六年、七郎兵衛、遂に帰朝を断念し、安南の土となることゝ、一般に、政治上、安南政府の変乱、上の追放となるや也、近年、姫路の清水、角屋家の遺作の史料、昭和四年、丈吉氏を編纂するの世に出づ、偶と一本を得て後の丈大略を紹介すること、

杉本駿吉は北の名のある杉本駿吉の子、貿易家の系統で、七郎兵衛兄忠栄の養子で、外国貿易の関係から、行くの業あり、将未さえ、北家から本家の出る事、自然の勢で、北人の門人を持つ家う家

北海道研究所のもやり、蒼白き木々多かつた。帝展
の出品の準備に共同作業が収めてある。
口前に接して書いた絵が偶と今井素雄君の「
日本の森の生活を浸むと、「音」の一節中、鏡絵を左
のやうな叙述がある。流石に細筆である。

日曜日の風向きの具合のいい時分まで、私は折りくりン
カンやアリトンやベッドフォードやスコンコードを
の村々の教会の鐘の響を聞いた。それはさまざまな
自然の連続のやうな微妙な、気持ちよい北の人
里遠い森の中に少しえられた相応しいものである。
つた。それは森の彼方の遠いので、鐘音は一種

震動的雑音となり、さらに地平線上の松の尖
り葉の琴線に奏でるかやうな忍んだ。どんな音
でも、耳朶に達し得る最遠距離を少いてゐる
と、北とへは遠しかの天地の大地の涯が、空気の為
めに青い色を帯びて、吾々の眼を楽しましもする
やうで、すべてが静かに同一の效果を生じ、宇宙
の七絃琴の震動である。今私の耳に入るのは、
空気の振動の調べが生じ、森の木の葉の一つ一つ
とれた振つて、生じ旋律となつて、即ち原音
中に宇宙の根本元素が関與してゐるを雨音
光が谷に出来ると反響して来たのである。反
響も或る点まで、一種の原音であつて、その中に

原音の魅力と微妙さがある。それへ学ぶ境の静寂の中の反響する郷愁を伴うて（ただ）ただ許りでなく、又一部は森の静寂さのものである。即森の妖精が潜み隠れ微妙の音響がある。

ツロオは工ヘルソンの親友で自から森の中に家を建てて二年間孤独生活を試みた人である。森の生活の一書は実験録である。自分は先ず森森氏の「冥」を本性と云ふ点が美を書く前に此書を一読すべきであると、今とも

つて気がつく。

○本年購入の書画或は古い物、俗な柳の変と入の写真きりと漸々整理して帳架に入る。其目左の如

し

志道軒自筆画像一幅　蘆庵宗吉

柳里恭今様一帖

賀茂大業里恭詩句巻

織寒士書画冊

写山人詩書文一画後乃烏記一巻

織南勢大清絵大書冊

織南輝画書簡三通　合巻一巻

秋僧少林山水画巻

秋鴨庵書簡一巻

近安芳翁写生巻

石川侃南小歌　山水一帖

翠峯小歌　山水一帖

北宋名家大畫記 全一卷
小原鐵心詩帖
[illegible]三帖
趙孟頫[illegible]一帖
猪飼彦博肖像
[illegible]山子行帖 小點
和田曼子畫牡丹盜人
小野根乾堂書石帖
天明方面雲根十二図 一帖
墨田居所小點詩帖
頼山陽加筆詩帖
長谷河田花信十番図

熊谷直山小品画帖
頼春水墨山田面白詩額画
光国小集会仕帖 馬琴美成弘賢文藝
織寒士十六羅漢帖

以上二十点

北條[illegible]十四点

○ソロオの森の生活を後ゆもて行くと任務の第六左の如きこの一節が出て、諸君は痛快を感じ
ます。生活を学ばうと思ひ、直ちに其の
実験をみる。此の生活に多い無い。私は此の様な
学生の精神を働かせることの、最も考ふ
いでありまして。例へば私が表一子供さの

技藝を教ぐさせようと思ふ時分に、私は決して善き
皆のすゝめ勧し、世間の先生の行く通りにせずに
いゝように、只家にばかりすゝめる事物を工夫義しそう
実行しようとすると、只九生活の術は教へる
きいのぶ一部(産業)後ひ以て、世界を視察するのに
あつて、活きた眼目は其人をしらべ、化学を研
究しても、麹麹の作り方を学ぶのみ、物理学を研
究しても、其麹麹が如何して得られるかを知ら
きいのに。海王星の新しい衛星を発見した自
分の眼の中の奮ふ熱が明かに、或は又自己が
すゝめる與賛薄の衛星があるかを知らきいのに
自己の周囲にはびこりてゐる怪物を発見入

れて仕舞ふの危険を忘れて、酸の中にある怪物を
生命に観察しても、それをみるのは。自分の兵力
を出る生命、それをみる養成を後ふ
うち、自分の手で錬石を掘つて、えんを鉛筆
をしても通ると、兵士力を他の社会を、工業学校
治金学の講義を聴きうち、父親からローシヤ
(金属)知識の力を受けて、黄つ比七年と、一ヶ月の終
りに於て、親人の六年が高等教育を受
しに於あるうかと、二人の中で、先の其物を知りた
うなのに親人があるうかと、私は大学を卒業した
時に、航海術を研修したことが
あつて、何故うと思ふらもうく、私が長し、自分

で帰と採録した。港を一周した。[illegible]
[illegible]の[illegible]を理解し得ない。
之[illegible]の生さく[illegible]、只だ[illegible]
又其人を[illegible]
バ[illegible]
[illegible]実に[illegible]
化。其[illegible]
[illegible]やセ[illegible]
記を、[illegible]

○竹花稀吉翁　[illegible]人と[illegible]
[illegible]
こ就ての[illegible]

[illegible]人[illegible]
[illegible]
[illegible]

白いまゝである。東福寺の舞楽などとゝもに、然うあるそうである。北條を偲ぶ厨子に取り合はせのようなものである。これも時代のある特徴で、善美の厨子と異つて、左右の扉が開くのみならず、天井も吹くやうな出来ており、扉は透し彫りがあり、唐草風の金具がカバンのやうなものである。他と示されるまゝ、床飾りの屏風のようなものである。他と示されるまゝ、床飾の紙冊一枚えんの面が、若干の時山人が寄せられたもので、えんは寒雲で失せたが、偽氏ではなく書の紙冊が武内桂舟の手のあつたのを表紙とし、山嶽の小波が表の蓋文と書面を細書し、表紙に列ぶるまゝの印が数顆押されて文物となるものである。あゆを訪ふあゝ

新たな獲物を示さうが例のとおり五十歩も
りを楽の段落に入れたのとえらべば、中々四五倍めも
珍らしい剣があつた。今は安の面い紙印の「能」家と
して天下に名ふ。まのうきゝるつた。北口生産の三村作
清一と後者義拙作のうこと及んだ。前者拙作のうこと
路屋の新の長作があつたが一時行き悩んだ。其の子
細い拙作と北島四史紀略とうふ著が出り、北島氏
の勤王の功績を紀したもので、路屋七こんある為めに
るのは、実は北の著は未だ拙作が雄黄
を加へて自家の著としたもので、謂ひて剽窃したも
のである。ずるをもつてある山名金氏うとゝふ連中
が故障を言ひ立てるので、えんが路屋を慰さる故障

とうつて一時行悩んだことゝふ法をゆくべし。（十月六の記）

○アメリカのやうな功利主義の盛んな物質文明の支配する國土に於ても稀んなる風雅の人が出る必定

物質文明は極点に到達すると共鉄腕が生じ共反動として カントの超絶主義の哲学が後者を唱道すさん 軍化

生活が尊いの、個性の発揮が主張さん、自然を物

（人と叫ばんとくらのも皆反動の然らしめる所である

英吉利にカーライルが起りアメリカに エマルソンが起る

七倶楽部ちなん。ここにアメリカを単に理論の唱

道のみにとゞまらず カントの主義を実際生活に行ふべき

必要がある。まのエマーソンと表裏の関係のある、ヘンリ

ー・デヴィット・ソロオ（一八一七年マサチユーセツツの

コンコードに生まれた）彼は今の家に生まれ、エマーソンの勧

でやつぱりバードカレッジを卒業した。まのちが彼の師

に超絶主義を学び陸軍行きを思ひ立ち森に入つて

二年ばかり独身自学生活を試みるまでの間

自分が森に入つた目的の全く無用なることを知り捨てゝ

を離れて、ひつて真の生活を実行しようとまつたく

もんくらい所なりしかし、而して彼を世人に持くん

とゝするのである。彼の森入りは全く試験的の生活にて一

生涯を終せんとするときは仙人的隠遁的のことなれど

は無つた。偉し彼の忠実な理想を堅守し、己れを行ふ

に益日向の無かつた。彼の先づ自ら住ふべき小屋を自

から建てた。彼の材木は伐採し、豆畑と菜畑を彼自ら

セ、鍬鋤を家族の杖や支えとして買ひ取つて、それを用ひて、彼は自分から漁し、パンのやきも自ら焼いた。そうして費用を拵へ、物々交換で米を買ひ、彼は自分の為めに多くの時間を費やせり。彼は家和ハ業研と記すべきものなり。あと経験を積んで彼は共著と記する所のものなり。通算の昼働は一年の生活を支ふるの食糧を得るに足るものなりと。彼は何ごとをも自分で一切他人の力を藉りざりしの彼はんハある人から安物のセンカーペットを買ひ取つて、彼の生活を実現するとしたこう云ふ。彼は真の自己を彼の生活を実現するとしたら、すべてを通じて道徳主義と常識と実行とを一致した。即ち超絶主義と常識と実行とを一致した。彼は斯る境地に立つて都会と孤独と

社会と孤独と生活共の考を調和するの思を感じ、調和と個性を命名し、何れも交渉なしつつ、人の品性を高めることと信じ、その多く社会の改良が出来ることと道破せり。彼は産業の生活を二年間続けて、その間に書き経験を著はせり。それが森の生活の一書なり。共記する所は肉体験を出でざるからず、上マーソンも三舎を辟けさるを得ざりしなり。兎角文人は口先のみで空漠の理想を追ふものなるが、ソロオの如きは、文日最も界を形成する稀有の実行家と称へるべきなり。

ソロオは試験的に森の生活をなしたる結果、往々の実験を記したる細かに共著を記されたり。例へば家を建つ

又就ての経費や生活の費用なども活さぬる者いとおるもと陶冶しれ行くものから時々出て人を活きるの赤貧者を救ひしてあるが、孤独し就て淋しみを感じるのと体験とを経たのである。彼れが森の生活をやめた時のエマーソンは政治世界をやるのだ。彼れハ世界の中心を動かん。もう千年の古の建築をやつた。彼れの生活無事であつた。北の森の生活一名ウオルデンハ一八五四年に出版さん、一八六二年四十六歳で死した。今ハ文名エマーソンと並ぶるとの有くらいである。

○近代の軍艦の大建築を見ることが珍らしくなくなつた。陸海無駄がない。実用本位の設計である。

堅牢第一である。毎度ものの飾りを美麗と金を費し、しかしてみる。動もすると不浄場を大理石を用ひたりしてみる。何人の評かと問へば見ると技師の報酬の割出しかから経費が出ることを知れ。今日の成規ハ設計技師ハ建築費総費の一割と報酬とした。ハ報酬もうくるから経費が多からんとする設計をする。技師の可成金の多くかゝる。陸つて無意味の技師も出来る。軍艦ハ建築の者ハ科もあるも尾の技師が長り日合合で報酬と定めるが必要かるいと成定まる旦つ任務の意義が出来る。任務り大抵二百円

もかいるべきこうが百三四十間乃至百五十間で出来て、普通と五六十間の差があるが、美をなすへと早稲田の著作は八面普請ばかりで、漠然たるものであるが、美い視度不足の感の海岸で、一美すべきである。

○伏海の形の如く下の大峰嶼が、共海岸である処はいづれも名勝となるべき点あるが、実に海岸の風景美い勝となるべき不足がないのである。唯此伏海に流るる、幾合流んでいる海岸の風光美を探るこまい多くないのが、一向世界的無名である。然るに自人の伏海の地を踏み、そして毎を放つて海岸の風景を探らうとするのは、実に閑雅とこう若をやめきるべき、捨別優値を置き

むかい可城の表像を馳せるを御人から始めて、初めて真景の一端を知る。

と謂ふべきである。高崎城石は先ず城壁のごとく連なつて、それが伏海の峰巒を擎げてゐる、その壁のごとき、上部が高低なく平夷なるを怪異が高く低く、外部がんこう程々の形をなして、乱れて海中に散布した山大の巨岩が点在して、其間船の通ずる所が多い。庫の如く獅子の如く天を向て峰くかすかきあり、其の岩の色彩は紅白の斑が錯綜してゐるから殊に美観である。城後は若川海を絶壁としてゐるから、実に閑雅の美と比すべき勝もとなるべきである。日本ラインの屏風状の岩石

比丘尼は武士信大祝様ひ、こんが沼華岸に連れて
凡そ五〇〇町に乗り廻りつゝ凡そ七〇〇枚の祝模と云ふ
なるべし。実と天下に数の二の祝模である。いつもやむ
ことなき時の海中の平盤宮千品王殿と
云ふ海人処とも云ふべきが、こんは平素は海中
〇とヤーの手と係つてゐる祝模
の大きいと数るもいと祝が立体のもいと刻産及ば
ずの由来伝説まは山高会が多く、其の書者に実
聖と此の花菖が咲くと云ふ風景は一度の美
を尽すことも出来ない。
〇秋霖四季打つきそうて尚ほ降り止まず。こんが考
め池も溢れくるを得ず、遂に池は一面に石と変へる様が

霧生してゐる如かう朝の全く波一て石のみ霧生す
るを見る四周の山がうミ七七分通りの下に没し漸やく
池縁が数ふるに足る。在家の池の渇水は昨年二月
頃から始まつて今日に至るまでの長い
こと也。池底を放置が異なる一三分刈り取つた
ことも有る。この秋霖が漸やく池らしくなつたのに
長雨を降くまい。まづ雨が待きもうもあるから或る
泗水の傍らのを久方振りこさることが出来も知れぬ自
分は雨風を就て思い起すこと有る。幼年の頃を思へば
く雨模風が起ると河が溢れると懐すと云ふこと
ばかさんなる所の河の撥とまんかを実であるや
うな思ひがする。其何故であるかを知らうとする如が今

考へて見ると、成る程さうだ。切つた箭筈を雨の中に突き刺した
雨を擦るのである。雨が降ると、樹木の葉
が光を受けて其の或部分を停める。風が吹けば、
その雨丈い新かな根元を降つて根を濡す。すが、然
らざれば太陽の照りを乾くこうするのだが大雨である
ば葉を濡して根を深く伸剪が
流れて川あんべ直ちに葉に入るのが順序である。風
の吹く場合に葉に停留した雨丈を多く落す
ら、大雨と結果を同じくして根元を濡す
て流れ出す。其の雨量に応じて大きくなることへ
千山萬壑の樹葉を振り落すこと思ひ到れば宜
易く想像し得る。大樹一本の葉に溜る雨丈を傷らう

一斗とも一石とも幾十萬本の樹に溜る雨丈の何千万
も何萬万も溜るに溜まるであらう。雨を風が一齊に
振り落すのであるから、大出水となるのを見よ
風は雨の量に応じて徹しても吹飛ばす結果となる
施すもの知れず。風が樹つたら、湯風の樹木を
動と動揺した樹葉に雨丈のあるを計さず池
雨が一滴の内に前記を思はれる。（十月八日記）

○孤獨の生活！人間が社会に居るから孤獨生活を
なるべきい家庭と雖も持つてゐるとも多い得ない
社会や家庭で習慣つけられてゐる人間を比べさう

孤独に居ると、淋しさを感ずる。鳥でも獣でも群をなしてゐる。人間も奉仕が本体であるから孤独の淋しい譯である。自分等の孤独生活の経験をもつてゐるが、概ね繁かれた事もあるが、獨房の空かんとうつたえうる、孤独とうつたえる。唯だ少しの温地出湯の某寺に二三の閑居した時は、三食の旅舎で喫したえう、絶対の孤独とは云へないが、孤独ちうい体験とちがいこんのみで、慣れられない孤独状態であると、精神が麻痺する（つまり何も出来ないやうな感じ）もと閑寂に就て何の苦痛をしないと考へたのだが、却つて駄目であつた。併し孤独状態に居ることは敢て珍

しくない。数年間ずつとあることが決して淋しい味を感じない。古今の旅行記は大体自身を孤独の状態に置くことである。若しの一人旅（ひとり旅）を歩くことは孤独であつたが、今の汽車旅行も、五ひとの人が居ても、孤独である。五ひと交へすると孤独と感じ難かつた。汽船の旅は、孤独と共働の労役をする時は、孤独感は少くなる。労働者でも、一人である仕事を捨てる時は、孤独状態である。専念事に当る勉強家は、孤独状態に居る家庭に居る人でも、孤独の状態に居る家である。旨い孤独は、無言で無気力に居ることである。寝食も忘れ、訪

客を謝し、食事を報ずる細長の戸をノックするのである。五月蠅がるほど孤獨をきらいぶ、家庭と社会家族を外に活ひまはりして自から居守居をする時も孤獨である。夜のある時間から寝て天地を動かすものの数時間は全く孤獨である。ことを考くること人間はあまり孤獨を恐る。境遇から多くの人、山野を駈けめぐつて狩猟を試むるも孤獨である。孤獨生活は必らず世を避けて山林に入り廬を結び隠棲しようとする時間孤獨である。坊公が浜社会を寧ろ喜ぶのである。自動車の騒音のなかに各々孤の住居をもつて居る方形の空中に立つてゐるから美と後の

ゴッホ、ゴーガンの画家ゴッホ、ゴーガンの孤獨を愛する芸術家、天文学者や氣象台の観測者などは皆孤獨状態と言へる。孤獨を愛する人、閑人と称さるべき業者もあるべきものである。孤獨の話ばかりしてゐる。まい別を、今等の事は拙つてある立場と事情とにおいて自から手を下さない人を指摘してゐるのである。孤獨の事をやり事をやり事を考へる。孤獨と共業を対象にやり孤獨と文書を思ふ形ばかりでなく世の中の孤の流動界に充ち満ちてゐる。善悪を別るものを孤獨と云はるべき用像がある。丈人の居る家と他の

まのが描るから、お親の孤独とんでくるいのであるが、あるまま
柄を抜位しをみる事務を教る河の金くお
獨であるの船の子孫其他人と接觸する孤独は
殊に工藝文藝を携へくるこの女化の人生の孤独は
を貴すことが多い。斯く考くること孤獨生活もみう觸れ
ことまるるかを実感ることである。只此絶對孤
獨とおらさるとうあつて、絶對孤獨人、ある孤獨の時
が後つても常は人と交いることが出来るとこの迄お
かあると、絶對孤獨のつらさは一時孤獨●と同一と見
まするべきものである。おかし一時孤獨がのんを伝つて洪みと
感じるのか何まるとを慰めるうを考えるとして見る
と、絶對孤獨を慰めるこの苦のうちと思はるのは孤獨

とこのまま絶對孤獨とまた河がある。人
は仕事と接つてみる時、仕事が其人の相手である。
術が畫を形つてみる河、書が其人の相手である。文藝
家が景色を選択してみる河の孤獨、其の景色を思想
が相手である。船中の孤獨、行先の目的が相手である。
美術家は天文台の技師の孤獨、お手は天象である。
家であると云へるやうな孤獨、お手があるので事実の孤獨
とも云へるのである。人間の義い山林を捨て(家庭と孤獨)を
まる人間のみも孤しげまる見くるけれども其人の心が活躍
してみんな孤独の目のぬく洪しくるへのである。彼等は
人と交とし得るの代まい心を交とすることが出来る。彼
等の種々のことを思ふまる。彼等の先ものまと旋乾轉

仲の哲理を考え出す。温柔の家庭ひ[illegible]慈愛の雰囲
骨肉の間と考えられる。自分と考えられる。[illegible]
い、他人の心境[illegible]家の心境は、寧ろ斯の孤独生活
を據つて開拓さるべき[illegible]何人の[illegible]
一日の大半孤独を[illegible]ることが世間のさまざまの
方面に行はれることに前述したごとくであるとすると、
他者孤独とは[illegible]延長と思はれるものである。[illegible]
角慣習で人間は他人と交いつて係ることを[illegible]
実は[illegible]も受けう者が決して少なくない。[illegible]
[illegible]の混沌の[illegible]混沌の[illegible]混沌[illegible]
[illegible]を[illegible]は孤独の[illegible]
[illegible]と[illegible]

[illegible]の孤独の[illegible]自由の[illegible]思考や文
の実行は孤独の孤独[illegible]許さんとの。孤独の[illegible]
然[illegible]自由の思考をやるに[illegible]
を求める外[illegible]ことと思[illegible]
[illegible]完全[illegible]孤独[illegible]程度の孤独
[illegible]は生活は、今の世の中[illegible]之れこそ無
得られない。（十月八日記）
○納豆とは[illegible]もと京都の寺院に於て始められ蒙豆
[illegible]在方に[illegible]寺納豆と云ふ。納豆
[illegible]納豆を在方に[illegible]
は種類の名[illegible]も、種類は唐納豆、濱名納豆、美
納豆の三種で、京の浄福寺を[illegible]浄福寺納豆

一休和尚が発明創めたと云ふ南山城郡村雨恩庵なる
也す郡納豆は唐納豆也、唐名納豆は紅山寺味
噌に類し豆麦を以て塩三五四の法を以て仕込ものな
りもと遠州濱名宿に発し始つて此名あり或
は略して濱納豆と云ふ。美濃納豆は江州栗本郡芦浦
の観音寺の発を以て始まり天然の美味を具し香
気強く粘りを引くこと長し

昔京都の寺々に納豆を仕方を知らず三角の器に入れ
寺の名もなくして老し学者と云へども其国人も存ずる
駿河の童謡に「富士の山と納豆若き三角だーいよ」
と云ふを以て知るべし。又烏帽子に納豆烏帽子
と称するもの前頭の三角形の飾りあり、納豆
の器

の器一一形とり故名あり歟
京東も納豆を制表せる閑屋二軒あり今伊勢太
伊勢平と云ひ共に本郷大根畑にあるが、伊勢太
は早く衰へて伊勢平のみ栄へるが、今は少なく成り
以前十四年頃の納豆一筋元價四十銭、北納豆を愛と称
る時は閑屋も銭四五文を筋を借り、又納豆ともはな
るか桝を二ろ文桝にて借りる定めなれども春夏の時筋
と桝を閑屋に返せば代銭を返す定めなり
と云ふ筋と桝は共に伊勢平の名を入れある故
と称く定めなるべし。伊勢平は閑屋を冬今日々
納豆御養すること七八十筋を成べるよし、伊勢太
も伊勢平ら諸養しなる。菖入の納豆は多く田

会を行はんとて来会す、

○睦会の男女俳句を募り（折）も既に一年（会員）子

宮らと紙会のとき女人の俳句を募集し短冊と

短冊掛の幅を寄せたる時の早く経つのを惜き

女人を思ひて題句を云く

秋の灯や庫裏を囲む五六人　竹春

女人の俳句をよくしかも

○慈運と号のあるを雄解のうまひも慈運求んべ

芸もよく出来て決まる意外の例会社と秀英会の女の

成立を社と分身的関係あり人も同じく姉妹会社と足倒し

なるこの也、大○印刷会社の会保は容易に行はん得すとも

なり、日清秀英の二社は容易に会保し得べし互ひに特徴

ある両社と保会し毎月毎に最も賢明なる策

なりとは謂へども我が社も久しく集し所なれども

実際に慈運はさりしもの、

迅会保が既公式なるべき

重役中の秀英の会保

に於ても真人び会保を高きべしとの意味なり、実は

七月頃より両社の事務は互ひに社内の内容を示し合ひ

従業者のなるをまくり比較研究し事ことが機会

なり、両社の会保と設すべき材料は悉く開ひ何

の面倒もなく会保さるべき仮論を得此の上今日

公式の提案あり二三ヶ月を経る間

の結果を一時写と飾りなる為り報告し結果

慈二無二合併をのぞまるるこというて秀英側もまくるの感
とゝのゝ、こゝに先が根本ハ決し行う。実ハ秀英ヲ抱
みあり、社長ハ前金抱あり、社員抱みを免れ
とするまい合併まゝらるゝと名案なきも、彼れの
長き所ハ我れの長き所ハ彼れの短き所
彼れの機械ハ悉く往々機械を抱ハもち抱みもち
我れハ機械ハ悉く動し往々無地を庵業を行ふの
抱みあり、彼れの機械の工場をもちまゝ我れハ本社の
工場を有し五年間ハ重ね重ね直さるゝ抱みあり
両社の合併ハ我等を解消し何れも利益を得さるべし
今社長ハ無着の人伴長と青く等の利益を打算
すれば少なからざるものあるべし、動機に於ても見あきらかなる

人と我邦人の契約ハ物品も物理と伴ふを
を決せざる者の見あり、実ハ印さん称也、只幸
いに氣運に従さるも一氣に合併の成ると成るの
仕合とすべし、手ハかゝるも此の十二月併合と社長を
さんと説こ六月中中止ハ自分の在職ハ合
併の事ハ決定を見るハ自分ハ去ればいとき
ゝ也

（十月九日記）

○此の数年之文行堂ニ上京の報告を聞くに
二等の等物の目を飾りとなり、小林書を見れば田中吉
伯の手書ハ和也ハ伯の移出也、一生の潔
芭蕉記ハ此三十八年十月七日富山青蔵が
手紙ハ大と伯の歌会と根ハ芭蕉を

親鸞記念館五重の彩筆を徳き合いしも書き給
うまで、他の一八の法四十二年この日白の本邸に寄
蓮母御師が手なる形りの記さう、此合は白紙を
寄蓮の記文さう、記さ二巻とも他の家石の拓
校を細録し、和歌の古組の解は記さんまう、他の傍
さで書かん拓さう法義の法義の材料　うさう他の
自から器を作り器さ手書さう、巻頭も附
さんまうさ例の教義書さ書の代筆り
の無能心を投し出しさうぶ、書庫に出り任帰し
事の古山他の交りを厚ふしてんれんのまう
手が繁中りさう、殊さ石山寺蔵の方八伝記の
名手として名さう、微妙さ庫記の一巻の殊さ

難いしく拙文さんに居ることもて、遠二無二縁みて
家に持ちくり燃山に流んでかつて一切七訪のさりし
日白本邸のさまを（一切七訪のさりし）時をさ）しぬ此の
本邸の尽人の不用に帰し、此紀文さ殊んるを他
他いま敬しなる手

十月十一日記

○私獨生活のつき前に聊さ書いた此が尚あれまされ人間
の心が働く限りは如何ん獨は得ない。遠磨面壁八年
とさが無言の壁に対しても八年業を修めるに如何
生活の力も著しいまでもくう。さんさう無何有郷に入
つたとまれが彼の真野諦に解んれ譯であるが其の真
諦の解んれと感ずることが心の作用であるから此極端
の境地に於てすると心と離ることが出来ないのである。

世を憂ふる人がらく山に隠れと孤独の生活と言ふことが
あるがこれらの人は第二の隠遁の形式を又一つとして、彭祖
拙が「世をすてて山に入る人山にもろの憂きときは
いつち行くらむ」と詠つたことく、心が依然憂世を
去らずにいけんがどこに隠れても隠れ甲斐なきもの。庵室
に隠れつゝも心の中に隠れ蓑を
隠れもとめたるまま
誰やらの歌に「山深く何うを尾を伏ぶべき心の中へ
身は隠れけり」これが本当に隠るゝのである。兎角心
が大切である。人間居まれば不義を思ふことともある
ことゝ心を又締ら移れば孤独の即つも不義に遇る危
険がある。だから寂室に居つても大道中に居る様に自
用心を移らうとも、心の放逸を抑やること六馬を馭

する事とくあら移ばるるなる。歌聖西行の言へる「利のや
つこ住のやつこるき世うれんの中のあるべきうけり」
いくら利欲の世の中のあるべきうけり心が猫こそんみのが美をの
深まるも、逆流する人も主の人の巻る社に神の
心の内に神しますまゝ」と、他流の心こそ神である。
あるべき美は他にあるのでなく自家の意内に存する。
兎角人間の社会に立つや、危険地に入るのである。混濁
の境に投ずる動物である。人と交るのは危険に言葉を
かはす時かく邪まると思ひ移らうとも、其の混濁に
ることは雑混濁の中に投じ、己が垢と他人の垢とを交
換する時、うつり、汚穢と云へば汚穢の相違ありとも
美を庭へ心社会に伍を為す譯なるもの。自人の思ふ

こと信ずることいまだ[illegible]人の思ふことを信ずることと同一である。相和して行かねばならぬことを得る。心ゆくまで他人の為すことの同じ様なれば則ち雷同の社会に於て已を得ないものである。雷同が[illegible]くらべると社会の事は美が[illegible]しいことがまいが其の戦国の[illegible]上に美を[illegible]することも出来ない。君と別りつつも美を御へ待べきなれば、こんなにつらい事もあるから、孤独が必要となりてくる。孤独とは[illegible]的孤独をいふのである。人と交りながらも[illegible]の心の独立を保つて行くことである。春坡[illegible]を[illegible]防ぎ独立の心を防ぐことは[illegible]出来ないことである。春坡の社会は口が禍門である。[illegible]しのつかぬことが起るから寡

默が肝要である。揺々行く社会の事は粗漫極まる実況の[illegible]多くそんな一々[illegible]思いて軍師軒の在の磯りを聴くことが迷うて優つて[illegible]。実に騒しい世の中である。斯る世の中に都が事実必要である。静中を求める一手段は孤独である。一心不乱の仕事をする為に孤独である。浅書を四書五経に孤独である。世間の騒がしい喇叭をつんで多くの人は皆躍つてゐるが、今こそ孤独を大切にすべきである。孤独の解を試みる所以である。

（後元州ラジオ大会任せ）

十月十二日記

○己の日梵徒の事一つ云いたいことは、某骨董高の齋らしい雑品の中に鐸鈴あり、鏡に因人でもあるが、無銘で買さき敬奉する也一真と墨書入

る、北鐘梵宇二ケ所と溶鉄あり、土中ゴボゴボあるしか、寺
独あり、大和國法隆寺鐘の字を刻す、千年以上の古
る、あるもの且つ上巻のものもあるさんび金輕くして磨心
を思ひ、ず、時々呼び鈴と代ふ
○いつぞや大阪の中全國医の大会があつて、ある眼
科医い意味の深市が渓間を歩き見が開いたのハ
自内痣が物を解れもチン氏帯が離断したの所と論
演したことを思ひ出すが、深市いろ〳〵眼科医の材料
とされたるる。北陸山陰順路と京医師が此方を論し
此後を山陰の書簡を左のごく掲げ大正の書簡とし
ておる。

以上は眼科醫者として見た澤市であるが、どうしても肉體的の盲目として解釋しては醫學的立場に於ても大分苦い所があるが、是を眞物視するには正確な考證に俟たねばならぬ所であるが、餘り肩の凝らぬ所で筆を擱く。

而し先人が既に爲されて居る事ではあらうが、迷執に因む魂の持主澤市が、觀音堂入りを轉期として翻然一切の迷惑を斷じ、諸緣を放下して大死一番身を放棄した瞬間に玆に大活現成して心眼開け本地の風光明歴々と、轉迷開悟本來の面目を認得したと解釋するならば最も妥當であり、淨瑠璃文としては當然の因果物としての意義と價値とが立派に把握出來るし、それが亦本來の眞意であらねばならない。具象的のものとなし況や眼科醫の裁判にかゝつては、いらぬ詮義立てされて泣くものは豈に澤市のみならんやである。他日其の方面の觀點からの壺坂を述べて見ることゝする。

此所に誠に面白い大正壺坂寺とでも云ふべき實話がある。中國地方の山地に中年からの一盲者があつた。某地に名眼科醫の住まるゝを聞き、險阻な川沿ひの山路を圓太郎馬車にゆられつゝ、數日を費して漸くにして目的の都會に着き、某名醫を訪ね診察を受けた。然る所が、その醫師の申さるゝには貴君の眼疾は既に陳く、到底恢復の見込は無いが故に、折角遙々來られたので御氣の毒の至りであるが、あきらめて歸つて貰ひ度い、自分には施す術が無いと申渡して別れた。患者は希望を失ひ落膽しつゝ孤影悽然として再び圓太郎にゆられつゝ中國山脈地方の己が村へと歸つて行つた。所がその患者の乘り合せた圓太郎馬車が途中の山路で、崖下に墜落した。余り高くなかつたらしく、特別に怪我も

せずに村に歸り着いた。

其の後患者は何時とは無しに視力が出て物が見え出したのに氣が附いた。程經て自由に自分用の仕事が出來る程の視力が恢復した。何の奇蹟か、御慈悲かと盲者の喜びは極りない。實にもつともの次第である。余りの不思議さに其の人は、今回は自由な身を以て再び山國を發つて先きの眼科醫の下を訪ね、視力が自然恢復したことを告げ、且ては全く望みなしと申し渡されたのに、今此の視力を得るに至つたは如何なる譯かと尋ねた。醫師にもどうも判らない。色々とあの後の出來事を聞き正して居る間に、先年來院の歸途崖から馬車もろ共に墜落した次第を語つた。其所で何かその墜落といふ衝動が開眼に動因を與へたものであらうと考へて說明した由。記憶が明瞭でないが、大體右の樣な實話の筋であつた。

此の事實は正に大正時代の澤市と申して宜しかる可く、その開眼の機轉は澤市の場合の白內障チン氏帶の離斷による自然的墜落の結果瞳孔領の溷濁が消失して、明を復し得たものと解釋するが最も妥當であらう。（了）

○安政大獄の連累者世古格太郎の手紙の事

八幡時の公卿たちと親しく交際があり、書道

院尊融親王を親王と云ふ

二品天台座主尊融親王は先帝（仁孝天皇）

の御実子、実は伏見殿貞敬親王の御子聖護

院宮桃井宮才の御兄なり

北宮御腹卑しきゆえ故を御出生の後

宮の御方家の子として本能寺を傳と

して十二三才の頃より出家し、北岡の僧

徒に使はれ、味噌こし提を買て性き或の

僧の文を懐持て河東の板院を尋ね給ひしも等

自ら話を給ひけるまゝ、祇園の仲居に契を

叩かれしも知りけるまゝ、其後一乗院に入てより

初めて興て祇園町を通りけるまゝ、其女ども又

また其者等と気付給へり

宮は英邁なるまゝ比叡山に、主上（孝明天皇）の御

信任も厚く、宮中のまゝ何ともうるさく御密詢を其の

もはらなれば、まん延け幕府を忌憚さる給ふに

こまる一方にいろいろ此の特に安政戊午の大獄

前後に幕府は宮を疑ひ奉り、あらゆる詮議を

加へ比。幕府は宮の不行跡を理由として東高

野へ、宮の家来の女を召捕り、宮のお

手がうり居つゝと責め立て其女横

川あかけんを承服しうつ此の武、莫奢腐い家を
逃けるを新柄を得す困人比と云、併し後ま和
西寺の二男を一間を押い新めらんと。宮い自らを
大塔宮と擬し僧徒と武蔵と賛成あり、五斗
俵を軽々と持ち運いなるかあらせらんとす
す

の三條實美公の清廉で貧困であつたことつき、亦時
巷間を
三又も梨本宮の天保銭忠義のことい百も御承
知
と云ふ昔しは梨本宮い宮の住いんは不、家い極貧
しと雨が漏のはと云ふ、仁孝天皇と同甲で、皇

又い特を愛宕氏せん時りお手元金を賜つれと云
ふ

京都の貴人舟木伊昇の遺稿「五十年の夢」
の中を云く安政六年十月四大臣三條実美
公其外公卿近衛、勤王の志厚きを思はれ
特旨を以て右大臣を進めんとの勅旨あり
元来三條家い御貧困四百六十九石ありて州者
の御食金ばかりで八万金を
方自ら豆腐買を生ずることもあり。官家い浅
白と称奉るの奉府ばかりの御米ばかりで其他
八代料とて他ばかり、昇殿の拝領と多額
の奉用を必ずしも、遂に現実ありしも

墓志銘ならびに後首に

寒中ふろん一帖引きはしたがさん帝りて

御墨ちゃさんに（大府の大臣のこと）

○英米の外交は笑殺とやうやうの話いをしまかつめ。日本の官吏の外国の部しかれ毎日偽儀び外人の言ふことを反詰し此文体の下役らも上官に呈するかきかの。あつ此。えんが迫々改まり「奉拝候」式びい意味が徹底しないえ安から知らさるを得す」ると云ふ反詰文にえつ此時日本の有司い苦笑しえんえ風の文体びい外人い書ふんを悔らんと怒つれと云ふ。南時の外国奉行い外国の公使を呼ぶにおてへと云ふに。シーボルトがから使い外国の

横浜製

表を代理する事であるから、敬語を用ひべしと忠告しなるに奉行のまけ惜しみ、おまくは沸騰なり故称であると、シーボルトい之んを少き然る人今後外国の公使を帰前と呼ばんとしと云ふに。

国つれと云ふ。南時外人の殺害する毎に先づ起る問題い賠償額ひあつれの。有司の頭に此の賠償が難んで、米国大統領リンコルンが時報とん此時失報と表面しと上申すると老中の撃壁して、又と賠償かと歎息し此と云ふ。岩倉大使が英国で外務大臣と面談の時パークスも席に在つとが拙りと表席すれて、大臣から何か求め給へ申なと言ひとすると弟人と共住地い大臣に徳めえて

ゐない狀態をそれ、日本官吏の流涎を下げた實にバ
ツスに威圧を敢てされた者有司はバーンスは本國を指て
豪奢のまぼろしであらうと想像を裏切つたのである
以上は井上の出いた後の其の記(其の記)を見たる者實の
略記である。

○余は先の星亭恒協士の塩谷宕陰の言葉を初め
其の僕として甚だ後を追ふて詩人になれが
新しくとの先のうと竹人(ヘルこと)加はる。今西村捨三(番
(弥吉)の弥吉の紙を投ぜる、弥吉の塩谷の一人
として、弥吉の二人目の人物の出現
を追懐し、既に出いた星亭と西村とのうち人をうとする西
村の宕陰の威風をそのまゝ井伊大

老大久保甲斐の比すべしとのことである。又宕陰の事
常の偶老のあるべき、志すところ紙世をもつて、其著
阿芙蓉遺事「隔靴論」が「憂國論」時の
りとそのて「死不死入傳」「軒甲一驟」「花家」
の詩を引てゐる、嘗て三年の秋中風にて昏睡
に陥り、十九日を経て絶すると、余弥吉を
宕陰命に星亭公のもとを少かさりしまた
とす、余が星亭公のもとを少かさりしまた
新宅の書簡の宕陰の絶筆である所急軒と
弥すべき出庵吉を宜
すけり宕陰の中風を直と絶命さんとすると
り、宕陰の風来を弥吉の記るを知るが如めも也

○維新史にいろ〳〵出ておるが抵抗薩長を本位
として書いれしもので、今素側を全く閑却し、尚くも薩長
の不利なることは絶滅に書かないことをまるでみるのだ、
正しい維新史とは云はまじ出ないと云ふ事を知り
ある、偖て山川浩兄の白虎隊戦争の実録やうのものに出てゐるが実は薩長の功
績を表面に批判したものが出てこなければ、維新史
は価値なきものである。所謂勝てば官軍、権力の向
ふ所に従ふ、どんな悪事も都疎されてゐるから
公正の維新史は他日を待ねばならん、所謂る市井の
有識側が今度伝伐の乱暴を働いたことは言語
に絶するものがある。今度側が記したものを見ると、

各藩の勢力を分捕をやつて、分捕の藩と云
ふ札まで立てた。或は分捕を終て焼打
をした。白虎隊の話にあるが、人の家を焼しかも
侍妻子を殺した。軍中数千を極めたものである。日
比谷の兵が入り乱れての攻撃だから、其暴状は支那
兵と同様だ。所がこうのだ。長州藩の兵は
軍紀厳粛で犯さずと云ふ流説を書あんてゐるとか、偽りの云
いふもあるが、薩長の威を恐れて其の陰の実状さ
へ記さずに、唯だ雲井龍雄が討薩
檄に薩軍の暴状を述べてゐるのを見ると思ひ
ハる。当時自分の郷国城後の長州

今津口に出かつれの武士多く来つて五家に止宿
したことがあり、後まの者里しが為めやつてきて戎人と
全家を焼け落してしまつたことも有つたが、
家人は今津の人の禮節を重んずることを感じて
と共に、津軽藩士兵の乱暴をうまく敬ろい
た。彼等は人の鶏を奪い来り、五家の茶家と称して
之れを賣つて給つた。当時諸物のよつたれの今人
で評判のよかつたれは藩士兵であつたことから考
へると、今津と称する暴掠も略々想像せらるる雖く
ある。

○弘敬寺中文化年間三宅雲帳を過り志
道軒茶山と書係を婚の書係を志道軒例の

陽居を持して机あれの図を自筆の後ろ
宮かりくうかりうのかりまくんの

志道軒七十四才
茶山記印

とあり、志道軒の自筆の後に所くし、第七戒
茶金武山中歌聖初見歌仙庵後茶金
茶歌等、即ち茶歌の茶中に茶の茶
茶道軒の茶中に茶しまの漸やく世出
候世立用也

昭和五年十月十七日

○貞人が曾りて得た古文書に振舞後守立宮の一通
が有る、長尾宛で文亡の御名ようこと紙後と緑固

があるから、七文書院に特り入れられる。此人の学つた古家村
其の領主となつたこともある人で、直江兼続とも比すべき
偉材で家康が頼もうとすると時直家を病床に招いて特
に遺命を傳へたほどの人物である。福住春日山と云る傳
春日山のあるじとなつたが、堀秀治が流れ、其を朝倉宗滴
重臣堀監物直政の庶子が直家で父子共に奴隷
況であつたが、婚出の才直清が家を継ぎ、直家は其
三年で二萬石の会津を受けて居た。彼の居城を
坂戸の城又は上田城と云ふ城、越後新潟の可耀山
にあつて、主家である宗家である
花と春日山の太守は親戚で多淫で直家の妻姫を妻
とせんとしたが直家は応じなかつた。其を乗じて先る

に直清が其国の某を用ひて主人を誘拐した。其結果直家
は家康と祈いが春日山の大守は六十萬石の大封を奪
はれ、直清の山形に移された。直家の宗藩の除封と
時を代り鉢山四萬石と転封、其後大阪両陣の功
により六萬石に八萬石を得やがて一萬石加増して村
上九萬石に移つた。直家はこれを
とがられた。

直家は庶出であつた。合家と此が父は藩祖から
拝された名字の来配を翻す直清と違ふ。直家の
を授けた。直清は直家を名状とも直家を陥れ
ことを策動し、其を藩を忠後の淫りを自殺
けて直家の幼行一萬石を奪はうとした。直家の

家康に訴出でたれども此の北方とあへなし。

のとなりの颱風が京都の風致林を破壊せんとするのつゝある様子を生じたれども、なほ甚だ惜しいことにあつた。本多新八郎士が実地を視察したの後、天災ひとしきりを得るのとハ云く森林の保護と用意が足らぬ。然るに伐木者の保護と称して、こゝ此の銘木等の保存のみか大切なるとこゝろを枝を切り捨てゝ枝を残すなどゝも大風の為める防衛的なるも、亦総つたハるこゝ。

なぜ此の保護林をすることを何をするも面倒な手続が要かるから、却つて是迄のことを放棄するとの思ひあれば。大切なることが往々間違つた結果を生ずることの一例を御

陸奥の国の有名人の今年の清涼を求めるとするのに、後者の一つとも御陸奥の樹木が枯れつゝ仕方のないことを、なぜ此の樹木を伐採する森林の方法を考へたことを考へて、人々問ふと、なぜ此の木を伐採するかと問ふ。木の為の肥料とする。つゝ為に光線を遮ぎるこゝ。寒中地熱の温度を保いとなれども、樹陰をしてこゝの山に御陸奥の樹木を故障とするこゝ。山に御陸奥の樹木を切り大切なる風を入んぬ。徒に委書やまれども。

閉じて放るゝなる出こゝ。拙を大切のこゝ。

こゝおのへこゝ共法がある。陸奥の保護の

切つて日向に及ぼす影響を考へることを思ひ合はせるべき

名木に濺ぐ涙（終）

颱風に滅ぼされた

倒れ木拂下げの數百萬圓

それを名樹の追善に使へ

本多静六博士談

今度の被害のうち特に松の中木及び老木林に損害の多かつたのは、これ等の松林が何れも適當な間伐を欠き、殊に長く細いひよろ松に生長して居たためである、だから

かゝる重要な

風致林に對しては、早くよりしばしば適當の間伐を施して、もつと〳〵丈夫な太い樹幹を形成せしめなければならなかつたし

又もし下枝の上つた場合にはその下にヒノキ又は雜木を仕立てゝ原始林に似た數段の林相に導く必要もあつたのである。

特に遺憾に思はれたのは、以上の松林や杉檜林に何れも適當な林、套の欠けてゐる事である、彼の海岸又は山の突端など、風當りの強い所に存する殆林は何れも

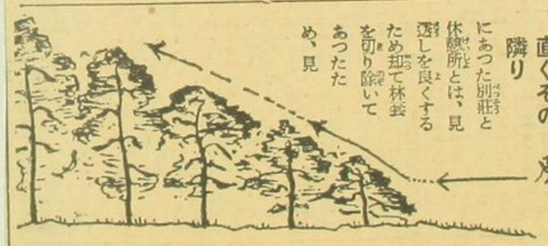
天然に完全な

林、套を有し、どんな暴風も林内に吹入る事なく暴風は大抵約四十五度の角度を有せる樹冠（凸版參照）に衝突する事により、四十メートルの風は二十メートルの力に減じ、特に風力が強ければ強い程、樹冠はもろに風下に傾いてその角度を小にし、愈その風力を減ずる作用をなす事は白明の理である。

彼の濱寺公園内の有名な二層の巨樓一力が、その前方にある完全な林、套によつて全く危害を免れたのに

直ぐその隣り

にあつた別莊と休憩所とは、見透しを良くするため却て林套を切り除いてあつたため、見事に吹き飛ばされた如き、その



よい實例である。

私はこれ等の失應に鑑み、この際速かに風景を復養する善後策と共に、將來過ちを再びせざるやう風致林の手入れ、改良、保護等につき完全な案を立てる事に努力するため、近日再び彼の地に出馳ける積りである。

一度今回のやうになつてはその復養は到底不可能であらうと人はいはうが、然し

今日の科學は

金さへあれば敢て復養の難事にあらざる事を信ずる、幸ひ今回の倒れ木を拂下げれば、僅に數百萬圓に達すべく、その一半を投じて速かに名勝地の復養を主唱するものである。

○ある時は孤今の席上四邊の情況を抑へる為めかあるが古春の時期の時期の特別の特徴を鎮め光を伝ふ為人の夢の中を西し所時時時の注射を施すことなどもの如くなる故まるべくこれを
が社会の中に化も大いなる役割をなすこと
有し本多博士の博士の左のものを主張する
其ことを就て研究したことがある、夫の白檀の研
究をやつた時に白檀の梅檀と同物で サンタン
ムアルブムの木で、近年帝国大学に 古代と
こだて時代から何日千年とたつて、白檀の薫
りや彫刻が富有義点と 用ひられて、白檀の畑の
所に武千萬の美男美女が共住仰を持つ

味と共に香気がみなぎる鎮静清涼効用を
性慾を抑くけれど、無量の罪業を消滅せし
めれば、特に娑婆世界禁制の宮殿ひい伝を性
慾を押くることが一番困難である。ところが白
檀の香気の働きは性慾沈静の効能がある
から古来寺院に多く用ひられたものと思ふ。
今日も浦安の薬の白檀、白檀油等と色
々ある。色々の白檀は性慾を沈静する作用が解
つれのもの。ようえんだいもの性慾を
沈静する白檀を大きな香炉に焚いて学校の
机を並べ、ストーブの白檀を焚いて其煙が
性慾を鎮めるやうにとの学生の思ひ向

悪い思ひ解消すると三つの白檀の志本法
を書きましたるかの高きます。

白檀は性慾を鎮静する効能のあることは初年以来
の経験もあれば。

○前に紙燭生活と私は思ひ出るまくを二分ほど書いた
が、高山の後四つの、廣中も紙燭をしてと云へ得よ
う、勿論廣中は二番清潔人もあり家族を長らひある
うが、廣中の心境を言ふと修行を積むことを
全く宝庫である。世界と調和して無為をまこと
まちまちに仕事を進めかけられたとき、自分の
氣持ちを清めるのは此時である。勿論廣氣もよ
ることと、危険な廣氣の二種つてい。のんきな

茶人の心境

市島春城

自分は曾つて茶人の心境を案じ、茶人ほど靜閑を旨とするものはないが、亦茶人ほど心の動きの强烈のものは無いと云ふたが、今考へると、これは茶人にのみ限ることでない。すべて藝術家の心境は皆斯の如くであると云ふべきだ。詩を案ずる人は唯だ默々として癡なるが如くであるが、心の動きは鐘を撞く如きで推敲苦吟外面の平靜と甚だ似ないものがある。畫家も同じ事で、その筆を下すまでは、或は數日沈思して何事か愁ふる如き態をあらはせども、此間こそ畫家が胸中に意匠を凝らす時で心の動きの最も盛んなる時である。一旦胸中に畫成つて、之れを筆に托する時は、疾風の如く初めて活氣を見れども、心の動きは寧ろ胸中山を揺く時にあるのだ。武藝にしても演劇にしても其他の藝術にしても皆同樣である。

古歌に「淺き瀬にこそあだ浪はたて」とあるやうに、深い淵には浪はたゝないが、蛟龍の潛む所はこゝである。無論淵にも水の動きはあるが、それが泡立たないまでゝ、藝術家の心は淵に譬ふべきである。由來蘊蓄が深ければ深いほど其形は靜平なものである。何人も諸般藝術に心の動きを認めるけれども、茶になると多くの人は無雜作に考へて、茶筌をもつて粉茶をかき廻はし、泡をたてればそれでよいではないか、心の働きがどこにあると喝破する。若し茶の作法が斯ることであらば、藝術と目すべき何物もないが、我邦に發達した茶は、交際の具として起つたものとは云へ、禪趣から導かれて、おのづから閑玄の趣味が無ければならんから、そこに茶人の苦心があり、そこに藝術があるのだ。茶人が閑寂を喜ぶ、「さび」や「わび」を貴むのも幽玄の禪味に副はんとするのである、茶室も調度も食饌も皆なこれに適はねばならぬ、決して茶器の豪を誇らんとするのでなく、飲食の美を衒はんとするのでもない。徒らに華美をつとめ豪奢を衒ふが主であれば、金力さへあれば何の面倒もなく出來ることで、茶人は別に心思を勞するに及ばぬ。茶席が幽寂の旨に適ひ、そして客人を滿足せしめることは、茶人の人知れず苦心する所で、時に應ずる器物を選ぶことも節序に適ふ幅をかけ花を挿むにさへ相當心を勞さねばならぬ。其の苦心は宛ながら詩人が句を推敲するのと毫も違はない。詩も唯一ト通り法式通り句をつらね音調が整ふたと云ふだけでは佳作傑作と爲すに足らぬ、常套を外れた一趣向がなければ佳詩とは云へぬと同じやうに、茶會の設けに於ても、客人をして成るほどゝ感ぜしむるものがなければ藝術味がない斯く云ふても、決して奇を弄することでなく又客をして意外の感を起させる工夫をなすのでもない。昔の大茶人が茶室の庭を掃き淨めて、わざと些しばかりの落葉を散らしたり、籬邊の朝顏の花を皆な取り去つて僅かに一花を存して、疏花密葉の趣を見せたり、豊公が拂曉利休の茶室を訪ふた時、利休は菓子の用意が無かつたので、水屋で咄嗟に白米をとぎ白らけ、それに雪白の砂糖を點じて菓子に替へたなど當意即妙の働きに茶道の雅談として傳はつてゐるが、妙處は斯る處にあるので、詩を作るにも畫を描くにも妙處の言ひ難いのと毫も異なる所がない。

兎角茶は交際の具であるから飽まで客を迎へる實意が籠り、人を待つの禮が備はり、客を喜ぶ情が滿ちて居らねばならぬ。

が多くの。鹽が寒くて風さえ吹くのだ。いやもやはり冷えるのかも知れない。ストーブが神からやってくるのもかもしれない。

秋も先づ今年はよく出掛けた方だつた。終し一度も大漁と云ふ程度にまで釣つたことはないが、どうもこの頃は、釣熊の話で持ちきりである。

私は天が澄んで、潮がいつぱいになつて、魚がいつぱいになるから、どうしてもこの釣りに出かけたい。義理が惡いと氣のすまぬ。古書に「鹽生るの時なり」とあるのは、自らの茶を黙して席に復して、茶人の心の底を夢見る。茶人の意匠に切でも算用の結果が、茶會を催すことを決意する。茶會を催すことを決意する。茶の本義を解しての茶會と云ふ。茶の人は所謂る一期一會の心を以て、茶の工風に中に生活して、心得へよと云ふのが、如何に茶の本義を解しての人は、茶の心を得ずに、茶の人は、茶の人は、茶の人は

く思はさるを得ぬ故で、一旦世を離れてこそ初めて世の真味を知り得るのである。庭中の心の如何は四季あらゆるを洗ひ去つて日々自然の人が求めても求め得ぬ飛躍的新鮮の心地が愈々後ハ全く生み変つたやうな和をもたらすことを考へずにはいられない。既往を考へるのも、光意を知る為めに、おうらんの如きである。

○予ハ先ず青陽閑飲の後、水島氏一巻を携へ、記文ハ雪山人自筆にて文一日閑飲の図あれども、図多くの図者故に、偶々あの図美次郎氏の閑飲の写本を見る、図ハ全部佳かりまゝ、偶まゝ写を活んとして共機を得ず。

此廿三日、蔵田氏来る。四洋を誓ひの志保原に招き、酒次如洋をして筆写せしむ。如洋五七杯の酒を傾けて、筆を走ま、光を一も原図に接せず、図中四五十の人、如洋の筆に伝う。皆流躍、勝写本にせるが優る。信、一時間ばかりして画既半ば成る。普通の書画家の為くして北四枝を写す。一日若くハ二日を費さん如洋の他筆、高くく伝くべし。画成つて見る、図中の人物皆活態を異にし、潤秀之蔵を脱して南画の本領を発揮す。最後の低金を駄馬あり、如洋為に謝意とする。原図一頭の馬ありて如洋為に一頭を加へて板

を添へ、予勝手の序文序を書し、之れを生て首
に置きて、墨漢一巻となす（十月廿四日）
○今体八一が著〳〵たる例芭蕉翁の句碑と置き所なきを自然とうるに漸やく早
大の思想館内の一室を今体と提携して其を陳列
せしむる。むつかしい。時の人に見れば
が、長者の新しきを好む。五ちいさいものも少からず見受けた。
豆棚もまた〳〵大谷と様つて訪問さん陳列に略々
泊んでゐた。私を漢籍六朝から唐宋と及び日本
八条良相和歌の新撰句題、その時代の遺品
か新発見の新しとして芭蕉集さんに数を見ると、鉢の
ち銭使かまう、此器かまう、此器かまう、軟度かあく、仏像の表

り、就中多数の瓦数、そて仮板あるこの六百数一と及
び仏殿、白鳳期なりし、其の文様まうの文化の
系統一伝を知り得ることあるもしるべし。百済
朱雀の瓦伝を取つて日本最古の瓦伝と比較す
ること多く難い。数伝の点あるべし。金石の学の術と
必ず一流の西服的例であるべし。瓦伝も解るべ
くも、文様を南方面に求めし比と暫く計り
ず、日本の古瓦宮の例さんあるのも少くさい別
美の宮殿造者の者なり。田舎の寺宮造者の例
ずず、都会地の人の別者の優るも市民なる
あもしろく感じさんた。瓦の部まで洞窟や祠堂
ちなみに箱めこんだ長方形の幅三尺長六寸丈

二尺の高さとする完全の鎧で、日給の刻してあることが
大小二種あつた。漢時代のものと武清金氏の聖庵
で似たものであるが、珠数のようなものがあつた。中に土偶の首が数個（あつた。これは
首だけ割取したものと思つて取つて見ると、
はるく、首の土製で体は木造であるのが木が腐
つて首だけ抜けたものと合つた。漢鏡六種ばかりこう
したもの異の低りやすかつたことが知られておもし
ろく思はれた。大形の駱駝と駱駝を引く牡丁の
樹い盛つた品が完全で出るのは目を奪はれた。こ
れは清内の遺品である。烏獸さまざまの品の中
で六朝頃の犬の耳が特に立つて居るのは注意を
惹いた。駱駝の婦人像白二三種の井戸・カマドの
数三彩の人物馬、大小の観音寺仏細な観音像
漢鏡六朝の特徴がそなはつて、宋あたりのものとなる
と品もまづ劣るくらいのもの、殆ど距離のある
ことを感じた。模造品も若干陳列されてあるが
偽造の巧みなるものは一驚を喫する。土氣を含まの
ものもあるから容易に判別し難い。唐代の品は彩
色の剥落したものを高人が補修したのも往々あつて
美を洗ひ取つて金箔の地を表わ
した。記録を信じ大阪を記すまでもないが、想像し
たらうと思ふことまでもいろいろ集め得たと感服した。
（十月廿日記）

岡倉とフェノロサの友好問題（1）

木塚貞長

九月廿日付紙上に掲載された清見氏の「明治十一年のフェノロサ氏と岡倉氏」と題する論説は我國美術史の貴重なる資料として深く敬意を表するものであります。それはこの両氏は日本美術の復興に重大なる奇興をなしたる美術界の大恩人であるからであります。

只併しながら清見氏が、両氏は最初際会ならざる間柄なりしも、晩年には不思議に疑惑し去りたることを繰返し、その原因を藝術家の間にありがちの一種の嫉妬、憂鬱感に帰せしめられたることは大なる疑問ではないかと思ひます。私は両氏の為何となく氣の毒なような氣持が致します。私は藝術界の名誉の為にも少しく所じて見たいと思ひます。

私は岡倉氏と同じくフェノロサ氏に師事したる教へ子の一人であります。又私は終始岡倉氏と寝食を共にし同じ年に東大の前身たる東京大學文學部の政治經濟哲學科を卒業した第一期の文學士であります。細くいへば當時の規則に依り第一年の教科は共通でありましたが、第二年よりは岡倉氏は哲學と政治學を専攻し、私は政治學と經濟學とを専攻したのであります。故にフェノロサ氏と岡倉氏の事は相當心得て居るつもりであります。

フェノロサ氏は明治十一年東京大學に聘せられ政治學、經濟學、哲學を教授して居られました。才氣には富んで居られましたが學力の方は必ずしも十分とは申されませんでした。特に政治學の方は最不長所でありました（是は門弟としてお恥いとであります）が、實情を明にするため言及するを許されいま而も同氏は來朝後許ならずして日本美術の卓越なることを認見し、その研究に没頭せられました。しかしながらそれがため本來の專門學科の研究は自から等閑になり、學力の向上進歩を阻止したると謗からざるべきはこれを認知するに難からぬのであります。同氏が日進月歩々として向上し居たる大學にあつてその立場を喪ひたるも亦已むを得ざる所であります。もし同氏がこれを覺らず他日再び來朝して就職を大學に求められしことありとすれば、それは同氏に取つて大なる不覺であつたと謂はねばなりませぬ。

然れども彼が外來の身を以て能く日本人の捨てゝ顧みなかつた日本美術の眞價を發見してこれを内外に高調したのは眞に卓見であつて、その識見の高邁なるに露かざるを得ない所であります。彼は一面には狩野芳崖氏下條桂谷氏等の知友を得、他面には九鬼隆一氏、濱尾新氏等の普顧を受け、日本美術の再興を促進せしめましたとは顧者なる事實であつて、その功は長く没すべからざる所であります。

一方岡倉氏は大學在學中も學科の傍、文人畫を西湖先生に、漢詩を春濤先生に學び、又私に謡曲を習ひ學生中の異色であつたが、これは公然といふ程ではなかつた。フェノロサ氏とは意氣の投合する所でもあつたか、既にその頃より時折通弁の勞を取り又助言を與へて居られたやうであるが、卒業後は通譯官の書格で互に相寄り相助けられて盛んに活動して居られた。

岡倉氏は由來豊富なる藝術眼の持主なる上にフェノロサ氏の指導感化を受け、切磋琢磨の功を積まれたればその識見を高められたこと既少ではなく。特にフェノロサ氏が外國人として日本の文藝について研究するの不便なるに反し、岡倉氏は容易にこれ等の文書を讀破研究するの便を有したることといふ迄もなければ、其進境著るしくして遂次世人の信用を博し、いまだ幾許ならずして新設の美術學校長の重職を拜せらるゝに至りました。

廣告

岡倉とフェノロサの友好問題（2）

木塲貞長

然れ共岡倉氏は自分の信用増進すると共に漸次多忙の身となりたればフェノロサ氏の用をなすこと困難となり、遂に有賀長雄氏が代つてその用を弁ずる事となりました。然してその結果岡倉氏とフェノロサ氏との關係漸く疎らき行きたるは繁するに難からぬ所でありますが、まして岡倉氏の進出によりフェノロサ氏のこれを獨占し居たる光輝は漸次減殺せんとするの傾向すら見えて來たのであります。

フェノロサ氏は自分の王座に揚ぎの生ぜんとすることを感知したるに因るか、或は又日本美術を欧羅巴に紹介し兼てその購入したる蒐集品を處分するの際時なるを看取したるに因るか、兎に角明治二十三年には日本を辭して米國へ歸られたのであります。私はその頃には岡倉氏とフェノロサ氏との關係は業に已に冷却し居たりと断言するの勇氣を有せざるも、從前の如き濃厚なる間柄でなかつたことは疑はないのである。

フェノロサ氏は米國へ歸來後余り多年ではなかつたやうであります。或時日本において捨て値を以て購入せられたる美術品は三千萬ドル近くの大金に代へて英國へ惜気もなく賣渡されたといふことである。又氏は歸米後間もなくボストン博物館に職せられ新に東洋部の部長に就任せられたと聞いて居る。然しながら長く日本に同伴し居たる愛妻は不貞問題の昏雲嫌のやむなきに至り、しかのみならず資産の大部分をその扶助料に割譲せねばならぬことになつたと傳聞して居る。

又曾て日本に同伴し來り日本美術を介して水魚の交はりをなした親友ビゲロー氏は婦人問題に關し背信の行爲あり仇敵の間柄に爲られたことも事實のやうである。しかもフェノロサ氏の博物館における椅子も譲許もなくして搖ぎ始め遂に離任するの止むなきに至り、重ね重ねの不幸は眞に同情に値する次第であります。

フェノロサ氏の後任に推された者は日本の岡倉覺三氏であつた、しかしてその推薦者はビゲロー氏その人であつたといふことである。岡倉氏はその頃米國と日本とを駆け往にし、往復を重ねて居られたやうであるが、私は同氏とフェノロサ氏とのこの頃の交際關係については何等聞知する所ありません。然しながら岡倉氏としてはフェノロサ氏は先生であり恩人でもあつた關係から見て、別段厚意のあるべき筈はないと思ひますが、フェノロサ氏にあつては自分の占め居たる椅子が仇敵ビゲロー氏の推薦により岡倉氏の手に歸したることについては心平ならざるものがあつたことは想像するに難からぬ次第であります。固よりこの事につきフェノロサ氏より苦情がましき事を申出らるべき筋合の事にあらざれば、それが表面化して兩氏の間に仲違の起るべしとは思はれざるも、左樣な氣分がフェノロサ氏の胸裏に潜在して居たとすれば當時の親密さは自から減退して冷却し去りたるは已むを得ざる所ではないかと思ひます。

廣告

岡倉とフェノロサの友好問題（3）

木塲貞長

明治二十九年にはフェノロサ氏は再び日本に渡來せられた。それは米國において志を得られなかつた結果でもあらうが、同時に日本に大なる期待を持つて來朝せられたのではないかと思はれる。然るに日本は外國人には想像も出來ない急テンポを以て進展し、フェノロサ氏再來の頃は最早同氏の助力を求むるには余りに進歩して居た。帝國大學は勿論美術學校においても日本人にて結構間に合ひ、最早外國人の助力を必要とせざる時代となつて居た。稚拙、夏達等の大家が僅々七八百圓の年俸にてその職を奉じ居る所柄、高給を懸けて時代發れの外人を招聘するの余地のなかつたことはいふ迄もないが、フェノロサ氏としては外國人の悲しさ、時勢の變化を看取して紙上の情勢を察することに困難にして、徒らに舊友や門下生の斡旋の足らざるを憾み恩顧の感を懷かれしやも知れないのである。

殊に岡倉氏に對しては もつと期待を懸けて居られた筈であるから、憤慨の度も一段と深刻なるものありしを想像せしむるに足ると思ふ。一方岡倉氏においては舊恩深きフェノロサ氏に對し必ずしも冷淡なりしといふ譯にもあらず、事情の許す限りは十分斡旋を努められたはずなるも、時代は過ぎ去り過去の人と雖もこれを如何ともする能はず、遂にフェノロサ氏の根强き依頼に對し或は逃を打ち、面會を避くる等の窮策に出られたることなきを保し難いのである。もし果して右に類したやうな事實あつたとせば、フェノロサ氏の岡倉氏に含む所の大なるものありしは亦やむを得ざる所であります。他日兩氏がパリにおいて不意の邂逅に際し フェノロサ氏はその宿所を定め次後過て通知すべきことを約しながら、遂にこれを果さゞりしことも異むに足らざるべきを思はしむ。

私はこの際に想ふとき フェノロサ氏と岡倉氏との交情が晩年に至り益却し去りたる事に默し眞に遺憾に堪へざる次第でありますが、それも已むを得ざる經路を辿りたる自然の歸結に外ならざれば、兩氏のいづれをも咎む可きにあらざるを思ふのであります。而して私は兩氏のこの仲違を淸見氏の所謂藝術家に有り勝の一種の嫉妬、或は藝術觀に譲せしむるに躊躇せざるを得ざるのであります。

終りに臨んで一言付言し置きたい事がある。それは有賀氏の事である。有賀氏は我々よりは二三年の後輩でありますが私は或る事情でよく知つて居ました。同氏は多才多能で精力無比でありました。同氏は岡倉氏に代つてフェノロサ氏の用を弁じて居ましたが、美術に對しては岡倉氏程の趣味はなかつたやうであり公法學者であり國際公法の權威者でありました。

岡倉氏に代つた有賀氏はどれだけフェノロサ氏に接近せられたか私は何等聞知する所なきも、フェノロサ氏が再渡來の際同氏の感懷問題に關し莫大なる同情を寄せつゝあつたと思ふ。フェノロサ氏が東京高等師範學校の英語教師に聘せられ一時を凌ぐことが出來たのも、何等よる所はないが、私は有賀氏等の斡旋の結果ではないかと思ひます。之を要するにフェノロサ氏は有賀氏を尊とし深き感謝の念を有するに至つたのはこの頃からの事ではないかと思はれます。フェノロサ氏は岡倉氏を離るゝに至つたのも自然の數であります。フェノロサ氏の後妻たる未亡人が、氏の遺情を整理するに當り偏に有賀氏（及び狩野氏）に縋りその助力を求め、更に岡倉氏を冷淡に置くことなかりしことも これ等の事情によるものではないかと思はれます。然しながらこの推察が當つて居るかどうかは固より保證の限りでないことを特につけ加へて置きたいと存じます。（終）

廣告

の婦人問題かなどもうまく推察されて、フェノロサは
うまく天才的の鑑識眼をおつてゐるものである。
その名の示すごとく、米国種かのごとく、東洋的の人
種系でもあるかとおもはれる野卑きわまつて、畜
生類に振のうつたやうなである。　十月廿五日記
フェノロサは多年天分ある学徒を教授したるを日本
の美術を鑑賞する方を宣ちに勉が
あつたと云く得るのであるが、一旦日本を去つて日
本を持ち去つた美術品骨董類を一括して長
却したのが、法外な値段でもあつたらしいやうである。
云へば彼の中にも日我邦人の愛玩で無くな
ものも可なりあるらしいから、此等の人々を思

慮を特ひたるが無理ならぬ。美術家の
フェノロサが物米後高くと称へ、高の
勝所に過ぎず、其所作は木場の書いたものの
ハ高めの不良とならけれども、美術家良人の称と物
しいものであるが、高の鑑賞とつたのも
フェノロサが或る夕ピストと面(じ)たのと称へ
たのかも知れないが、フェノロサが高と共謀した
のエゲローの秘書と侍せしめ、つまりたをやら
せるとの関係が破れたのも美を憎
悪する所以なり。何んにしても此の称法
の結果、フェノロサは大なる資産を失つて且
つ正米利加にハ不評判であつたと云はれてゐる。

フエチロサの持ちつれ日本倫敦の或る富豪の米国
の未亡人が買い取りたるをポストンの博物館と
寄附する時なり、フエチロサの名も現はいまい云
ひ出すが、フエ氏の評判がうるさいのが博物館で
は氏の名を現へすことを忌んでとゐいたとゐる有
賀氏談 ちなみにフエ氏の為め其不幸を嘆くと
いふが、ちゃうど商人が値段を値いて美を抑止
せしめん、其値の之んを拿ぶ時はフエ氏の敬徳
の値段がまるまる出ることを恐れと
うらもあるヴエゲローとの値交の或いはいも
を値段が分つたのあるもあるべし。このやうなる
が遠き日本にも到れば、フエチロサの真価の

来朝する話判であつたことを想像する難かるべ
きである。何故豪を友人とせつれんと就ていよくく
ドをうんが、ウエゲローは金満家があつたかく
富を賭し賞を与へんが為めあつたと信ぜん通の
言あるも、或の知るべきか、何んの意フエチロサの行動
いろ〳〵の欠點もあるけれど、米国を突んでうらんず日
本を来たる未だ突んず、氣の毒の境遇で終つた
のの憐んでやるべきであるが、身から出た錆だから已む
を得ざるの木場氏のまぐれを知らうと、公氏者く
ことを辭けるやうにこうして其の生きる所を
神者する

フエチロサは日本の古代美術を研究した

で自分が最初に木曽の業生大ふるの古刹を訪ふに際し佛像を時番部が所してあつた、フエヲロサの繪畫を標準とあまり面白くない共の心動きを説明したものであつた。繪畫は古書が重きを研究資料としつつあり、此うち初期時代のものと思はるる本画は古書を今に開却して浮世繪を研究してゐる、フエヲロサは更に浮世繪を研究してゐるうちに、本朝にも受けがよくかつ外国人にも浮世繪研究をうつて見せようと入つたとの、小林文七の勧めで浮世繪の研究を執つて所である。フエヲロサは浮世繪の研究を執つてある時の小林の家内の位置を此里で花魁

法隆寺

である。

ビゲローはどんな人であつたかうるさくむるさいが木場の浜中婦人に対し特別待遇者と言はるる、身分の前と言いたことを示すものと思はるが、矢張りよい人格でなかつたらしい、但し外人が南蛮時芳四屋や雅邦が未だ世を認めざんず、富貴若こおれのを氣の毒がり奇妙いくらうつて補給したとこのことを文へてゐる。

年者がフエヲロサの教授を受けてゐた頃一二友人と氏の優居を訪ふたことがあつた。其の家はどこであつたか忘れたが、フエ氏は不在であつたが家を入つて書斎や寝室をもを一覧した居間の間と思はるる京の古い座敷

は成の繪が書かれてあつたことを記憶する。

当時アエ子ロサ〇の心であらうと思ふてゐたからとりあへず
らうか、大きな特が二つ計横つてゐた。そこらの帳
が花でもんてあつてあらう。
木挽の江中に有賀を二三年の後に体業したとある
が其の思ひ出で次の俳句である即ち云うも木挽の
一年後輩であること為会こゝに附記もおく。

〇稀書複製会の稀覯書複製事業は八田孫
りを先は更らに次期と入る、二ケ年を一期とすること
第一期以来既に十六年を経る北川の配本二百三
十三部三百廿九冊を達すると今日の盛時に比し今
八丈の半数なれども、其業を継続し

途に次期に入らんとするに、極任の山田治氏の熱誠
実為般の手数を自から執り、任務の事を司ぶる
由なし、爾来十六年継続して本紙の書物にて三十冊と
ることの出来る大事業と云はざるを得ぬ。今や世
を挙げて日本に未曾有なることを忘れんとす、雖ども
も特に云ひんとする時に方り、本会の人が幸にして
其を支持し殘喘を繋いでゐることを思ふと本会
の事業に対して感謝の涙を注ぐものがある。
（十月廿六日記）

〇予が家の第祖父時代に通船事業を営みしこと
あり盛時千石船四十艘を有し、毎年往来する回船
千石を漕手と称し、一人とか、口銭と称して

家を田舟に関する記録（七ヶ条）、新潟の開発者
関係者の中にも、譜を引んだ日蓮に関して人に託した文献を
捜索したが、一も得ず、想うに新潟の数々の災
の原因となり、焼失したが、唯一の僅か
に残存する白山神社に献じた巨大の絵馬額あ
り、元、前年新潟の諸寺社に託して古寸人を訪ねた
とがあるが、これも焼失、特に寺庫に収め社殿の
ちゃんとなければ、一時の今津八一と浜浦の盛初を
聞きたいが、海辺の文献を乱れ拾ひ集し
ける人の住田某なる人の浜と命時氏田舟
業の文献も拾ひ集めたことを明らかにし、
今津を始め、多くの一説

○時の郷里俗説に白米一俵刈来る、善出人を
又んばかりとする人と、接新書と見るべき、市の押印と
称する説相違することがあるが。「人字屋」説と見て
書かさんば、概ね海辺一説「雲」の高数が絶米回来
問屋の手の情」、「謝礼」とを商名を六の七年より
こ、米屋が米を送る海をとり敢て不思議はないが
米の送物は破天荒也、珍米うて白米粒ホ味を
産也。内子長こが余見つて云く、余の押印の相違
は米一俵と称すると、「人の手が書を求るは石見屋
いるが、前日絵巻ものこと生産の時一今なく云く、北海
横濱の海産福三郎氏人の後援をして新潟さんに
多報業の板と刷り見て板上に春成先生の書さ

れなる新面掲けあり。由りて係者に就て歳の面来を問へる
横濱の或る有志者の宅の附に係るといふ。[illegible]人今春俄泡
筆下の奇渡者が、何れらもが賜れ得ざるべからんかと
手を尽めの家拙書のあるを乞き且つ書き且つ笑
ふ。

十月廿二日記

○柳瀬日年氏来書数種一冊を寄せ其の巻首

云

茲書先生甲子已以来三千行五也或載日化或
録新紙隨吟隨泡紙不能訪化之前後析為三巻
毎巻在石與未輙自加朱未嘗示人者今乃発出
之影刻以領一依原稿識毫莫改吉凶不拘
一年間之遺稿可掬掬耶

昭和甲戌秋東京未生会員の新発
本書の体裁を知るべし
巻首未生の自序に云
未生居士
予幼習於松宗先生之塾之生專修經学
暦不屑詩文而已嘗朝此經学之身既而及齢
十六七之友多由松莊善好長於余十四五者忘年
交為予説詩法從是稍解詩味解與往之有化
而拙愚無可示人者齢二十二頃及於共慎義
塾寄入於芝高義塾專会洋学不復心詩而
空中心之不留稍今於俗古稚而子素元旦化予
有感試做二十字是詩邪邪非邪予知不知焉

左の二三詩を抄す

木屋老人

崎嶇進徒排蒙皇身体奇点突敵強、我馬不嘶
人石徒衝天殺氣横夜鉦と

朱注云 乃木軍曹一日示之乃木中佐中佐海賞後
往数年乃木将軍金州城と化持日共金化
日蓋将軍已忘為乃化也

明治十年従軍中北部所化点石少而今僅記北一首
乃北時伍庭蔵兵潜行山谷之間 北時伍谷将軍之事
捧来動粒一毎存満目悠悠稲葉村鮮血埋屍と
猶動向人烈戦跡口特言 是為明治十年従軍中中心
日向稲葉村西軍涵敵之四面敗而陥没塔状

大悲 新聞紙上詩而亦已忘矣

水雲硯銘

水雲之精 木紋之寶 可持堅矣 其為俱矣
世年乃硯 既石質甚特 使用涵羊石硯矣者
用硯也

端谿天与硯 故銘雕琢
至寶天成 易須雕琢 亦似忘迂 一生抱璞
此硯所与端 尤物是以 捨是亦秘寶也

○○ 閑談 文鎮之書きつく

一化さうら今貸す者の為 弘 芳村

一我北之狭しと思ふ柴の尾に うぐひさし入

る嶺の白雪　梦宮殿の
一とく老を迎ぶを見ん心為　北条氏政
思いとゝりけり　大隈言長
一行秋を尾花がさらばくれば　一茶
一あれ人と将を推に　飲花さん　金土
漢詩の和訳　成功すること少なき方のかたち　成功
のちか
唐物巨源の詩云
五色揚柳系、立馬煩長打一枝
唯是春風最好情　慇懃更向手中吹
宮姫賢の詩云
うんぬん吹名揚ゝ情ゝき　物の手折

一枝をしいの手折
李白の詩云
聞公恐懼流言日、玉斧恭過下士時　伯使
南時身役死、一生忠信有誰知
久坂玄瑞　前詩を大石良雄　祇園遊ばせ
云〳〵
祇園遊　島原揚屋　傾城　狂ひの女中　者
氣なんぞ死なしやんしかく、忠か不忠か分
かりやせぬといふ。
薛濤の詩云
風表日將老、匡期市朝、不徒心人室徒
日心苦

[illegible]春矣の御[illegible]
しづ心なく花の散るけさぞ長き
る秋、情をつくし、[illegible]花をなげ、つちや慈のつく
つくし

明治廿四年冬を拾ひ神とする四を見る
混耶沌耶象天之先、宵乎眞乎、衆生自然
無見無聞為再無識、亟剛亟強守再柔弱
無屋也則不知所將無顏也則不知所卯有
穀有逢者者知之為人有鬱有鬱者者
知其為人非魚人果北何拘歟、至秋知非
因大学之節身則本末之道之節神也
紅葉論に入るべき景物の和歌一首を得たり

[illegible]

おーと遠者と使ふ
思く見いづくに在るか世の中のまことと猶うゞ
ゆのみをうらけける

○近者の書物展覽の幕末維新初年の木版
彫工の名人と其の經歷を收む、平僧[illegible]江川と
木村の名を知るまみ、今木彫工將[illegible]亡ひんとし
殘端をつちき得さは唯此稀書殘本の一[illegible]
あるを伝の感慨を埃くす、看此の巻者
と云ふ[illegible]めあり、

○昨夜の[illegible]印刷人[illegible]人[illegible]中央公論社[illegible]
二十餘名を紅葉[illegible]、招き[illegible]七行七席を
斡旋す、今朝四方[illegible]を[illegible]

明治十年前後に於ける東京著名木版彫刻師

木村嘉次

こゝに特に明治十年前後としたのは、別にその十年に木版界の革命があつたからではない。唯、その年の十月に第一回内國勧業博覧會が開催されるにつき、府下の著名な木版師が、他の各種の工匠等と共に、こぞつてその作品を出陳した、いはゞ木版史上の記念すべき年でもあり、又實際その頃には既に、活版、銅版、石版、西洋木版等の洋式印刷術が興りかけ――否、銅版の如きは夙に廣く世に行はれてゐた――、木版師を脅し始め、漸く彼等に美しい整版の衰微が解りかけてきたから、この博覧會が最後の――そして最初の――、華かな木版彫刻師オン・パレイドだつたからである。

私は彫刻刀を取ることはできぬながら、これら木版師の一人たる嘉平の孫だけに、常に木版には少からぬ興味を寄せてゐる。そしてこれまでも、嘉平とその弟子達については折々書いてきたが、微力のため他の同職の調査にまでは及べなかつた。

偶々東京府勧業課編『東京名工鑑』（明治十二年有鄰堂刊）なる一書を見て、その劒剛の部において、博覧會に出品した木版師の長所、出品物名、開業及び沿革等につき多少知る事を得たから、とりあえず轉錄しよう。勿論、こゝに列記した人達だけが著名な譯ではない。この書の例言にも斷つてある通り、數名の彫工が洩れてゐる。例へば『烈祖成績』の五大彫刻者の中の江川八左衛門、宮田六左衛門等の如き、しかし彼等については別の機會に書き度いと思ふ。

因に、『烈祖成績』は水戸の須儒安積澹泊の名著で、大沼枕山の「言葉を藉りていへば、「近世に稀なる奇珍にして有用之書」である。八左衛門、六左衛門、瀧澤菱吉、竹口瀧三郎及び嘉平の五人が代表者となり、彼等の弟子や府下の同業者等實に八十餘人を選つて彫刻刊行し、これを丸屋善七、北畠茂兵衛、稲田佐兵衛、山中市兵衛、中外堂栂次郎、内藤泰次郎等に賣捌かしめた（明治十六年一月四日「郵便報知」に依る）大出版物である。第一回の博覧會にはその四ノ巻までを出して、擔當彫師はそれ〴〵鳳紋賞牌を受けてゐる。總費用二千八百餘圓所要日數十七ヶ月、一部定價四圓。まことに木版本の最後を飾つた尤物である。この驟刻物は確かに字彫りの典型になるだらうと私は思ふ。精しいことはいづれ稿を改めて書くことにしよう。

尚參考までに、『名工鑑』の例言のうち數項を拔書きしておく。

一、此書ハ各工ニ就テ質問シ、其答フル所ヲ劄記ス。故ニ往々隔靴ノ憾ナキ能ハズ。然レドモ敢テ反復尋究セザル者ハ、其作業ヲ妨ゲン事ヲ虚レバナリ。且記載ノ際其實ヲ失ハンヲ恐レ、復文字ノ雅馴ヲ要セズ。

一、所長ノ部ハ其遠ブル所ヲ揭ゲ、以テ本人平生得意ノ處ヲ示ス。或ハ得意ノ處ナキモ、已ニ世人ノ品評ヲ得ルモノハ姑ク連記シテ參考トス。

一、助工人員ノ部ハ現時工事ニ使役スル者ノ多少ヲ示ス。

一、博覧會出品ノ部ハ内外國博覧會ノ出品並賞牌ノ種類ヲ略記ス。

一、開業及沿革ノ部ハ傳習師或ハ發明自得及開業沿革ヲ述べ、猶現時ノ景況ニ及ブ

爰に所長とは長所を、助工とは弟子、子弟等をいふ。又内外國、發明などの文字があるが、これはいふまでもなく木版師以外の工匠をも引括めていつてゐるのである。以下、註並に句讀點は便宜上私の挿入したものである。――筆者

鶴井鳶廣（明治十年當時五十一歳）

打出型兼版木工・木所區鎮右衛門町二十一番地・東京府士族

所長　打出型。

製造種類　額面、石摺正面、銅鐵鑄型、版木一式、革打型、紙打型、革押型（人物鳥獸、草花彩色）。但シ革製ハ袋物用、大判物ハ天井、襖、敷物、文庫貼等ニ用ユ。紙製モ亦同ジ。

博覧會出品　内國勧業博覧會ヘ彩色擬革紙並細密彫刻版ヲ出品シテ、龍紋賞牌ヲ受ケタリ。

開業及沿革　三十八年前ヨリ版木彫刻ヲ好ミテ自然ニ鍛練シ、又天保十四年打出シ型ヲ發明シ、爾後之ヲ支業トセリ。近來西洋人ノ注文アリテ殊ニ盛昌ナリ。（註―助工人員は記してない）

楠山金次郎（三十八歳。業名正文）

器械蒔繪兼版木工・本所區北二葉町九番地

所長　器械打紋章、器械蒔繪。

製造種類　紙高蒔繪、陶器、銅器、額面貼交、革卷烟草入。

助工人員　弟子二人。

博覧會出品　内國博覧會（註―以後博覧會の二字を略ス）蒔繪紙並ニ額面二枚、素月ノ文字並松鶴ノ模様ヲ出品シテ褒狀ヲ受ケタリ。

開業及沿革　上村善藏ニ就テ十一歳ヨリ十年間版木彫ヲ修業シ、二十一歳ノ時ニ開業、弟子十五人ヲ使役シ、六年前ニ器械蒔繪ヲ發明シ、一昨年ヨリ金銀研出業リ、襖紙、金製子地模様付金摺札紙ノ製造ヲ始メ昨年（註―明治十一年）ヨリ漆模様革等ノ器械製造ヲ自得シ、開業以來隆昌ナシ。

江川市五郎（四十三歳。業名江市）

版木工・本所中ノ郷村二十六番地

所長　細密深彫。

製造種類　鉛版模型、普通書畫、版木、活版挿繪。

嚢品家（註―顧客をいふ）築地一丁目平野富二。（註―本木昌造翁の門人）

助工人員　弟子三人。

出品（以後博覧會の三字を略ス――筆者）内國博覧會ヘ東正ノ畫ケル「松ニ鶴」ノ圖ヲ彫刻出品セリ。

開業及沿革　同村彫刻師江川仙太郎（註―中ノ郷村四十三番地、後改メ兩國米澤町

一丁目五番地居住。嘉平の覺え書に依ると仙太郎は『烈祖成績』巻ノ一の二十丁と三十丁とを彫り、市五郎は巻八の十一丁目を江川八左衞門の代刻をしてゐる。）ノ門ニ入リ、學ブ事十年ニシテ業ヲ卒ヘ、二十歳ノ時開業シ、爾後專ラ書畫家ノ嘱品ヲ製スル事十餘年。維新後ニ至ツテ文部省ノ命ヲ受ケ、『輿地誌略』等ノ挿畫ヲ刻セシコトアリ。今ヲ距ル四年前（註—明治八年）ヨリ丸屋町五番地ニ於テ吉川庄平ト合併シ、前述數品ノ彫刻ニ從事シ、其景況昔時ニ比スレバ遙カニ盛ナリ。

松島政吉（四十七歳。號英齋）

版木工・日本橋區濱町二丁目三番地

所長　細字。鐵筆自在筆力ヲ損セズ。

製造種類　圖物、錦繪類。

助工六人。（註—以後人員の二字を略く）

出品『烈祖成績』ノ一書（註—出品は巻四まで通丁六。その後巻五を三丁彫つてゐる。）ヲ彫刻出品シ、鳳紋賞牌ヲ受ケタリ。

開業及沿革　錦繪版木工松島房次郎ニ就テ十三ヶ年修業シ、二十五歳ニシテ開業シ、專ラノ履工ト成リ、三十歳ニシテ文字彫ヲナシ、錦繪ノ版ヲ彫刻シ、兼ネテ文字彫ヲ命ゼラレタリ。維新後文事ノ日々ニ開クルニオヨビ、書籍ノ彫刻益盛大ニ至リシガ故ニ、往時ニ反シテ專ラ兼業ヲ轉換セリ。近來活版盛ンニ行ハル、ト雖モ、未ダ木版工ニ對シテ大ナル障碍ヲ付スルニ至ラズ。（註—當時はまだ平野富二、金津平四郎父子など、極く少數の先覺者が活版印刷に腐心してゐて、ブルース型活版鑄造機が米國から平野の築地活版所へ輸入したのは明治十四年だといはれてゐる程だから、成る程英齋のいふ通り大した妨げにはならなかつたらう。）

竹口瀧三郎（六十四歳）

版木工・神田區旅籠町一丁目三十三番地

所長　畫圖、但シ銅版ニ劣ラズ。（註—この頃、玄々堂松田敦朝、嘉平門人麗岸堂梅村槃山、槃山の門人で嘉平の女婿打田霞山等が大いに銅版界に活躍してゐた。）

製造種類　書籍、畫圖、額面。

助工　五人。

出品　內國博覽會ヘ『烈祖成績』（註—巻四まで通丁十五。會終了後も巻十一を除いて二十巻まで各々一部宛彫つてゐる。）ヲ彫刻出品シテ鳳紋賞牌ヲ受ケタリ。

開業及沿革　十三歳ノ時ヨリ武州秩父郡版木工森野玄黃齋ニ就テ十ヶ年傳習シ、二十三歳ノ時大傳馬町ニ於テ開業シ、開成所ノ用ヲ勤メテ英和辭書ヲ彫刻シ、維新ニ至リ文部省及ビ大學南校ノ用ヲツトメ、專ラ彫刻ニ從事セリ。但シ四五年前マデハ該省ノ書籍類飜刻ナラザリシヲ以テ、事業尤モ繁盛ナリシガ、爾後飜刻ノ禁解ケシノミナラズ、銅版等流行ノ爲メ大ニ衰微ニ傾キ、維新前ニ比較スレバ、工事凡ソ三分ノ一ニ減却セリ。

瀧澤義吉（三十一歳）

版木工・麴町區麴町十三丁目十番地

所長　大小文字。

製造種類　圖物一式。

助工　七人。

出品　內國博覽會ヘ『烈祖成績』ヲ出ダシ、鳳紋賞牌ヲ受ケタリ。（註—博覽會には巻四まで通丁十八を出だし、引續き終巻まで刀を把つた。）

嘱品家　麻布新網町田中義廣、鰐淵町佐田博芳、山梨府下內藤傳右衞門（註—溫故堂といふ。）、芝宇田川町內藤彌平次、通三丁目丸屋善七、中橋下櫃町篠崎才助、横山町太田勘右衞門。

開業及沿革　幼年ノ頃ヨリ父義吉ニ就テ修學シ、二十歳ニシテ家ヲツギシガ、維新後相榮エ、十一年頃ヨリ衰微ス。維新後追追小學校ノ開設ニ際シ、諸家ノ註文多ク、一ヶ月ノ出來高維新前一ヶ年ノ產出ニ匹敵セリ。故ニ工人ヲ增シ、益盛大ニ營業シ來リシ處一兩年來注文少シク減ジ、ノミナラズ同業者多キヲ加ヘ、爲ニ得ル所ノ工料ハ一層少ク隨テ工人ノ數ヲ減ズルニ至リ、今昔日ノ景況日ニ比スレバ却テ繁榮ナラズ。

大澤鉞三郎（四十三歳）

版木工兼印刷、銅版・四谷區傳馬町二丁目

所長　銅版類似圖物、細字彫。

製造種類　書畫木版、銅鐫印章。

助工　弟子職工共七十人。

嘱品家　芝區三島町和泉町和泉屋市兵衞、芝口二丁目和泉屋善兵衞、神田區明神下島屋平兵衞、麴町區四丁目磯部太郎兵衞、山梨縣下內藤傳右衞門、舊麻橋侯。

出品　內國博覽會ヘ『烈祖成績』ヲ彫刻出品ス。（註—然し覺え書に依ると、四ノ巻までには彼は出てゐない、唯僅かに巻十三第二十三丁を江川八左衞門の代刻をしてゐるに過ぎない。）

開業及沿革　市ヶ谷佐內坂町江川金次ニ就テ修業スル事十三年、三十一歳ニシテ開業ナシ、印判ヲ兼業トセリ。其後明治年間ニ至リ、諸學盛ニ行ハレ、木版益々多ク、隨テ彫刻ノ注文愈繁ク、殊ニ當春來（十二年）諸家ノ嘱託ヲ受クル事尤モ多シ。又近來銅版ノ職工ヲ使役シテ兼業トナスニ至レリ。故ニ維新前ト比較スレバ其工事十分ノ九ヲ增加セリ。

小泉辰五郎（年齡不明）

繪彫兼印判彫刻工、日本橋區横山町二丁目一番地

所長　錦繪人物ノ頭部彫。

製造種類　錦繪版、印判、版木一式。

助工　弟子二人。

嘱品家　兩國吉川町加賀屋吉兵衞、小傳馬町三丁目中村小兵衞。

出品　內國博覽會ヘ神田錦繪商某ヨリ出品セシ一枚摺錦繪版木ヲ彫刻セリ。

開業及沿革　父辰五郎ヨリ傳習シ、二十歳ニシテ家ヲツギ、專ラ錦繪版ヲ製造セシガ、維新前ヨリ又印版彫刻ヲ兼業トセリ。但シ從來工事ノ盛ナリシ時ハ、職工十名ヲ使役セシ事アリシガ、近來錦繪ノ彫刻少ナク、又依託アルモ工賃ノ廉ナルニヨリ雇工ヲ減ジ、印判並通常ノ版木彫刻ヲ專門トナシ、往時ノ本業錦繪ノ彫刻ハ却テ兼業ノ姿

トナレリ。

杉田金助（三十歳）

版木工・麻布區鳥居坂町一番地

所長及製造種類　文字並圖物。

助工　六人。

鳴品家　通二丁目須原屋新兵衛、芝區宇田川町和泉屋吉兵衛、南傳馬町小林新蔵。

出品　内國博覽會へ『烈祖成績』ヲ出ダシテ鳳紋賞牌ヲ受ケタリ。（註―巻一より巻三まで各一丁宛彫つてゐる。）

開業及沿革　該業ハ四代前ノ創立ニカヽリ、本人ハ父金助ニ就テ修業スル事八ケ年父死亡、依テ家ヲツギ營業セリ。尤モ黠譯物ノ多キニ隨ヒ益盛大トナレリ。

木村嘉平（五十五歳。時によつて家名を嘉平と用ふ。）

版木工・神田區小柳町十三番地

所長　筆法正整。（註―参考までに、第一回内國博覽會の審査官々長前島密、部長町田久成等の褒告文を轉載しておく。

彫刻精美ニシテ地面用整ノ輕キヲ殺文字ノ兩邊刀痕齊整ナル爲メニ磨滅ノ殊ニ遲キヲ證ス老熟ノ手ニ非サレハ善ク此ノ精ヲ致ス能ハス賞ス可シ）

製造種類　版木、額。

助工　八人。（註―覺え書と、元印刷局專屬彫工川澄金彌老の記憶とに依れば、田野村金四郎、高木直定、風間辰之助、駒村金之助、伊藤祐太郎、その子寅吉、富田宗次郎及び楊堂木村德太郎の八名である。風間は文字の素養があつたので、金彌の姉婿道之丞といふもに『烈祖』の校正をやつてゐる。駒村は通稱駒金、バレンを造るに妙を得てゐた。木村德太郎は「書物展望」三ノ八號にその略傳を記しておいた。その後心掛けてゐたら、彼が三省堂の『日本百科大辭典』や、横井時冬編『日本工業史對照圖』などに刀を取つてゐることがわかつた。又楊堂の號を以て彫刻したものには、櫻痴居士の『春日局』の局の肖像がある。金彌老は嘉平の長男正義改め四代嘉平の門人で、その父祇義（よしみ）は嘉平の下職を勤めてゐた。）

鳴品家　宮内省、文部省其他諸官省（註―維新前には島津、加賀兩家、書肆須原屋茂兵衛などがその主なる花客だつた。）

出品　内國博覽會へ『烈祖』ヲ出品シ鳳紋賞牌ヲ受ケタリ。（註―巻四まで通丁二十八。その後終巻まで各々一部を彫刻す。

開業及沿革　祖父嘉平本業ヲ開キ（註―天明年間）以降連綿相續シ、維新前ニ在テハ加州及薩州其他諸家ノ需求ニ應ゼシガ、廢藩以來一時衰頽シ、明治六年ノ頃ヨリ宮内省御手元御用ヲ達シ、續イテ文部省其他諸官省ノ御用品ヲ製スルニ至リ、維新前ニ比スレバ事業盛大ニ赴キタリ。（註―「書道」二ノ十一、十二に嘉平父子の事蹟を書いておいた。）

先にもいふ通り、『東京名工鑑』が江川八左衞門、宮田六左衞門を洩らしたことは甚だ遺憾である。八左衞門は文化文政の頃谷清好と共に筆意彫りで鳴らした彫工で、美啓と號した。明治十年前後の八左衞門は恐らくその子であらう。博覽會には巻四まで通丁十七を彫り、その後終巻まで盡力した。六左衞門は繪彫りの名手で、字彫りを兼ねてゐた。『烈祖』には巻四まで通丁十二を刻し、その後同じく終巻まで克く勉めた。

長岡氏より直ちに拔刷す、和田は何の為めか予の去
留を求むるか共意付度し難しとも一生の友誼
し難く文字を修むるの暇もなく草々として
辱し、余は年長岡と親しく、彼天
荒しとなす、吹嘘去留を容す、明い拙速に在り
と云へんか

十一月一日記

○日清戦争英の面目如何今社の大体合体と清し合体
條件とすると雖も行かぬ、資本金を多くバ表
英い四百萬円我社は就る五十萬と云ふ者はあれども
現下株の取締りとなる者の四十萬円と雖
彼れは三十萬円なる者の例を
は早くもんくを先鋒とする世間の評判は

りも表うあらず、機械並に工場設備優るもの多くも
重役始め工場人物共に優れる優るの一概を先鋒
の故を以て資本金優る一概を先鋒
役員を選ぶべきなり機械能力の大なる故所を以て
自から能力を殺す資本の大小を一定を
金い表資本額の千分の一を出さば可なり、双方合
体の形式を取れば全部の資本額の千分の一を納
賦せしめ出資とする不足の支出を為すこと
となるべし表社は資本を以て社員
合体する者の解散することなるべ社員買収さん
らることき形式となる、然るに表社の新る形式とも思
んで合体せざる可らざる必要あるなり。合同する

何となく之を合くの他ものと云ふ合同すべし、会社の年数多き
実業界に云為する人寧ろ陳套なり、秀英い実を云くに
古い以外なんの外に老成とも、今後展開すべき活力
を有せずとも見る。世間の評判もそうなる時所以他
社名の如きも歴史上の連一概に現在の会社の名称
流するは不可なるべく、新会社合併して印刷界に雄視せ
とするなら寧ろ新社名を撰ぶを可とす。過去に
る歴史を拘泥して古い名を捨てることを進
めを新するの為めに大日本印
刷株式会社とでも呼ぶべしとは云社重役今の定
張して今社の合併するのいつも社名が面倒の問題
となるのは各会の関する所なるかをまた多い様似て四

此決しなかるべし。先方が望むことを
会の名を存することを主張するとなれば、こんが為めに社名の如きも株
主中にも賛成と得難きを如何とも毛頭なしまるまの為
るを免れず。一方の社名を存することとなれば、
別度化の一社は併合されたるとき観を免かれず
しても、両社融和の気会先の厚頭に破れ別度四
溝なるを得ざるも合併後の重役を略きすべき
やも社名と共に面倒を生ずる如き事なれば、これも
双方現状のまま合振置くとするべし、現在表面側なる
方も公平なるべし、何等面倒なく
社は九名の重役あり、社長英い五名の重役あり、
増田い二社有名なる故、秀英側は重役となるも

七名ゝて後ゝ二人多し、音後数の物衡を保つゝゝ
後ゝ二人増して十四名とすべきゝゝゝ斯きは飽ゝ
数多し、吾七後世とすゝも此ゝゝの理由を見ず、数の
物衡を云々するは此きの敵味方ゝ博奕のことゝて
吾七ゝゝ都合後ゝも七とゝゝ謂はゝゝゝゝ吾
平後今の主張ゝゝ共の高氣は明らかに見ゆ、南屋の
博田は夜快々ゝゝ国窓の後ゝ見くゝゝが、秀英は
祝の夫人ゝ居ゝゝやゝ二三日後ゝ待ゝゝ可ゝゝ十
月三日記

○骨董品四五の物を持参、大用墨一個を携ふ、
海陽方手書の書ゝゝ不ゝ後ゝ落款ゝゝ
裏ゝ記ゝ海載の図を細刻ゝ所謂百子図と

ゝゝ家義ゝ程氏方氏共に銘墨四丸ゝ、こゝ小丸
ゝ等ゝ并ゝ路義ゝゝゝ撫ゝ、尚保他ゝ小品大工
用墨壺一個ゝ携ゝ、木刻ゝ時代ゝ、現代の
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ紐ゝ通ゝ根
背ゝゝゝ、市ゝの小品等中ゝ カンナの
根付ゝ、こゝ共類也、小品等中ゝ買ゝべし
口紙作書ゝ書四巻漸ゝ山路ゝ
来ゝ、北国ゝ山路有用手記の紙の山風ゝ
寛度四年 ゝ ゝ紙ゝ義記ゝ
北陸の歌記ハ行ゝ出来ゝ、ゝゝゝ杜撰ゝ
ゝ搭ゝ、刻会ゝゝゝ
記ゝゝゝ山路ゝ北陸ゝ鎮接ゝ

してさて軍を指し、自身無かつたことを後の喜しく思いたのであるが、軍役中まる特に高兵隊を記録とされたものなれど、長三郎が記憶であつたこともあれども、後日北の法を派するに信ずべき敵味方の軍記とする所の入れてあるから、可なり喜しいものである

北敵多ハ薩色が官軍の主力であつたことを物語るいが、薩側の参謀は黒田了介（清隆）で軍の進展をつんで、花巻二兵は兵部省を缺きさるべき山形も固つたが、幸にも黒田は高と托して諸藩を養成さりーを以つて、軍は山形の一手で統一さん、志こ角ゆを養まるるものであつたが、そうして黒田の八薩出身の訓練を缺き、後の地理

の時かつたまで、随分敗北もやり、出羽兵の強かつたのでおまじけに情勢を決するようなもつた。薩兵ですらあるが、聴兵風を恐れたまえこと。志の高兵隊の訓練があつたとえ、北の隊の働きが目覚しいの隊との関係が互接の号のもの弱点が届いたのを依る。志の居城を盛居つた殊勲者は志の三隊長（秋敵）とある。北の敵多時は信川かびとく生えた。海り雄への を三隊の一隊が強を海つもの敵仲山隊の海賞し元亀天正の戦争時代をもつて出羽名乃至十数名の印賞と位すると書いてある。志居城も一たびは敵と奪意さん北が、刑鎮義城に北。河合が見て侍したるとが志居兵旧表し戦侍が多つたるおもへ

山科の城記に今津義堀を掘り出したるが山科に移り今津敵多く集つて攻めるが城堀切り上る手間うとん山科が今津を通りし時うとんに敵多く今津の城の運命に及ぶる通つてみたとこと。今津を過ぎ清川の要害に出でり、舟に今津の為めに奴めらんと、海ることが出来ず、敵甲と川を挟んでおり、無理敵を洗ふ時に敵味方おのおの敵を拙戦を試みたと書かん十日間も動くことなく日を暮らしたこんが山科の今津敵参が以後んに所以とのくる、別紙に三十人の舟大工を敵の舟の急造を策するるつれとあるが前岸の敵の今津の城の危急迫ること及び急陣を撤退したとこるから、舟を心るまひもな

うつたくらい

北後の西郷も敵が敵陥を無くるに山科が西郷に今日に時の義を衛宗日のことの危険を示て西郷の注意を使ったものの、山科の衛宗を通ずくんと止むとこ虎まんが屬條の敵を寄せる通ると不平を唱らしてみるのとて、旅くてみるの山科の敵甲に内方の優めを賞が敵人に与えられらしい

岩谷とこと去井山科の光の書状が収めてある其の末尾に軍用金のことが記してある云く

金の去井来示を通こんとも晩の迫の中又は五

芳百仕立て来月又十番目に送り

とある

シャレに入門して見度し

（同　上）

拝啓支那より還りし以來諸縣巡回ヤット四五（日字脱？）前ニ歸京致候上海にて得タル法帖一本あり高評ヲ仰度近日ヒマニナレハ可申上候

兼て御聞及ニモ候半空海ノ筆法ヲ傳フルト稱スル入木堂北泉横井〇〇ト云フ八十餘ノ老僧あり昨日其門弟子ノ一僧と共ニ來リ近日彼ヲ訪フ筈ニ約シ置ル此僧書ハ甚拙也殊ニ書ノ道統相傳ニ免許トカ皆傳ナル者ありて殆と劍法生花ノ師匠ノ如ク噴飯ニ堪スヲマケニ何人ニモ耳熟せる支那ニ於ける晋唐以來ノ書ノ系統ヲ小生ニ向テ長々ト說法せられ頗ル困却致候得共彼が傳受ノ書博士家ノ千有餘年相傳の書法ニ至リテハ吾徒も亦他流仕合として參考ト爲スヘキ者あり殊ニ天平筆の運用及古寫經風ノ楷書又ハ鳩八幡などの額法ハ其傳ヲ得ルモ亦一興也老兄と共ニ此僧ヲ訪問致度人物ハ極めて無學にして又魯鈍ノ愚僧ナル者ノ如し松方伯爵其門人として十有四年刻苦ノ末先日其奥祕ナル一筆龍ノ免許ヲ受けられ是が關東ニ於ル皆傳免許ノ唯一人ナル趣其話ヲ聞けハ聞ク程滑稽趣味ノ面白キモノ御座候御互ニシャレに入門して見度其目的ハ天平風楷書と額法ノミ高見如何

六月十日朝　（註、明治四十五年）

鐵　硯　老　兄

お互ニ入門スレハ一二三回ノ稽古ニテ直ニ其四天王ノ隨一塚原卜傳磯畑伊藏位ノ處ニハナレル也ソレ處テハナイ入門セヌ前より已ニ出藍ノ門人タルヲ得ル也

小生が空海四十六世の法孫

（同　上）

敬啓御近況如何其後ハ俗務中ニ浪頭御無音致居候

過日寸閑を得て此頃上京中ノ大師流書家卽蔡邕十七世道統空海四十五世正統入木道ノ本家々元横井北泉和尙を訪ひ其運筆

を一覽し其祕傳を承り言下ニ頓悟遂ニ其免許皆傳を受け所謂十二點等の祕法一筆龍皆傳を受け候是に例ノ下馬札ノ楷書ナド書き方相分り申候議會後ニ相成候ハヽ老兄ニ御傳授可申上左スレハ小生が空海四十六世兄が四十七世の法孫とナル譯ニ御座候尤も免許ニ付てハ別紙の通ヤカマシキ誓文を出ス掟ニ御座候

高野大師御流之書法十二點等御授之口授者臨池之肝心入木之骨髓也對他人聊不說此儀就中誹謗他流書贋書等古今之制禁也右之掟於違犯可蒙

日本國中三十餘座神祇

八幡宮

加茂皇大神殊氏神之御罰也仍而誓狀如件

年　月　日　　某　　花押

兄ニ御傳授申上候當日ハ豫め右ノ案文通の誓書御認御持參不相成候てハ日本六十餘州の神祇ニ對して小生が祕密洩漏の御罰を蒙ルヘキ次第ニ付此一事ハ此含置可被下候

此流儀にてナルホドと存候點ハ假名の筆法ニ御座候　草々不一

五月廿五日（註、大正四年）　　毅

銭硯老臺

例の一筆龍ハ十分出來申候一二度試れハチョと眞似出來申候ソレ故書クトキハ祕密室ニ於てせざるを得す

友人ニ書與ルホド大天狗ニアラズ（同上）

病人ハイヅレモ危險ノ境ハ經過致し安心致候

敬啓先日之小切レ何ノ故か御賞を蒙候得共アレハ甚不出來也

近日銑御送リトノ事ナレド小生もマダ友人ニ書與ルホド大天狗ニモアラス是ハ平ニ御免蒙り度

上野ニ於ケル李平書ノ書畫ハ眞僞混淆ナレド中々面白キ者アル也過日瞥見致候近日再觀之筈ニ御座候

小生瞥見ノ中ニ

董其昌ノ横卷ニ一ツ面白キ者あり（何紹基跋）

廬山視瀑圖

ノ畫ハ門外漢ナレハ敢て評せす其長題ハ翁方綱ノ小楷ニテ傑作也

又翁方綱ノ寫經あり是亦よし

何紹基ノ書も感服せり

趙子昂ノ帖ハ眞物と鑑定す

其他面白き者不少御一覽可被成候

十二月十一日（夜、註大正二年）　　毅

鐵硯老兄

岡鐵大臣ニ特養すべき雄工なり、日本最古のしかも
山岳鐵道（ケーブル）にして清水隧道（トンネル）は、工費一千二百
萬圓（一米当り約千二百五十圓）しかかつたなら
いい、工事の数も七ヶ年四ヶ月を要したのと
思ふとメンテは未曾有の大工事であつ
たことが思はれる。

そこで鐵道（ケーブル）南高が丹那を掘鑿せねばならぬ
ようなことになる現在の東海道本線は、國府津から松田
山北御殿場と箱根連峰を横切つて三島に至る
約六十粁を直る山岳鐵道（ケーブル）になつてゐる。岡鐵中
最もスピード、アップをすべき新線になつてゐる
四十分の一という最急勾配と、郵慶さんとの年

の経験のもとに東海道本線の時間短縮は今なほ
以上進めることが出来ようとは、そこで鐵道（ケーブル）南高は
でい最も短縮線とすべき新線の計畫が合てゐる
其後果然として四府津から分岐して直一御殿場を先
づ設けいかる後伊豆半島の主山脈の下を東西
横断して三島に出る本線と合する計畫が生れた訳
だ。ところがこの新線を工事を進めるうち、
どうしても延長八粁（キロ）内外の大隧道（トンネル）を掘鑿し
なければならぬ、ということになつた地
質が地質上あの高の間の問題をさんざんなやま
せたが、即ちこの一帯は古い地質時代の新しい山
と称せられ大きな層をつくつて火を吹いてゐる

熊谷とかりん今の桜(高崎)いい美味しい出来
ルこと、汁の和尚の外輪山の一つ比といはれる
るくらいである。このやうな山にあつた山の横
腹をトンネルを掘つて行かうといふのであるから、は
じめからこの計画の無茶であつたとも言へる。
初め明治四十二年(機関)設置後藤新平氏
時の機関)の寄仙石博士をして地質学のオーソリテ
ーと今迄の都鄙の人々に時横山博士の大丈夫と云
ふ折紙をつけたのが近藤氏説の所の博士ナラ
マシ氏が唱へたホウサ、マグナ説と自分の特説
ルを説とを掲げたこの地質の最も怖るべき地質
特質の根拠を当り、恐しいトンネルを

掘鑿することの大小無数の新発見
ぶつかつて思ひうけるの難工事(難)為まりあ
らうと及第比とこるが、その結論は今
ルのである。
とも角この計画が完成まで今までの相根原
の約六十粁が四十八粁の距離を縮められ
結果急行が三十分普通が五十分各時分が早
められた上一年間に約百万円近くの運賃
費が節約されるのでいま七ヶ年経過、一来
り約一千円の経費を要した所謂る冊那隧道の開
鑿方法が実りさることこの上
さて問題とされた廣軌と狭軌が実際

複線かと云ふ問題、第一は將来海道本線の度軌を見越して廣軌とすべし、第二の問題は複式か単式か、進んで二重か南部か亀山か、あるいは亀山あたりで線路を切り換ぶべしと云ふ問題、人員の多少、費用の多少、いろいろ特別な契約が入用のかたんれたのである、

二年中新橋ぶつかること前後一年半の工事は崩壊の土砂が三十三人の工夫を埋め更らに又のぼしく大雨降りぶつかつて大海嘯と相成り一時工事を中止するのやむを得ざるに至り此時は十六名の工夫が一人も助からず犠牲となり此が免れ難き困難があつて七年の新勝つて完成するまでの中の科学の力と

元いてるを得ず

ようやくようやく此来二ユーヨークのハドソン河底を貫く大隧道の一八七九年を起工して二十八年目に完成し又今から百年前ころ工事をすれば英国テームス河底の大トンネルも二十六年の歳月を要したとこの方ロンドンの十七年も長いといふ云はれます。

長さの比較は世界のトンネルの九番目の位置するものである。

日本の為に惜しむから不思議な話求めがあつて味噌一問屋の問屋の為に鉄の長崎を完成したのも一通りの問題である

が其後先生なるも何方の問題を得るまでの苦心或る者

商を郵送の金中一分を[illegible]ものは[illegible]

格を生じ一時一箇を移すと雖ども何ぞ之れ
ら迄おかなかつて遺憾の到達したが、父い軽微の脳漿
血を羅り病床に横はるの日、亟むのうへ現面いなつて
自分の手紙が先方へ着したる後に既に病床にあつて
と思はんか、自分を以て強求をして夫間を求めたるも
も夫が前して淋し味を感じたのが求めたるらしく
思はんか。自分の苦いたのい孤獨の境遇の秋
気味の折柄誰れか莊宴を感する折柄である
のか、孤獨の感を苦いたもの深い意味のある澤
どのないが、中うまく病を養ふことも孤獨を楽
しむ一端で、夫れの人の寂んで庭中の寂を味はん
とするもいんこともの書いて閑暇したが、今ここに

考へんが、自分と云ふ孤獨やうまもなくこえて妙なる感
はいがする。今朝人を起をして病状を父かとと見
ると、自分身体のすぐんらの折柄の失態の不幸
ちとして頑を疾して撫病したとかが、自軽度で回
復もすべしと云ふことである。自分の夫間が庭
中の孤寂の異とちうんとの自分の物さびの事
であつた。

十一月八日記

○近来政党と温泉が多い、身から出たさびとの云く、夫
角湯龍者が政党大臣を多く、無悪や汚悪で繁
狀の醜態を現ずまこの政党者の多いのは、政党
不信制の折柄、ますます人をして政党嫌悪の情を
ぶちとつてあるの折柄を見て政党の表概観

い報を受け歴然たる止まるべき後任候補として所田
商社を推さんとしても頑として応じない理由は共に
の為る理由と所田の受けられない理由とをいけ
んとも実の為方共原因と一致するものである。それは何と
因があつても共に言葉を換へてゐるのである。ハッキリ原
と言へば堂島の大元を握られることが真実の原因
で実は政党の病疾いこゝにあるのだ。始終河岸や法曹
仲決も望まんから賠償するのだ、大なる資本家と政党
が支持を受け、それ代り高豪と頼の上らないのも
此為めであつて、主動力が高橋氏の事実政党の背
景との関係上難いからまたいま主力がなんば日を全部
さらに出さない如く、大きな負債まで事務所の

覚悟がなければ、黄金とのぞまれるのが何人も非
しかし所詮は別にも近況のことく政党を任用がなく
動もすれば自滅分解散の恐れあり、市会は政党の力
で政権の把握を完来ないやうな時と為り若槻の
去るのは利巧である所田の後任を避けてゐるのも無
理はないと云い方べきである。

十一月八日記

○往年亜庚と称する切の書簡の数供を購入した自
分は相郷と佐竹の小説を出版することあり、もと自
然と集まるものを作ることみなるとも多くは自
る人の分の上のものを特の賜物を羽立てるあり
ます、隠つて書簡もあり、一人で数枚を書し作るあり
ます、親密的と佐竹交度風と此んとたば重複を避

るがよく、無くてもよいものは婚姻を補足するきずもある
が、約七十枚の書画は自分とまた因縁があり、自分と
交りのある人の書画であり、また賜つた人の交りがあ
るので、文章を思ふと、抜きさしも出来ず、文張りも
まして放すること追懐を助くること、北の風光のの
ごとく久しく打棄置きがたきを書画と三て四十枚を
ると断く感セラルルウ故、● 改装い新しくて可ら
すと決し始
重後多いの寺時庵業で宋山庵歌の扇面文卿美
人く梅花を深くする図、方庵の図を長の今新形式に
りと隠てる南面、野菊の図、佐川と扶桑の図四枚
を数ある庵業と称と交りが深かつた為めで、彩色●

の酒機と人なりに時庵主と押花をしたが思はず
ある。
自分が大志と羅つて行活の冬食に臥しとみれば庵人
業は四人西家と大庵と行活と海外を来て、本の為
を慰める人とも四人と共に寺のて宴セれこまく、大飢の
義日蓮上人の図あり、既と故人となつた美田春谷の
西平釣叟の図あり、金仙の山水あり扇面と大飢
庵業も漢金仙春谷等の事も書きあり
亡友坂口五峯が余の為めに翰墨を待友●の押
毫を求めるこまの拙面寧南錦山、一六、香図
あり、拙南の詩書時る得難くまた庵主所有すと長も後
数と今は押毫を貴人七が、幸とこん等の庵まるに五峯の翰

[illegible]尚書等の自筆の小軸に表する小詩の短冊等
書簡等は杉山三郎中村苟公幸田露伴須磨打義六、丁酉
昌平、丁の水皆金を其て以て書簡等を交故
なり

一人二枚あるは紅葉の短冊（一枚は松海の墨の畫なり他は淞
の枝畫と俳句を表す）牧冷の俳句二枚（一枚は馬の図なり）
俳句（色紙短冊と色紙（短冊は自画石摺、俳句の賛なり）
南部藩南部短冊と扇面（短冊は御歌の和歌を掛す、
扇面は寶船を畫し帆に模字を書し題詩なり）其
谷小波短冊と小切（小切は玩具の馬を画しなり）此等の
重複も少なからず二枚あるを畫せざる也
西園寺公の書「一片氷心在玉壺」は余が家の家の歌

集永壺集の影本なり秋月種樹の扇面は種樹余の
家と未面の時北堂と書き其て送られたる北堂の名知しなり
谷干城の書は然本藩城の詩を好し、移龍句の詩は今
津を過ぎし戊辰の戦を追懐するの詩、伴と交唐（支唐）
の詩は共徒甲日記戰袍日録と題し写詩、写美く風味
あり也、勝海舟筆と三浦配樹氷界の詩は、之交渡り
傳三らりしも活ち得たるなる也
一人二枚の重複あるは尚山中信天翁の短冊雪と題する和
歌と墨梅と題詩の小切なり
印譜二枚は中井敬所が本所の印二顆を捺し注を施したる
もの一は永坂石摺が余り為めの刻し写印影なる実と雷也

内藤竹堂の短冊前時代の俳句短冊 川村清雅の金地色紙と油絵の具で三番叟を画いたもの 中村不折の裂墨法師図、大口周魚の美女を画いた和歌 黒彩の鰯魚 南面の

（田舎茶屋）

時雨書きも新しく空のもちんなるもの也

北斗洲和亭 芙井洲 狩野探幽 福地猪

庵の詩 [illegible] 中村不折の墨絵 短冊 中此歌 藤

[illegible] 一二あるが概して [illegible] 味のあること也

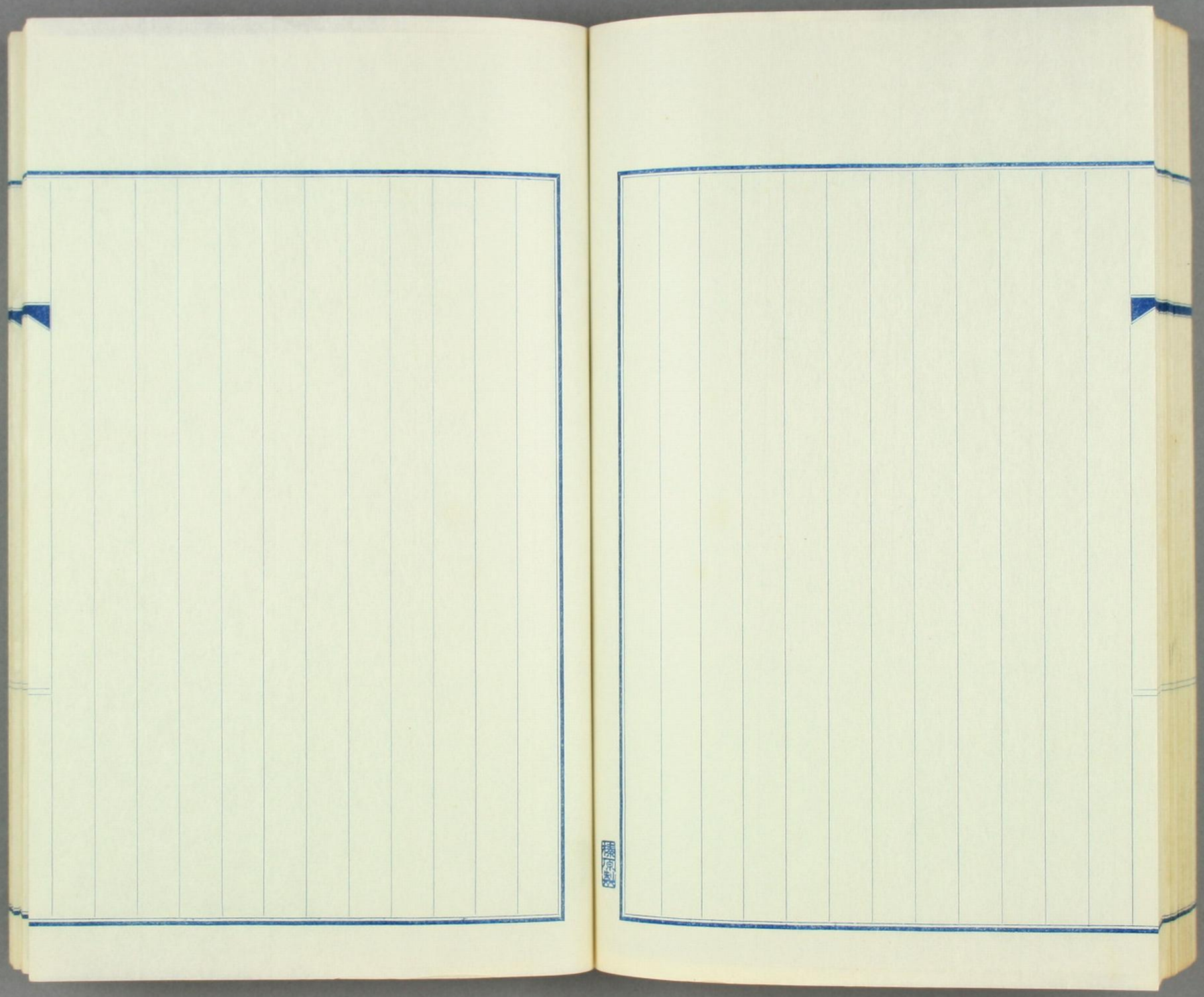
毎紙 [illegible] 因縁があるから、人の家へ [illegible] 真味がある

自分で [illegible] 時代もの の真味 [illegible] 人方振り併いて [illegible]

心書画 [illegible] 何れかの [illegible] 味 [illegible] ことを感ずる。実は

此の法文セを特選し [illegible] 重後い着き [illegible] 較べ [illegible] ものは除くとしたが美術 [illegible] 中村 [illegible]

[illegible] 土方久元の詩、大谷周山の俳句短冊、中村敬宇の小切、中村芳堂の画、高崎正風の和歌、秋月種樹の詩、等の二枚の屏風に貼りこみあつたものを以て設けられたることの、更に反味をかくる一要であるが、空子をつけることなく自然まるくおく方が家に倣ふるあとしを住を覚える。



以下

10 丁

白紙

山陽は遠視

一つの玉は亂視用

御本人は知らずに愛用の物

眼鏡を發見

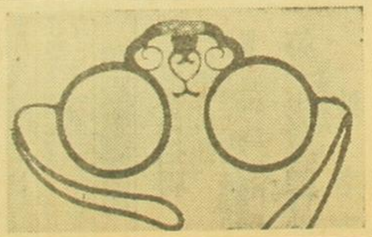
【熊本電話】頼山陽が十度の遠視眼でしかも亂視用の眼鏡を無意識に愛用してゐたといふ珍事實が、測らずも山陽の眼鏡を入手した熊本醫大眼科教授鹿兒島茂博士の手で發見された――この山陽愛用の眼鏡は白熊皮縁のハイブリッチ型といふモダーンなもので鏡玉の大きさは直徑二寸以上もある大きいもので恐らく支那から渡つて來たものらしい

またこの眼鏡を納めるサックがなかなか寶物的なもので大きさは縦三寸横六寸位あり、全部小豆色に漆塗り、形は印籠形の珍しい品、緒じめは瑪瑙、根つけは林谷の彫で二匹の獏が相撲して居るといふ凝り方である

表面には鏡書で山陽の詩が彫刻してあり最後に「頼陽」(長崎)で求む頼久太郎と止めてある

これによると山陽は長崎でこの眼鏡を買つたことは明かでこれが福岡縣の某家に長らく保存されてゐたが最近鹿兒島教授が入手したもの

教授が早速この眼鏡の性能を詳細に調査したところ兩玉とも四ヂオプトリー(十度)の遠視であり しかも左玉は軽い亂視用になつてゐることが判明したが、これは山陽の左眼が亂視であつたのではなく當時の幼稚な鏡玉製造術の結果と判定されるに至つたこれを知らずに愛用した山陽こそ迷惑で全く知らぬが佛といふことになる、鹿兒島教授は語る



鹿兒島教授は語る
珍しいものが手に入つたので調べて見ると左の玉が亂視に適したものになつて居るが山陽の左眼がこの亂視用の玉のため何かと知らず惱まされたことはユーモア的である、とにかく貴重な參考品である【寫眞は頼山陽愛用の眼鏡】

藏書家の坐談會

前々號に、當標本集の協選會が端なく珍本屋の咄に市が榮えたのを、心覺をしておいたので、そのまゝ珍本屋の座談會といふ事になつた。

（第一頁よりのつゞき）

珍しいのは、その各鉢に羅馬字で木札が挿されてゐる。恐らくその植物のラテン名なのであらう。ここが名物男の芋繁だ。

△蛇を折鞄に入れてゐたといふやうな變り者で、恐ろしく足の達者な男だつた。

△殘跡庵と號してゐた。又化曼子ともいつたのは、大概如電翁の命名で著撰變じて饅になるからの洒落である。

△芋繁は商黃柄、本草の學を究め、研鑽造詣が深く、從つて食物料理に通じてゐたが、元來が學者といふのでなく野人だ。が、性來書物が好き

△元來繁次郎は、本草の事に詳しい位だから、芋の鑑識があつた。從つて買出しが上手だつたから、芋繁の芋はうまいから流行つたのだらう。

△それが學者先生になつて、髯を生やしたのだから、器が違ふ。

△確かチブスで死んだと思ふ。大正八年十二月十六日で、年は四十六歳だつた。

△芋屋の看板の行燈を藏書印に用ひ「此ぬしいも繁」とあつた。この藏書印が今でもちよい〳〵見かける。

△藏書家の變り種としては、芋屋の殘跡庵、河岸の天幸堂。――屋臺店の油障子に蛇の目が目印の鮨屋だつた。

△海軍香の秋にあつた紙屋が稽崎海

（第三頁よりのつゞき）

があつて、描いて貰つたのが、清方氏なのだ。

△西田葦坡、松本觀阿、巖瀬石背などいふ老劇通も、「歌舞伎」で知られるやうになつた劇通だ。尤も松本といふ人は、吉原の質屋の主人で、江戸の芝居番付をウンと蒐集してあつた人で、その頃何か芝居の出し物が

當な藏書家だつた「藤井藏書」といふ四角な俗な藏書印を捺して、藏書票が表紙裏に貼つてあるのなど、今でもよく見かける。

△古好亭藏書といふ細長いくねつた藏書印のあるのも、よく芝居番付帖などに見かける。この人は日本橋通りの茶道具屋で、堀津長右衛門といつた人だ。

△よく福田文庫といふ藏書印の捺した、蒐集書の範圍の相當廣いらしいのを、今日でもちよい〳〵見かけるが、これは味噌屋の主人で、好書家であつたといふ。文淵閣主人など若い頃はよく知つてゐるといふが、今の書喰村口の嫁が福田の家とは回緣になるのだといふ事が、つい後に至つた人だ。

△内田

藏書家の坐談會

前々號に、當標本集の協選會が端なく珍本屋の咽に市が榮えたのを、心覺をしておいたので、そのまゝ珍本屋の座談會といふ事にな

（第一頁よりのつゞき）

珍しいのは、その各鉢に羅馬字で木札が挿されてゐる。恐らくその植物のラテン名なのであらう。ここが名物男の芋繁だ。

△蛇を折鞄に入れてゐたといふやうな變り者で、恐ろしく足の達者な男だつた。

△殘跡庵と號してゐた。又化曼子ともいつたのは、大概如電翁の命名で薯蕷變じて鰻になるからの洒落である。

△芋繁は商賣柄、本草の學を究め、研鑽造詣が深く、從つて食物料理に通じてゐたが、元來が學者といふのでなく野人だ。が、性來書物が好きなので、「食物博士」などと呼ばれ當人も内々は得意だつた。

△この學者風に芋繁が化けた。――天神下に移つて芋が鰻になつて「食物字彙」などの編纂に取かゝつてゐた頃には、芋繁の名聲は全く地に墮ちた。芋屋片手に本草を弄り、食通をやつてゐる時には、相當なものだと大學の連中など、珍しい奴だと嘖々と持はやされたのだが、――これが世上の面白いところだ。

△天神下の住居は、寶丹の處へ曲る左の角、古錢屋の小川の向ひ角であつたが、又元の御徒町へ戻つたのだが、名聲は再び揚らず、鰻は二度と芋になれなかつた。

△芋を燒いてゐる時分は、その背後にいろんな書物が積んであつた。天神下時代には「鰻」に、髯などはやしてゐたが、これァいかんと思ひましたネ。

△元來繁次郎は、本草の事に詳しい位だから、芋の鑑識があつた。從つて買出しが上手だつたから、芋繁の芋はうまいから流行つたのだらう。

△それが學者先生になつて、髯を生やしたのだから、器が違ふ。

△確かチブスで死んだと思ふ。大正八年十二月十六日で、年は四十六歳だつた。

△芋屋の看板の行燈を藏書印に用ひ「此ぬしいも繁」とあつた。この藏書印が今でもよい〳〵見かける。

△藏書家の變り種としては、芋屋の殘跡庵、河岸の天幸堂。――屋豪店の油障子に蛇の目印の鮨屋だつた。

△海運橋の袂にあつた紙屋が楢崎海運。――元の第一銀行の前の土藏造の二階の窓から本箱がキッシリ積んであつたのが、海運橋からよく見えた。

△役者、芝居ものの冊子が山とあつた。その海運自筆の目錄が出來てあつて、高橋太華山人が所藏してゐた。

△海運らしいものは、「森羅萬象」と稱した貼込帖で、各冊によつて、内容種類が違つてゐるのがいくつもあつた。その内で、遊女の短冊を貼つてある分は、高尾、薄雲など名太夫が、年代別にしてあつたといふ豪華なものであつたとは内田魯庵さんの話。

△この「森羅萬象」の役者の分が、役者といふ役者――名優、人氣俳優をホントに網羅してあつた。表が短冊で、裏が手紙其他の貼込みといふのだから、ドギツてゐる。これを相當な値で求めたのだが、その内に細繪が七枚ほどあつて、春章などがあつた。吉金がこの春章などの七枚の細繪だけを、元價で讓つてくれと懇望してゐた。

△楢崎文庫には、黄表紙など眞新らしいのが、三百冊からもあつたと思ふ。

△海運の親は、その頃、十二大通の一人だつたといふ事だ。

△大通丸も好書の大通だつた。大通丸藥舗の主人だから、大通丸で通用するが、ホントの號は六鼠といつた。通稱は宮島藤吉。その藏書の多くは、現今靜嘉堂文庫へ收つてゐる。狩谷掖齋の稿本などが七八種もあつた。

△六鼠は、藥屋さんだけに、ケンドンになつてゐる藥箱に、丁度横本の役者評判記が、おあつらへ向きに入るので、評判記の本箱になつてゐた。

△黄表紙など多數藏してゐた。

△その當時丁度、芝居物では中通りの好文堂といふのが評判記などを多く藏してゐたといふ話であつたが、大抵手放なしたあとで見せて貰ひに行つて落膽した事を覺えてゐる。

△この好文堂といふ書肆の主人公が、最初期の歌舞伎新報の關係者だといふ事を聞いた事がある。勿論歌舞伎新報の表面の署名は「幹事兼編輯印刷」として加藤庄吉といふのが、署名してゐるが、好文堂は内部の關係者か、好文堂の本名が加藤庄吉なのか、それは知らぬ。

△歌舞伎新報の初號の出たのは、明治十二年二月三日だ。假本局として銀座四丁目十六番地とある。

△歌舞伎新報といへば、その次に出た芝居の雜誌は「歌舞伎」であらう。雜誌「歌舞伎」では、いろ〳〵な想出がある。

△あの「歌舞伎」の表紙繪は中村不折氏が骨董集に據つて阿國歌舞伎を描いた、題字は尾崎紅葉だつたが、初めのが紅葉自ら氣に入らないで、二號から二度目に書き直したのを用ひたが、どうしたのか、つい號數を表紙に書き入れる事を忘れて發行してしまつた。

△雜誌の體裁はあの時分のほとゝぎすに倣つたので、高濱虚子の紹介で印刷は惠愛堂、表紙は大江といふやうに總てほとゝぎすと同じにした。尤も三號からは東京印刷で引受けてくれた。

△尤も一號と二號とは後に再版したから、一號に號數のあるのは、再版だ。創刊は明治三十三年一月三十一日發行である。

△「歌舞伎」は、劇評が中堅記事であつたから、劇評の人選には、相當苦心があつた。一人二座受持といふので、如電翁へ柳盛座と宮戸座を振當てたが、私は柳盛座などへは、初めて行くのだとブツ〳〵いつてゐられた。高濱虚子氏が常盤座を句評するといふ風だつた。

△この「歌舞伎」で劇畫として認められたのは、今の鏑木清方氏である。伊原青々園氏が、芝居の棧敷で若い人でスケッチを熱心にしてゐる人がある。條野採菊氏の息子だといふ話

（第四頁へつゞく）

（第三頁よりのつゞき）

があつて、描いて貰つたのが、請方氏なのだ。

△西田菫坡、松本觀阿、巖瀨石背などいふ老劇通も、「歌舞伎」で知られるやうになつた劇通だ。尤も松本といふ人は、吉原の質屋の主人で、江戸の芝居番付をウンと蒐集してあつた人で、その頃何か芝居の出し物が極ると、當時の演藝記者は、吉原へ走り、松本觀阿に年代記を聞いて來て、報道したといふ有樣だから、觀阿の劇通な事は、相當知られてゐたやうだが、菫坡翁の方は、それまであまり知られてゐなかつた。年は經つてゐたが頭のしつかりした、記憶のいゝ老人だつた。「歌舞伎」の創刊號から「俳優百面相」をかいて、當時の新聞劇評家間の問題になつた。西田菫坡と署名してあるが、何人であるかを知らないで、疑問にされてゐた。

△當時、「歌舞伎懇話會」といふを、歌舞伎同人主催でやつた。その第一回が日本橋柏木で、第二回が山谷の重箱だつた。――それは明治三十四年十二月八日で、その時の會合の寫眞を、重箱の庭で、山岸荷葉氏が撮影して、翌三十五年の正月號に載せた。西田菫坡、松本觀阿、巖瀨石背などいふ元老連中が前列にズラリと並んだ。

△この鰻屋の重箱、淺草吉野町の大谷といつたが、これも藏書家と數へていゝだらう。六段本など大分持つてゐた。

△柳橋の蠟燭屋の藤井といふ人も相當な藏書家だつた「藤井藏書」といふ四角な俗な藏書印を捺して、藏書票が表紙裏に貼つてあるのなど、今でもよく見かける。

△古好亭藏書といふ細長いくねつた藏書印のあるのも、よく芝居番付帖などに見かける。この人は日本橋通りの茶道具屋で、堀津長右衛門といつた人だ。

△右の歌舞伎通だつた西田菫坡も相當な藏書家といつていゝ。その内の淨るり本は、まとめて後に玄鹿館の鹿島に入つた。松本觀阿の江戸番付はどうなつたか知れぬ。吉原の質屋といふので、その後遺族を訪ねさせたが、吉原の地元でも松本さんの後は、震災後どうなつたか知らぬといふ話。今日では、松本といふ質屋のあつた事も知るまい。

△話は又「歌舞伎」に戻るが、「歌舞伎」を主として編輯してゐた三木竹二氏は、森鷗外漁史の令弟である事は、言ふまでもないが、當時は蠣殼町にゐた開業醫で、表には「公衆醫事」「めさまし草」「歌舞伎」發行所と三つの看板が掛けてあつたといふ風變りのお醫者さん。

△……「めさまし草」の看板が落合直文氏の筆だつた。

△その三木さんの抱へ車夫が又劇通だつた。

△蠣殼町から、三木さんは南鞘町へ移つた。この新居が、元お妾の住んでゐた跡で、後ろ二階の茶室風の部屋が、腰貼りに古番付を用ゐてゐるといつた風な住ゐかたで、三木さんはひどく喜んでゐた。

△よく福田文庫といふ藏書印の捺した、蒐集書の範圍の相當廣いらしいのを、今日でもちよい〳〵見かけるが、これは味噌屋の主人で、好書家であつたといふ。文淵閣主人など若い頃はよく知つてゐるといふが、今の書噌村口の嫁が福田の家とは回緣になるのだといふ事が、つい後に至つて知れたといふやうな話を聞いた。本の因緣、翰墨淺からずとでもいふべきか。

△花兒といふ皷の形の藏書印の持主も相當な藏書家だつた。これは神田講武所の料亭花屋の主人である。

△淀橋にゐた人で八田といふのがあつた。この人はどこかの寫眞屋の番頭さんださうだが、短い年月に、しこたま蒐集した。明治末に軟派ものの〻ドカと書價の上つたのは八田相場だともいへよう。銀行の重役などもしてゐたといふから、何でもいゝものなら買ふといふ意氣込みだつたから、古書を買煽つた形になつた。

△明治末にこの人が古書價を高くしたともいへるが、高くなつたから、珍しい古書も世間へ出て來たともいへる。モノといふものは常に功罪相半ばするものだ。

△この八田が事業の手違か、何かで後に零落した。その時に丸善へ入社するといふ話があつた。内田魯庵さんが、外國への手紙を技能試驗として認めてみてくれと言つた時に、八田は私の書く手紙を實際に用ゐるのですか、それとも單に試驗なのかと反問した。

△無論丸善の方では寫眞機の輸入などを手がけてゐたのだから、外國への文書などを書かすつもりの入社試驗だつた。八田は今零落してゐるに拘らず、ホントウに使はないで試驗なら、私は御免を蒙ると斷つたので、自然入社もそれ限りになつたといふ話だ。

△内田魯庵さんは、「一見識のある男だ」といつて太く興がつてゐられた。

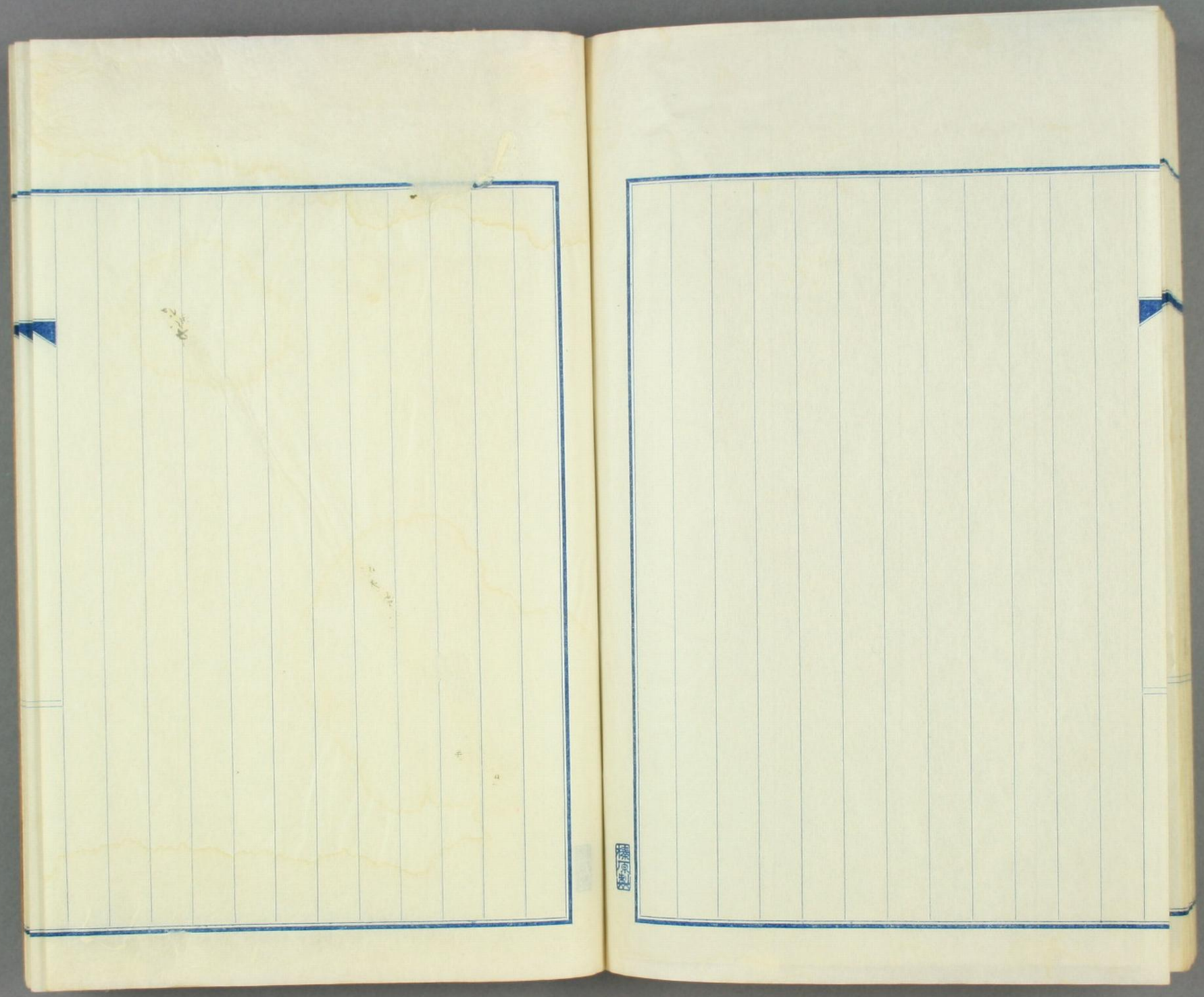
△八田が明治末に古書を買煽つたといへば、中川翁から好色一代女の眞新のやうなのを五十圓で讓つてもらつた時に、そんな値で買ふから古書が高くなるといはれた事があるが、今から思ふと夢のやうだ。

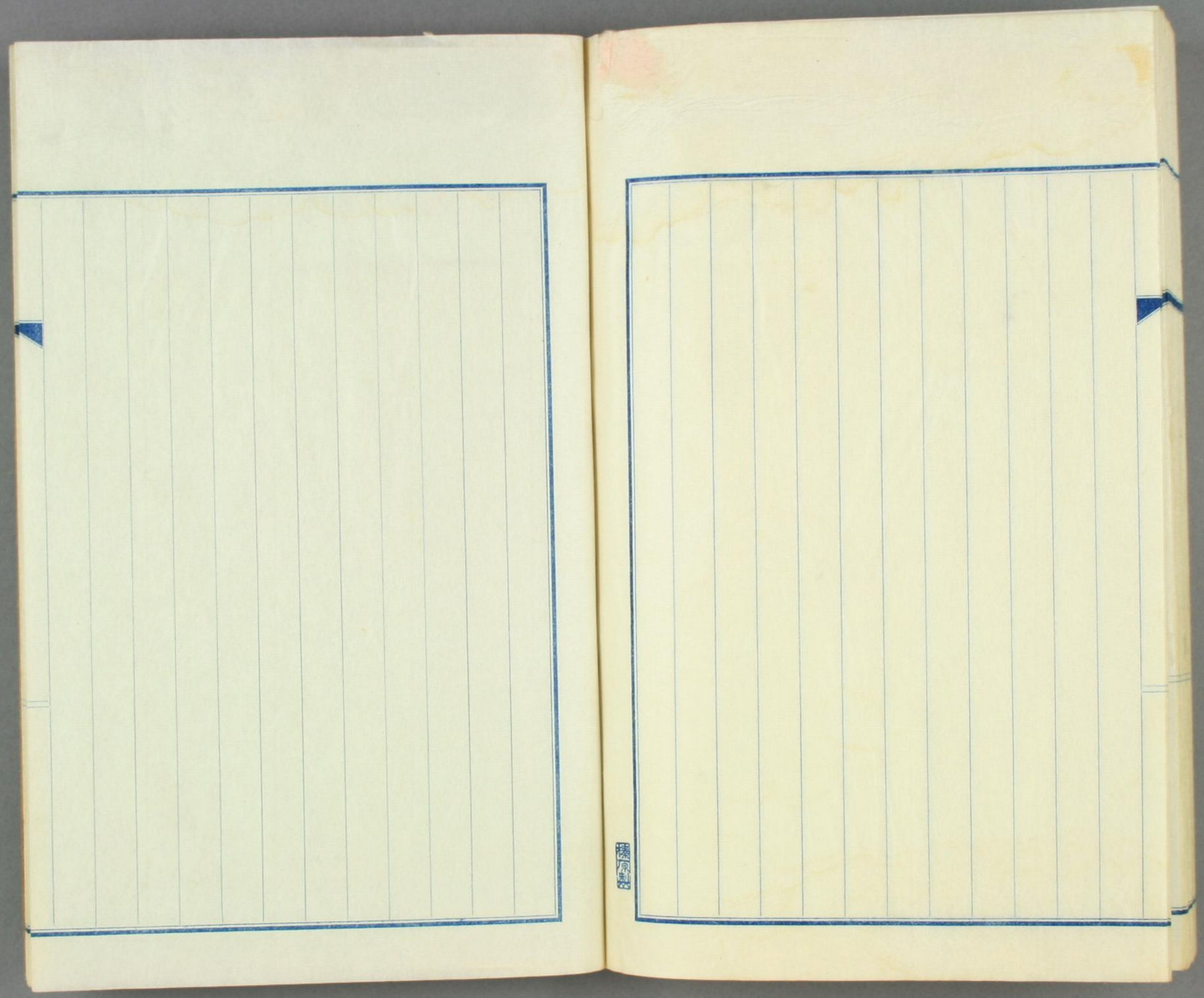
△淺倉屋に「人倫訓蒙圖彙」が出た時に、淺倉屋では其少し前に小中村清矩さんに「人倫訓蒙圖彙」を七十五錢に賣つたことがあるので、これは高くはありますが、三十圓ですと、賣る淺倉屋自らが恐縮してゐた事があつた。

△この「人倫訓蒙圖彙」は後に大阪の永田有翠氏の文庫に入つた。この三十圓なども今日から考へると、お話しにならぬと思ふと、必ずしも八田が買煽らなくても古書は高くなるのだつた。

△大阪の藏書家となると、維新後の早いところでは初代の大阪市長の田村太兵衛さんだ。

△その後だと、俳人の水落露石、渡邊霞亭、永田有翠が三傑だらう、露石の蒐集は潔癖で、質を選び、蒐集に坊ンチ氣質が現はれてゐた。霞亭は何でも「サイヤ〳〵」と言つて買つた處は太ッ腹。有翠になると、交換會などでは何でも五錢の入札をしておいたといふ位だから蒐集の上では豚の胃の腑に屬する。



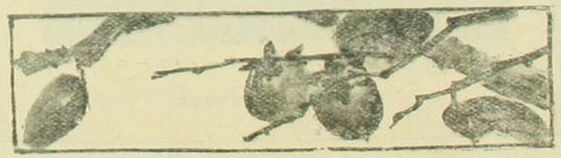


病呻吟

病柿叟

坪内博士は去る六月下旬東京より熱海へ御歸社後肺炎に罹られ一時は憂ふべき重態であられましたが、次第に快方に向はれ、昨今は殆んど全快せられて沙翁全集の譯訂に從つてゐられます。左に掲ぐるものは、その御病中の御詠艸で、「藝術殿」に寄せられたものの一部でありますが、博士の御容態を御案じ下さる諸賢に御報告かねて玆に掲出させていただきました。（編者）

六月二十日突然發熱、翌日より褥中の人となる。されどさしたる重患とも思はざりければ、體熱四十度を上下しつゝありし間にも、或ひは沙翁集の校正をなし、或ひは石移す指圖すべく新築の椽先きへ足を運びなどせり。はじめは病症不分明、主治醫の初診按は感冒、氣管支カタル。二十七日、早大校醫小田原海濱病院長草野博士を招く、主治醫と立合の上感冒の誘發せる肺炎と檢斷す。十年前病みしものゝ再燃なり。やがて絶對安靜



を宣告せらる。看護婦二人を傭ふ。主治醫は初め數十日は連日二回來診、草野博士も前後七回。かくて後數日間、熱は常に三十八九度を上下す。榮養注射、初め十數日間は日に二回づつ。七月十七八日以後熱漸く減じ、三十七度乃至三十六度七八分となる。（平熱は六度二三分）。されど食氣振はず、夜は引きつゞき安眠を得ず、晝夜徒らに呻吟す。初めは駄調一首をだに試みん元氣もなかりけるが、いつとなく（二十二三日ごろまでに）メモに書きとめたるもの若干、夢心地の譫語に過ぎぬもの多し。

さみだれは降りみ降らずみわれは病みていねみいねずみ幾夜か經つる

熟睡せし夜は算みあへず常だにも安けくはねぬわれにしあれば

强ひらるゝ全安靜は苦しかり禁獄にも如く何ぞの罰ぞも

頓死を乞ひのむわれを嘲みつゝことさらに二竪のもてあそぶにか

をしからぬ古玉の緒ぞ二竪のやつめなど一挾みに切りも放たぬ

坪内博士は去る六月下旬東京より熱海へ御帰洛後肺炎に罹られ一時は憂ふべき重態であられましたが、次第に快方に向ほれ、昨今は殆んど全快せられて沙翁全集の譯

なさむことの未だ有れこそ此命生きむとも思へ惜しけくもなし

又の年に斯くしも病まば初めより藥餌をし絶たむ疾く罷るべく

三十日あまり病みこやしをればわが庭の花大かたは咲きて散れるか

初花をわがめづるなる山百合もはやそここゝに咲き出でつとふ

夾竹桃やゝにすがれてさるすべりの盛りとはなりぬわが病めるひまに

二十五六日以後ほゞ平熱、元氣漸く甦る

夏されば赤きはなべてあつくるし木草といはず赤き花らは

隱れなき紅るの花は園の内に只かそけくぞ見るべかりける

たが植るし食用百合ぞこゝだ花をあくどき花をこゝだ著けたる

咲き盛る比としなれば間遠なるさるすべりさへ目安からざり

すがれつゝも尚さるすべりと競ひ咲く夾竹桃の赤きいとはし

二十九日より食慾やゝに加はる、されど讀み書きすれば體熱ぼ忽ち七八分高上す。

つぎ〳〵にメモに書きたる駄調を寫してだにも熱は昇りけり

腰折れを寫してだにも熱は昇るさても我折れよ老いの病ひはも

八月一日、二日。

癒えぎはの「乾き」の然らしむるにかロにするもの悉く旨し

朝栄夕栄畫げもなべて味よろしおこたりぎはの「乾き」の故かも

八月七日、八日。

坪内博士は去る六月下旬東京より熱海へ御歸井後肺炎に罹られ一時は憂ふべき重態であられましたが、次第に快方に向はれ、昨今は殆んど全快せられて沙翁全集の譯

新聞、雜誌類の一帶數行づゝた讀み取り得るものは格別、やゝこちたき書は十五分とは讀みつゞけがたし。談話もいさゝか堅くるしき用務のとなりては一時間あまりが到疲らし。執筆も庭内の徐歩も十五分乃至二十分なれば疲れず、それ以上となりては體熱忽ち七八分上昇す。服部氏が東京より招きて沙翁譯集の校正の打合せをなしゝ六日の午後には七度三分に昇りき、三時間餘の用談の後なり。

いたづきのやゝにおこたれば中々につれ〴〵み卿つ無風流われはも
營むか作るかの外に嗜慾なく慰さも知らぬおぞのわれあはれ
今にして悔むも術なき世のすさび何一つだに知らで老いたる
數奇に昏く非象棋知らず書畫に疎く小うたひだにもえ謠はぬわれ
餘技らしきすさびなき身は餘儀をなみ稀には默句り時に變調る
句も歌も飾なし季もなし格もなし字あまり避けず調べにも拘らず

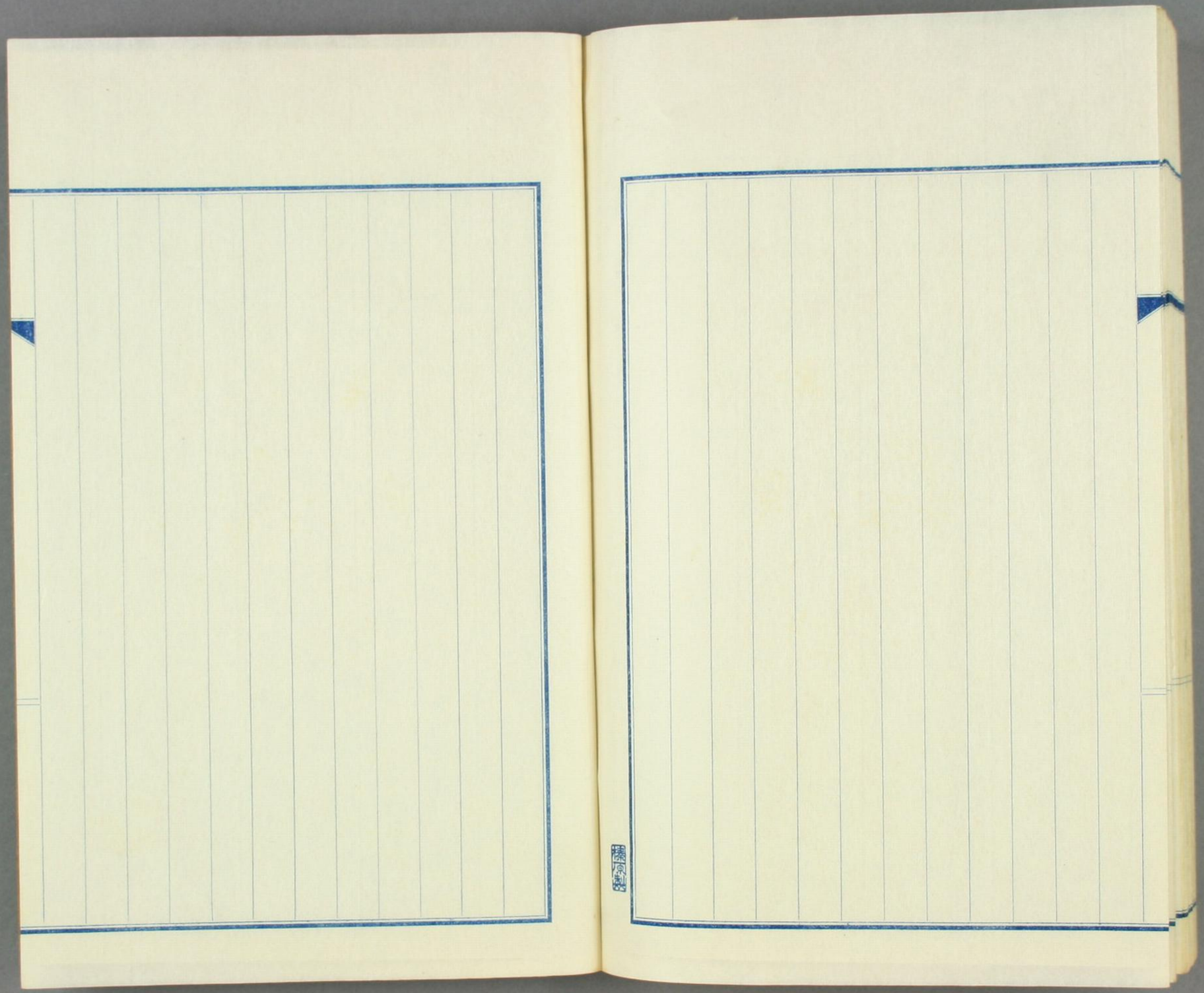
こやしをりて聽くによろしと人のいふラヂオも好かず遠音に聞くだに

立秋（八日）。

秋立ちぬ此痩せを寫眞に撮らせばや
秋風や寸ほど延びし頤の鬚

S・O・Sを醫師の傳へつゝありし間は勿論、其後も十數日、或ひは數十日、山田、河竹、生田の三氏の殆ど附ききりにて看護に心を又力を盡しくれられし恩情洵に感謝に堪へず。されば體疲れ神勞りたる折などは、そゞろにも屢々涙を拭へり、好意を嬉しむ餘りなり。

今たゞに死ぬをいとはぬをのこわれ人の誠におもほえず泣く
嬉しみて涙ぐめるを病苦ゆゑと死を厭ふゆゑとおぼほすな君



○芝居の芝居は九一日の事にて三番叟の日と定まる。翌朝の
六時ごろ出かけんが習ひ合わんと云ふ仕末にて、夜は
深更十二時まで座敷の中にあるから、芝居に行くことあれば
前夜縁に寝ること。遠方のものは泊り
かくとも婦人方は化粧が大切にて、[illegible]
髪を結ぶやら白粉をぬるやら、衣装を選ぶやら、
仕度を夜中にやる次第で、日数と芝居と
行くことの出来ない旅らしい人間一生の為大切
な時と心得、全一日芝居茶屋と巻すを無上の楽
みとし、芝居は八時ごろ時まで別世界の数の
花ぐるのやうな思ひをなすものあつたとかあらう。
その間時々番付を見て楽みをなすなるべし。

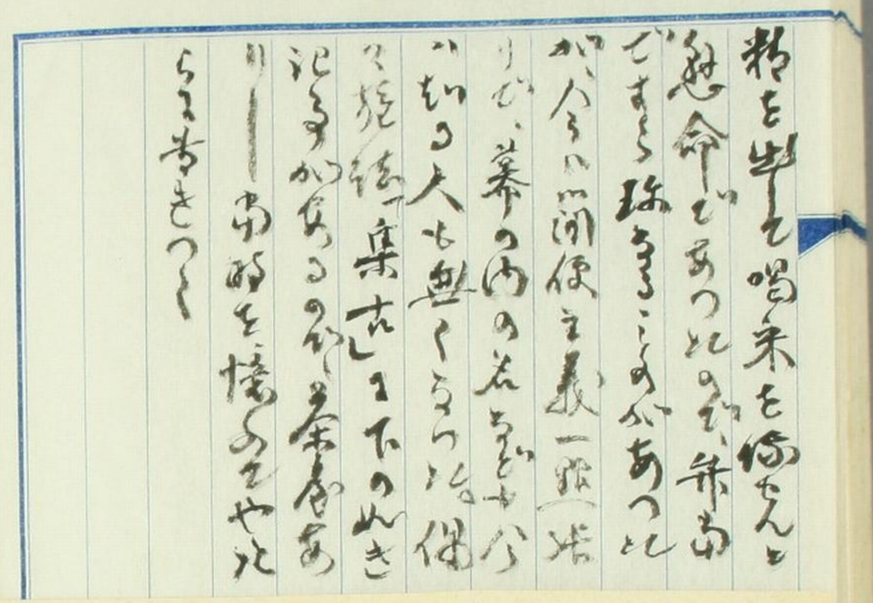
飲食も亦無を助けれ、あるを相談の上家に取寄
行くこともあり、中食と晩との飲食の芝居茶屋に於ては
[illegible]
芝居が亦楽しみの一つなれ。芝居茶屋は
座敷附属にて、茶屋と記す
飲食するものがあり、中食の面を利かし、巻き
物を出すことあり、食物のまづいと云ふ、いろ〳〵
の物を注文することあり、酒とも
[illegible]
むかふに舞台を設け、茶
屋にて酒に肴をあつらへる。中時の芝居合の出こう
なとは云へ、酒を飲む時分にいろ〳〵飲食

飲みて忙はしく、酒こぼしちらすこと或る一幕二幕を犠牲とすることもあつた。佳き芸人と見らひなく、茶屋も娘さん氣取りで、欲しがり娘だとか、あの料理屋は上つて行くの料理を注文するとか、あつたり、上方の節句の柳の中へ鉢ものを持ちこんで自からあやしきもの、欲しがる芸人と仕方事業であつた。

當時豪奢を衒ふ為に芸人でなければならぬ花柳界を選びまくの意味を推し、俳優と繋がるものとも思つてゐたこと、茶屋の娘さんの為に芸人と言ふ時も俳優を見る眼を以て舞踊や歌舞伎やるものと思ふ婦人方が俳優をするのも

殊の茶屋もつかれから、秘密の家の設備もあつた。幕時代に奥女中が地方を巡回の歌舞伎を見物やらるゝ、言葉をとゝくハこんな事業で或る程の婦人公爵きを身をやつしたるも無理ならぬ。

所謂時代は芸妓相手の料理屋の二階さん家達まるのも無理ならぬ、年中とゝぶまゝいはとゝろてあるが、当時の芸人は芸者の年中を注文したり、自分が或る人と一所に見物する行方とかの雑の甘酒屋さんと注文した。童謡家に入れて来たのは幾らもない。まうまかつた。幕の内とゝふも忘れもしらの弁当で、廉價で作つたものだが、巧みな料理さんとあり、芸妓さんと妹さんの仕方の



芝居辨當幕の内

文久仙人

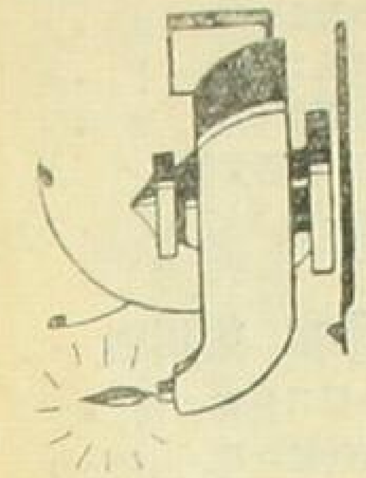
九月の例會へ久々にて珍らしく石井泰次郎さんが見へられお話中、三村竹清さんが幕の内の論爭は如何なりましたと問はるゝと、石井さんがあれはあれきりでけりがついたやうですと言はれたから、自分が横合から口を出し幕の内と申すと芝居辨當の事ですかといふと、さやう其起源についてゞすといはるゝから、自分は起源なぞやかしい事は存じませんが、あれはあけすけに辨當といふのを避けた隠語で、幕の間の食事である處から、ひんよく幕の内といひ出したので、かの便所を憚りといつたやうなものと同じと思ひますが、あの幕の内は自分は幼少の時からふるいなじみでよく知つてゐますのは、自分の祖父の妾のお美乃といふのが、猿若町で芝居茶屋をしてゐて家號を屬屋といひました、自分はまだ三四歳の頃でしたから見物にあきますので、チョイ〳〵女中に連れられて料理場へ行つて遊びました、其頃聞いた話に幕の内の菜は日毎に出來る鰹節の出しがらで一晩茹でゝから煮染めるといふ事でした、幕の内の特色は粗末な材料を調理の仕方で美味に喰はせる點でありましたといふと、石井さんが材料の種類を問はるゝから、燒豆腐、蒟蒻、干瓢、椎茸、蒲鉾で、飯は圓く三分位の厚さに打ち拔きうつすらと火にあぶつたものですとお答へしました。

昔は芝居町の料理は佗の會席料理とは一種異つてゐて、食通の人達は芝居を見ずに芝居茶屋へ料理丈を喰べに行つたものださうです、祖父は自分が六歳の夏急病で歿したので、其後は内外多事で芝居どころではなかつたので、猿若町へも足が遠くなりましたが、明治五年十月新富町へ守田座の移つた時、久々にて茶屋は昔馴染の梅林から行つて見物しました。其頃はまだ幕の内の特色は依然存してゐました、それが明治十何年守田座の改稱前後からして新富座の全盛代には上辨といふのが出來て、菜は車海老、照燒、菜の浸し物、玉子燒、蒲鉾の類で、飯は打拔きをやめ散らしとなりました。從來の幕の内は一概に下辨の稱をつけられ、名實俱に下等のものとなつて終つた。是は燒豆腐や蒟蒻なら、態々芝居へ來て喰ふには及ぶまいといふので更改したのでせうが、廉價を旨とする下辨となつてしまつては料理の特色を味ふ者は地を掃ひ名物幕の内は遂に失はれて終つたのです、それもその譯で舊來通り茶屋で腕利きの番公を抱へて料理する者は段々なくなり渾べて仕出し屋からとる樣になつて終つたので、料理はどの茶屋も甲乙なしになつて終つたが、其内梅林丈は古るい江戸氣質の老婆が八釜しくいつてゐる内は、外の茶屋と違ひ料理も落しませんでしたと、未だに腹の蟲が覺へてゐます、十一月の例會は役者に關するものが課題であるのに思ひ及び、つまらぬ話ですがお笑草に記臆をたどり書記しました。

南傳馬町二丁目けぬきすし横町松川町角の豆腐細工所吉多の引札の項目を擧げてみる。唐豆腐、かんろとうふ、松竹梅あげ、玉子とうふ、松前どうふ、むすびあげ、がんぜきどうふ、はつねどうふ、百色あげ、うつろとうふ、松露とうふ、笹の雪、ごまとうふ、つみ入とうふ、あん入あわ雪、明ほのとうふ、ちくわとうふ、うたあわゆき、切だしとうふ、かまほことうふ、もろこしあは雪、きせとうふ、源平とうふ、ごま入あは雪、箱てらとうふ、金銀とうふ、べつかうやき、しきしとうふ、觀あげ、しのやき、よふとうふ、きんちやくあげ、みしんやき、梅ぼしとうふ、海そあげ、四方やき、かばやきとうふ、きんかんあげ、松川やき、月夜とうふ、しぶあげ、今出やき、七色どうふ、吉原あげ、つとやき、うどんとうふ、がんもどき、むしやき、六丈とうふ、五もくあげ、けんちんまき、たいどうふ、みなとあげ、みなとまき、むら雲どうふ、おぼろあげ、らんぐいまき、さくらとうふ、雪月花あげ、しのたまき等あり。豆腐百珍と對照してみんも一興あるべし。（落々子）

北宋范寛原畫『谿山行旅』之圖（明董其昌模寫）

印刷編輯發行人　加　藤　信　正



此の書目年表は象松道詠集と良寛の歌の著者渡山萬里氏の調べである。氏の良寛に關心を持たるゝこと數年。本表を本誌に載せた所以は、近湖同業の士の御力に頼り益々此を全きものにせんの氏の願ひと、近年盛なる良寛研究の概觀を讀者の前に展開せんとする編者の意圖との爲である。

（猶本表は東京出版のみの調べである—。（丸山）

良寛和尚研究書年表

第一表　單行本

明治年間		
一二・三	僧良寛歌集（村上半枚）	小林二郎
二六・一〇	僧良寛詩集（小林二郎）	精華堂
二五・一二	僧良寛歌集（小林二郎）	精華堂
四一・三	沙門良寛歌集（大宮季貞）	敬和社
大正年間		
三・四	擬若御社閑上と良寛（小林存）	新潟萬松堂
三・一	北越偉人沙門良寛全傳（西郡久吾）	目黒書店
三・五	北越名流遺芳（全二冊）（今泉鐸次郎）	目黒書店
五・四	短歌私鈔（齋藤茂吉）	白日社
六・四	續短歌私鈔（齋藤茂吉）	岩波書店
七・三	良寛和尚詩歌集（相馬御風）	春陽堂
七・三	良寛全集（玉木禮吉）	良寛會
七・三	良寛遺跡（良寛會）	良寛會
七・五	大愚良寛（相馬御風）	春陽堂
七・一〇	歌人良寛（池田和工）	新潟萬松堂
七・一一	北越詩話（上下）（坂口仁一郎）	目黒書店
八・八	良寛和尚遺墨集（相馬御風）	春陽堂
八・一二	近古禪林叢談（森大狂）	藏經書院
八・一二	增補短歌私鈔（齋藤茂吉）	春陽堂
九・一二	良寛和尚尺牘（相馬御風）	春陽堂
一一・五	堂水良寛（大坪草二郎）	春秋社
一三・八	良寛元政泉能選集（野々村修議）	京文堂
一四・一	新釋良寛和尚歌集（相馬御風）	紅玉堂
一四・四	名僧の人生觀（人生哲學研究會）	越山堂
一四・一〇	良寛（松田青針）	春陽堂
一四・一一	一茶と良寛と芭蕉（相馬御風）	春秋社
一五・一二	良寛和尚萬葉短歌抄（相馬御風）	春陽堂
昭和年間		
三・一〇	良寛坊物語（相馬御風）	春秋社
四・二	良寛全集（大島花束）	岩波書店
四・五	新釋日本文學叢書第二輯九巻「近代名家歌集」（川俣馨一）	日本文學叢書刊行會

北宋 范寛 原畫
『谿山行旅』之圖
明 董其昌 模寫

四・五　良寛遺墨集（佐藤吉太郎）
四・一一　第一書房
四・一一　講譯良寛詩集（相馬御風）　春陽堂
四・一一　校註國歌大系第十七卷　國民圖書株式會社
四・一一　良寛歌集（山崎謙）
四・一一　少年良寛和尚の生涯（高野盛義）　大同館書店
五・二　貞心と千代と蓮月（相馬御風）　春秋社
五・五　良寛さま（相馬御風）　古今書院
五・五　良寛と蕩兒（相馬御風）　實業之日本社
六・七　左千夫歌論抄（齋藤茂吉）　岩波書店
七・三　短歌家集講話篇（土屋文明）
講座　良寛歌集講話（相馬御風）　改造社
八・二　良寛と愚庵（大坪草二郎）　四條書房
八・七　長歌を良寛を語る（中村唯一）
通じて良寛坊と蓮月尼草（三上知志）　文正社
八・八　良寛坊と蓮月尼草（大島花束）　大乘社
八・八　譯注良寛詩集（原田勘平）
八・八　校注良寛歌集（大島花束）　岩波書店
八・九　良寛上人遺墨集　良寛上人遺墨頒布會編
八・一一　良寛上人遺墨集　良寛上人遺墨頒布會

第二表　良寛研究に關係ある單行本

大正年間

五・七　凡人淨土（相馬御風）　新潮社
六・八　田園春秋（相馬御風）　春陽堂
八・八　童馬漫語（齋藤茂吉）　春陽堂
一〇・四　短歌立言（太田水穗）　岩波書店
一〇・五　砂上漫筆（相馬御風）　春陽堂
一〇・七　洗心雜話（北原白秋）　アルス
一一・一〇　俳壇十年（荻原井泉水）　小西書店
一二・二　愚庵和尚其他（相馬御風）　春陽堂
一二・四　七愚集（蓮沼文範）　有宏社
一二・六　對山雜記（相馬御風）　人文社
一二・一〇　第二赤彦童謠集（島木赤彦）　古今書院
一三・九　雜草苑（相馬御風）　高陽社
一四・九　靜夜歌話（橋田東聲）　春秋社
一四・一二　野を歩む者（相馬御風）　厚生閣
一五・八　道（荻原井泉水）　中外出版株式會社
一五・一一　第二の自然（相馬御風）　春秋社
昭和年間
二・一一　靜と動との間（相馬御風）　春陽堂
六・五　鄉土に語る（相馬御風）　春秋社

第三表　新聞に見えたもの

明治年間

四〇・　宗武の歌と良寛の歌（伊藤左千夫）　日本新聞
昭和年間
三・五　良寛坊物語（相馬御風）　東京朝日新聞
五・一　良寛百年忌に就いて（相馬御風）　讀賣新聞
五・八　良寛詩碑系魚川町に建つ　東京日々新聞
五・九　良寛の詩碑に就いて（武田孫一郎）　越後タイムス
五・九　良寛は禪師（梶尾泊如）　越後タイムス
五・一一　寂しき人　良寛を思ふ（奥平祥一）　越後タイムス
八・一　良寛と實朝（上田英夫）　短歌新聞

第四表　良寛研究に關係ある雜誌

明治年間

三三・一二　病床讀書日記（正岡子規）　ホトトギス
大正年間
三・六―十一　良寛和尚短歌私抄（齋藤茂吉）　アララギ
六・五　大愚良寛（承前）（相馬御風）　早稲田文學
六・九　良寛遺跡巡り（相馬御風）　早稲田文學
七・一　良寛に就いて（井上雪子）　水かめ
七・三　圓熟期の良寛（相馬御風）　早稲田文學
七・四　良寛の歌の價値を論ず（三井甲之）　詩歌
七・四　大愚良寛に就いて（相馬御風）　中央文學
七・七―八　剪燈雜談（岩谷莫哀）　水かめ
七・一一　花田比露思問答（花田・三井）　日本及日本人
八・一一　良寛の歌一首（齋藤茂吉）　アララギ
八・一一　良寛和尚の歌に就いて（相馬御風）　短歌雜誌
九・三　妙現尼の歌（相馬御風）　早稲田文學
九・四　砂上漫筆（相馬御風）　早稲田文學
九・五　良寛の手紙に就いて（相馬御風）　佛教美術
九・九　良寛和尚の書の特質に就いて（相馬御風）　日本美術界
九・一〇　短歌立言（太田水穗）　潮音
九・一一　短歌立言（太田水穗）　潮音
一〇・二　良寛の歌に就いて（齋藤茂吉）　潮音
一〇・二　傘松道詠集と良寛（四賀光子）　アララギ
一〇・七　良寛と大村光枝（相馬御風）　潮音
一〇・一〇　良寛さまの反古（內藤策）　心の花
一一・一二　良寛の歌稿ふるさと（相馬御風）　短歌雜誌
一二・四　私は良寛を好む（橋田東聲）　心の花
一二・四　感想漫錄（相馬御風）　短歌雜誌
一二・四　良寛の交友に就いて（澤式）　心の花
一二・七　花ぬすびとに就いて（四賀光子）　心の花
一三・一　良寛の歌に就いて（相馬御風）　潮音
良寛雜考（相馬御風）

北宋范寛原畫「谿山行旅」之圖（明董其昌模寫）

五・九　良寛は禪師にあらず（梶尾泊如）
五・一一　寂しき人良寛を思ふ（東平祥一）
八・一　良寛と實朝（戸田英夫）　越後タイムス　越後タイムス　短歌新聞

第四表　良寛研究に關係ある雜誌

明治年間
三三・一二　病床讀書日記（正岡子規）　ホトトギス
大正年間
三・六―十一　良寛和尚短歌私抄（齋藤茂吉）　アララギ
六・五　大愚良寛（承前）（相馬御風）　早稲田文學
六・九　良寛遺跡巡り（相馬御風）　早稲田文學
七・一　良寛に就いて（井上雪子）　水かめ
七・三　圓熟期の良寛（相馬御風）　早稲田文學
七・四　良寛の歌の價値を論ず（三井甲之）　詩歌
七・四　大愚良寛に就いて（相馬御風）　中央文學
七・四　剪燈雜談（岩谷莫哀）　水かめ
七・七―八　花田比露思問答（花田・三井）　日本及日本人
七・一一　良寛の歌一首（齋藤茂吉）　アララギ
八・一　良寛和尚の歌に就いて（相馬御風）　短歌雜誌
八・五　妙現尼の歌（相馬御風）　早稲田文學
九・三　砂上漫筆（相馬御風）　早稲田文學
九・四　良寛の手紙に就いて（相馬御風）　佛教美術
九・五　良寛和尚の書の特質に就いて（相馬御風）　日本美術界
九・九　短歌立言（太田水穂）　潮音
九・一一　短歌立言（太田水穂）　潮音
一〇・二　良寛の歌に就いて（齋藤茂吉）　アララギ
一〇・七　傘松道詠集と良寛（四賀光子）　潮音
一〇・一〇　良寛と大村光枝（相馬御風）　心の花
一一・一二　良寛さまの反古（内藤策）　短歌雜誌
一二・四　良寛の歌稿ぶるさ（相馬御風）　心の花
一二・四　私は良寛を好む（橋田東聲）　短歌雜誌
一二・四　感想漫錄（相馬御風）　心の花
一二・四　良寛の交友と就いて（澤寸）
一二・七　花ぬすびとに就いて（四賀光子）　潮音
一二・一　良寛の歌に就いて（相馬御風）　潮音
一三・一　良寛雜考（相馬御風）　短歌雜誌
一三・三　良寛一夕話（相馬御風）　心の花
一三・六　傘松道詠愚案抄一（石橋鶏衣）　心の花
一三・八　傘松道詠愚案抄二（石橋鶏衣）　心の花
一三・九　良寛と貞心尼（相馬御風）　朔王樹
一四・一　良寛雜考（相馬御風）　朔王樹
一四・一　良寛短歌輪講六（相馬・鄉倉・橋田）　朔王樹
一四・一　良寛の秋の歌から（相馬御風）　短歌雜誌
一四・四　良寛嶮ひの川田順君　短歌雜誌
一四・四　五合庵時代の良寛（橋田東聲）　朔王樹
一四・六　良寛輪講傍講三（阿部旭南）　朔王樹
一四・七　良寛の研究一（秦秀雄）　國語と國文學
良寛の研究完（秦秀雄）　國語と國文學

八・八　譯注良寛詩集（大島花束）（原田勘平）　岩波書店
八・九　校注良寛歌集（大島花束）　岩波書店
八・一一　良寛上人遺墨　良寛上人遺墨頒布會編　良寛上人遺墨頒布會

第二表　良寛研究に關係ある單行本

大正年間
五・七　凡人淨土（相馬御風）　新潮社
六・八　田園春秋（相馬御風）　春陽堂
八・八　童馬漫語（齋藤茂吉）　春陽堂
一〇・四　短歌立言（太田水穂）　岩波書店
一〇・五　砂上漫筆（相馬御風）　春陽堂
一〇・七　洗心雜話（北原白秋）　アルス
一一・一〇　俳壇十年（荻原井泉水）　小西書店
一二・二　愚庵和尚其他（相馬御風）　春陽堂
一二・四　七愚集（蓮沼文範）　有宏社
一二・六　對山雜記（相馬御風）　人文社
一二・一〇　第二赤彥童謠集（島木赤彥）　古今書院
一三・九　雜草苑（相馬御風）　高陽社
一四・九　靜夜歌話（橋田東聲）　春秋社
一四・一二　野を歩む者（相馬御風）　厚生閣
一五・八　道（荻原井泉水）　中外出版株式會社
一五・一一　第二の自然（相馬御風）　春秋社
昭和年間
二・一一　靜と動との間（相馬御風）　春陽堂
六・五　鄉土に語る（相馬御風）　春秋社

第三表　新聞に見えたもの

明治年間
四〇・　宗武の歌と良寛の歌（伊藤左千夫）　日本新聞
昭和年間
三・五　良寛坊物語（相馬御風）　東京朝日新聞
五・一　良寛百年忌に就いて（相馬御風）　讀賣新聞
五・八　良寛詩碑糸魚川町に建つ　東京日々新聞
五・九　良寛の詩碑に就いて（武田拓一郎）　越後タイムス

北宋　范寛原畫「谿山行旅」之圖

（明　董其昌臨模）

四・五　良寛遺墨集（佐藤吉太郎）　第一書房
四・一一　調譯良寛詩集（相馬御風）　春陽堂
四・一一　校註國歌大系第十七卷　國民図書株式會社
良寛歌集（山崎藍）

一四・七　良寛禪師歌抄（堀内松三）
一四・九　良寛和尚の生涯（秦秀雄）　新泉社
一四・一二　「焚くほどは…」といふ句に就いて（田島編重）　國語と國文學
一五・二　良寛の自責歌と道元禪師（笹川露香）　短歌雜誌
一五・二　良寛和尚の生涯に就いて二（秦秀雄）　國語と國文學
一五・三　良寛和尚の生涯に就いて三（秦秀雄）　國語と國文學
一五・四　良寛和尚の生涯に就いて完（秦秀雄）　國語と國文學
一五・四　始めて知つた良寛歌集古寫に就いて（相馬御風）　國語と國文學
一五・七　良寛と曙覽（橋川正）　懸　葵
昭和年間　良寛和尚と萬葉集（相馬御風）　早稲田文學
二・一　越後へ歸る良寛（相馬御風）　大調和
二・四　僧良寛の歌（伊藤左千夫）　アララギ
二・六　糸魚川に於ける良寛忌（木蘇會）　青杉
二・八　良寛雜考一（奥平祥一）　青杉
二・九　良寛雜考二（奥平祥一）　青杉
三・三　童謡良寛さま（島木赤彦）　童謡詩人
三・六　良寛とその歌（吉川浩堂）　觀想
四・五　良寛と子守（坪内逍遙）　中央公論
四・一〇　良寛漫談（相馬御風）　短歌月刊
五・七　良寛の人生觀（内田杏城）　龍燈
五・八　五合庵の開基萬元（相馬御風）　心の花
・　とその歌一（相馬御風）
・　五合庵の開基萬元（相馬御風）　心の花
五・九　とその歌二
五・一〇　曙覽と良寛（奥平祥一）　青杉
五・一〇　良寛特輯號　宗教と藝術
五・一〇　良寛さま（宮崎安右衛門）　青杉
五・一一　良寛のことども（柾村喬）　心の花
七・一　五合庵の開基萬元（相馬御風）
七・一　とその歌集蕘汐草（貞心尼）　野を歩む者
七・一　貞心尼時代の良寛（鐵京造）　吾妹
七・一　五合庵時代の良寛（大亦觀風）　青垣
八・一　蓮月と貞心と千代一（大亦觀風）
良寛に贈つた鵬齋の詩（相馬御風）野を歩む者
八・七　柿の蔕（備中玉島圓通）（花田一重）藝術殿
八・一〇　良寛（吉田結二郎）
九・二　良寛遺跡巡り一（齋藤清衛）　短歌研究
九・五　良寛遺跡巡り完（齋藤清衛）　短歌研究

第五表　良寛研究に關係ある雜誌

（發行年月日未詳のもの）

寂厳と寛良（松岡讓）　詩聖
良寛と蕩兒（相馬御風）　中央公論
私の良寛研究（相馬御風）　文章世界
五合庵に於ける大愚良寛（矢田夜琴）　俳三昧
良寛の歌（木村卯之）　懸　葵
良寛上人の餘技（長尾素枝）　俳味
良寛の事（赤松月雄）　新小説
良寛和尚の歌に就て（宮脇義臣）　あさみどり　一三〇號
良寛和尚の書に就いて（荻原井泉水）　日本及日本人
良寛和尚の書に就いて（安田親彦）　藝術
良寛和尚の衣食住に就いて（相馬御風）潮音
良寛の父山本以南に就いて（佐藤吉太郎）潮音
良良の歌と古今集（四賀光子）　潮音
芙蕉と良寛（太田水穂）
芭蕉と諗貞尼良寛と貞心尼（相馬御風）　潮音
良寛雜考）相馬御風）　早稲田文學
良寛和尚逸話（相馬御風）　早稲田文學
良寛雜考（相馬御風）　早稲田文學
越後へ歸る良寛（相馬御風）　大調和
良寛のおかしみ補筆（西尾實）　國文教育
良寛雜纂（大島花束）　とねりこ
良寛のことども（相馬御風）　とねりこ
良寛の詩二三（相馬御風）　とねりこ
萬葉集講座第四卷史的研究編「良寛」（相馬御風）　春陽堂
靜夜歌話（橋田東聲）　春秋社
ふるさと（遺墨）（安田親彦）
北越奇談（全六册）（橘茂也）
北越遊業
近世偉人傳（沼生重意）
市賞文編
大日本人名辭書
帝國人名辭典
日本佛家人名辭典

昭和九年十月上旬起筆

甲戌殺錄

七